中等教育
明治
87 7 1
内務
明治三十六年五月廿二日第三種郵便物認可
明治三十七年四月十日發行（毎月一回十日發行）

◉戰時教育の參考書◉

育成會編纂

新刊

戰時講話

菊版 定價金四十錢
第一輯 郵稅金六錢

◉現時教壇上の一大參考書！◉有益にして趣味多き教育の資料！

◉日露の戰爭漸く酣ならむとして國民に擧國一致竝意其這大の目的を達せん事に勉めつゝあり●部部到る處の諸學校に於て戰時講話の催しあるべき態度は最も謹嚴愼重に且つ其講壇上に立ちては教育家の把るべき態度に關し機宜に適せる措置と云ふべし●此際教育家たるもの子弟教訓の上に於て充分の成果を得んと欲せば戰時に於ける指導の注意を拂はざるべからず●此際教育家たるもの子弟教訓の上に於て充分の成果を得んと欲せば戰時に於ける萬般の現象を知得してそれに適應せしむる所謂大家の講演に係り要を悉くし理を明かにす訳なく活用せざるべからず●本書記載する所皆諸大家の講演に係り要を悉くし理を明かにす訳なく多大の趣味と感興とに富み其如何に有益必須のものたるかは諸君の必ず首肯せらるゝ所ならむ

◉第一輯目次概要◉

▲戰時の教育　文學博士　井上哲次郎君
▲露國の外交　法學博士　中村進午君
▲戰爭と人種と宗教　文學博士　姉崎正治君
▲露國の政治　衆議院議員　前同志社長　横井時雄君
▲露西亞の植物　東京帝國大學　理學博士　松村任三君
▲露西亞の地理　東京高等師範　教授　理學士　山崎直方君
▲彼得大帝の遺訓　文學士　高桑駒吉君
▲支那東部より亞細亞露西亞に跨る人種　人類學者　鳥居龍藏君
▲普佛戰爭とフィヒテ　在大學院　文學士　加藤玄智君
▲其他有益多種の記事數十項！

新刊

女子高等師範教授下村三四吉先生編

日露開戰の由來

菊版 定價金貳拾錢
全壹冊 郵稅金四錢

◉歷史教授參考用◉講堂訓話參考書

◉試みに吾等の中彼の明治廿七八年に於ける日清開戰の由來を問はれて明瞭の答をなし得るもの幾人かある●日露破裂の現象は幾多の戰爭誌により社會に紹介せられて遺憾なきも其由來を詳かにせるは極めて稀なり●凡そ事は只其現象の花やかなるに眩せられて何が斯る現象を生みしかを正確に知るなければ歷史は遂に人生に向つて何等の功なく益なきものに歸せんのみ●本書は實に帝國文科大學に於て專心一意史學の蘊奥を突めたる下村三四吉先生が快刀紛糸の筆腕を以て著述せられしものなり●本書は歷史教授上にも後日の參考書としても亦吾人の頭腦に日露開戰の正確なる觀念を形成する上にも極めて必須の者なりと●本書は學育の天職を報ぜらるゝの士と學生とは勿論其他あらゆる江湖諸君の必ず坐右に一本を備ふべきの好著たるを疑はず

發行所　東京市本郷區森川町一番地　育成會
（電話下谷二四一四番）

目錄

中等教育
第二期第六冊　譚叢

英國
王室ゴールドスミス

米國の
富豪カーネギーの傳

大學
長の若き學生に對する話

ロセッチ

十九世紀
の王室　テイツケンス

冬の夜がたり

鐵血宰相
鐵血宰相の談

本多少將一師

楠正儀の德風

丘氏武王

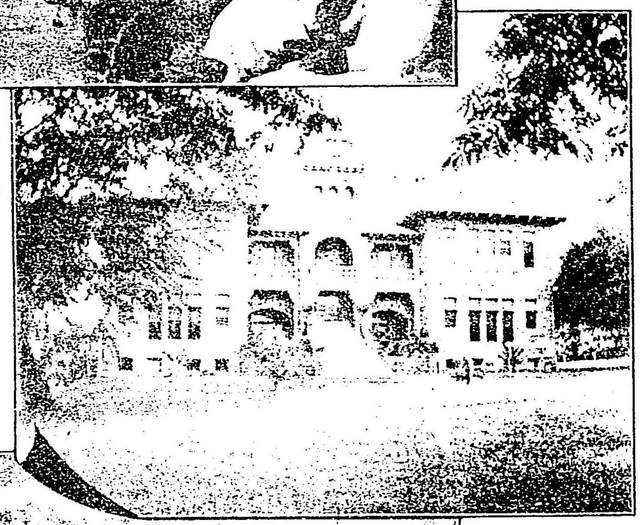
文豪スコット
テイッケンスの苦學時代
羅馬法王レオ十三世
諸葛孔明の話
スコットの青年時代
プラトー物語
前英口首相ソオルスベリ侯

ジヤンクソン將軍
哲學者の日記
テイッケンスの活動時代
海賊船
烈女阿藤を讀む
南海の偉男子坂本龍馬
聖誕祭

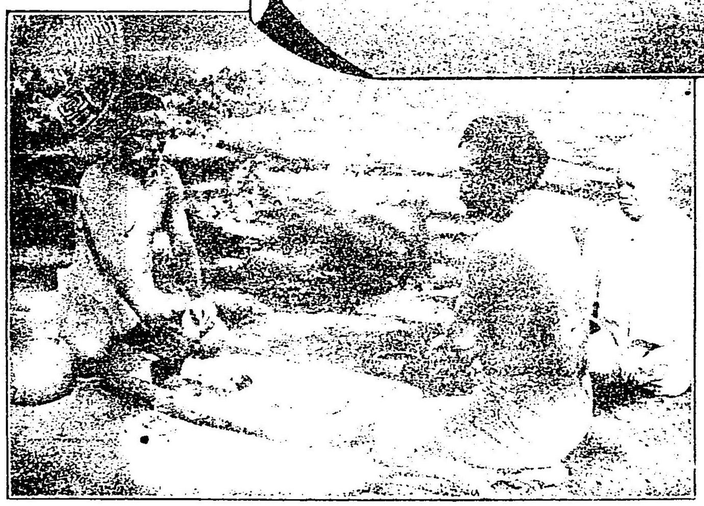
少年慈善家
奏西諸家三身譚
希臘神話アゼンスの由來
青年時代のワグネルの話
寒燈餘錄（福井小柳夫人ヲ憶フ）
ルーテルを其母
英口の碩學スヤンサー氏

詩人シルレル
近衛霞山公
日露衝突の発端
露西亜の詩人
大坂城

布哇の花賢娘



布哇の中學校



布哇人「ポイ」食品を作る圖

朝鮮京城南大門

（會員　草間時光氏寄贈）

韓人中流の家族

譚叢

英國の文豪ゴールドスミス

文學士　中西芙蓉

▲ゴールドスミスの爲人

ゴールドスミスの爲人——ゴールドスミスと其の祖先——ゴールドスミスの[illegible]なる詩の寶庫

ゴールド、スミス（Goldsmith）。彼は、實に至誠の人であつた。眞にアイルランド人を代表するに足る、多感多情の人であつた。

彼は實に其の心の基礎を人道の上に立てゝ居る其のうへに、まことに百折不撓の魂を保つて居たのであつた。されば彼は、いかなる世變に遇つても、更らに其の心を動かさるゝことは無く、胸中いつも洋々春の如き心を保つて居たを

GOLDSMITH.

である。彼は決して身を順境に置いた人では無い。實に何時も逆境にばかり立つて居た。が、それにも關はらず、彼は其の胸中より、一片皓々たる人道を忘るゝことが出來なかつたのである。彼は實に、如何に甚しき逆境に其の身を置くとも、絶えず其の胸中に藏せる、眞神、上帝に近き至誠の心を失なふことを爲し得なかつたのであつた。

彼は、其の覺束なき筆の命毛に依つて、僅かに日々の覺束なき生計を立てつゝ、絶えず其の身に降りかゝる凡百の苦き經驗は、まことに不思議なことにも、丁度凡人とは反對に、たへて其の心を酷薄にして複雜なる人とならしめぬのみか、いよ〳〵ます〳〵其の玲瓏たる心をして玉の如く圓かに水の如く淡泊ならしめ、温き情に充たしめ、寛大ならしめたことであつた。要之、いかなる苦き浮世の事物が其の身を圍繞するとも、彼は生れ得たまゝの天眞を沒することを

得爲なんだのである。

かゝる性質を保つて居た彼は、自分をはじめ、その家族すら、大いに他から助力を乞はねばならぬような逆境に陷つて居る場合にも、他の不幸なる人々に同情を寄せ、その身の皮を剝いでも、かゝる不幸なる人々を助けることに怠らなかつたのであつた。筆者は、彼自身がものせる詩、そのものゝ如きゴールドスミスの凡ならず麗はしき心、その作ヴキーカー、オヴ、ウエーキフィールド(Vicar of Wakefield)の如き彼の道德高き一生をば、此の上に賞贊すべき筆を持たないのである。

吾人が、こゝにゴールドスミスを紹介して見ようと思ふのは、かゝる神々しき心を心とせる文豪の一生は何のようであつたかを述べ、聊か青年立志の栞ともなし、その一刺戟に供したいからのことである。

▲ゴールドスミスと其の祖先

ゴールドスミスはアイアランド(Ireland)に於ける、いとやんごとなき一族を其の祖先とするものであつた。而して其の祖先の多くは孰れも神に其の身をさゝげた人々であつた。

ゴールドスミス、彼自身は其の母方の祖先が、彼の有名なるオリーヴアー、クロムウエルの遠き後を受けついで居ることをば、しきりに誇つて居て、そのクリスチャン、チームのオリーヴアーであるのは、全く之れが爲めだと、此のように云つて居る。けれども之れは眞實とは思はれぬ。

オリーヴアー、ゴールドスミス。彼が生れた頃には、其の父なるチャールス、ゴールドスミスは極めて貧しき牧士をして居たのであつた。それで彼の生れたのは、彼の兩親が十二年來も住みなれて居たアイアランドのパラスモア(Pallasmore)といふところであつて、西曆一千七百二十八年の十二月十日、これは彼の誕生の年月である。

彼の兩親には五男三女があつたが、オリーヴアーは、實に其の次男であつた。その兄はヘンリーと呼ばれ、後年、西キルケニーの牧士となり、リツソイといふ處に住んで居た。ゴールドスミスの詩のうち『旅人』(Traveller)と呼ばるゝものゝうちに、此の地名は出て居るのである。

▲ゴールドスミスの誕生地

ゴールドスミスの誕生地なるパラスモアーと云へるは、僅かに二三の農家があるばかりの、眞の僻村に過ぎぬほどのものであつた。而かも其の村たる、本街道からは、右へ左へ九十九折の小徑を三里も距り、至つて閑寂なところであつたのであつた。

而かも、其の地たる一片の平地で、樹も疎々生へては居らず、その上、極めて小數の小作人に依つて耕されて居るのであつた。加ふるに現今は、荒れに荒れて、草生ひ茂り、石多く、殆んど形容の爲難いほどの處である。彼、ゴールドスミスが其の初發聲を擧げたのは誠に此の草深い僻村であつた。

古往今來、詩人の多數は、大概思ひも寄らぬ不思議な場處に生れて居る。けれども、その一生の大半を雜沓ロンドン府の如きところに過した彼のゴールドスミスが、かゝる人聲稀れなる一寒村のうちに生れたといふのは、誰れしも頗る意外とするところであらうと思ふ。

此のような僻村で、取り分け自然の趣に富めるでもなき此の寒村のうちには、斷して詩人の夢を宿すべき材料のあるべき道理はない。が、極く稚きころ、ゴールドスミスは其の一家の都合上、この寒村を見捨てゝ、他へ引き移つたことである。

その一家の事情といふのは、彼の父が其の妻の伯父の死後を受けついで、西キルケニー敎會區の長老となつたからであつて、即ち詩人の誕生後二年にして、詩人の父は其の一家を擧げて、リツソニ

トといふ土地へ引き遷つたのであつた。が、其の轉居後も詩人は屢〻、その兄と共に此のバラスモアーを訪れたといふことである。

▲豐なる詩の寶庫

ゴールドスミスが父母兄弟諸共に引きうつゝた此のリツソニーの地は、實に詩人の瞑想を値すべき美しき天地であつた。此の地には詩人の墳墓があるだけ、それだけ實に麗しい土地であつた。實に此の地は彼に取つての「豐かなる詩の寶庫」に價するといつて宜しく、此の文豪永眠の地に最も相應しいといつても宜しいのである。

此の地は實に、此のアイアランドの農夫等が往來する通路に當つて居り、破れはてた古城、荒れはてゝは居るが、その昔の面影を恐ぶべき公園は現今も尙は殘つて居るとのことであつて、これ等は實に眼を喜ばしむるに足るべきものだといふことである。ゴールドスミスが、其の稚き空想を樣々に驅り催うし、思ふ樣の想像に耽つたのは、實に此の土地であつたのである。彼れの詩中の有名なる一篇『寒村行』(Deserted Village)のうちに歌ひ込んだ材料は、此の土地の其處や彼處に殘つて居るのである。否、彼は彼の『寒村行』のうちに、盛んに此の土地を謳歌したのでもあつた。

ゴールドスミスの傳記は、これから初まるのである。が、この號には之れだけに止めて置き、次號には標題を新たにして、この英國文豪の面影を寫して見ようと思ふ。

米國の富豪カーネギーの傳

鷹城生

一、出生及び家庭——二、三人の崇拜者——三、米國移住——四、糸捲小僧——五、工場煙突の火夫——六、信使——七、電信技手——八、鐵道會社員——九、小資本家——十、從軍——十一、寢臺附客車——十二、石油事業——十三、鐵工事業——十五、慈善家——十六、スキボ城裡の閑居

世界開闢以來未だ多く其比を見ずと云ふ、米國の富豪アンドリユ、カーネギーは、今や洋の東西を通して氏の成効をば語る事は殆ど流行の如くに爲て居るのである、氏が昨年六月其著「實業の帝國」と云ふ一書をば世に公にするや、天下の讀者は爭ふて之れを求め洛陽の紙價をして爲めに高からしめたのであつた、之れは氏の學說の創見あるのでもなく其の記實の如きは寧ろ粗漫の評をば免かれぬのであるが、

何にしろ之れ一ツ寒措大薜格蘭土の辟地に生れ、家計上の都合からして其の父母と共に米國に移住した程であるから、父母より幾多の財產をば讓受けたる事もなく、年僅かに十二才初めて木綿工場の糸捲小僧に雇はれ、一週僅かに一弗二十錢の勞金を受けたる身分から起き、今や財を積む事殆ど十億萬世界に比類のない大富豪とはなつた、此間五十有餘年未だ一回の失敗だにした事もなく、幾多の勞苦と勤勉と、而して熱情燒くが如く向上進取の精神とを以て奮躍したる自家親驗實歷の蹟をば眞摯切實に示して社會をば戒飾したる者であつて、彼の空理空想をばものして自ら快哉とする著述ではない、一讀洵に人をして感奮興起せしむるに足る者である、

而して又世人はカ氏を稱して止む能はずと云ふ所以は之れが爲めでない、氏が五十有餘年殆ど血と涙とを以て、自己の正直なる額に汗して積上げたる巨萬の財產をば一般世の富豪の如くに、此れをば慈愛の子孫に遺すと云ふのではなく、氏は自ら稱して「人の富有にして死するは恥辱なり」と云

ひ、氏が積上げたる巨萬の富は、氏が生前に於て此の言の如くに皆悉く揭げて、社會公共の有益なる事業に散じ盡くさんと熱心に畫策しつゝあるのであつて、云はゞ一種風變りの富豪であるのである、

故に今や此の意志堅固勤勉刻苦凡衆に超絶したる、氏の一擧一動は世界の耳目をは聳動せしむるの有樣とはなつて居るのである、吾人は此の大業大成の偉丈夫とは何如なる人物であるかを、讀者に紹介するは又裨益する所尠なからずであらふと思ふ。

一、出生及び家庭

カ氏は蘇格蘭土の東ファイア洲の西に當りて古來歷史的事跡に富みたるを以て有名なる、ダンファームリン市と云ふ舊都會に生れたのであつて、其時が丁度紀元千八百三十七年の十一月廿五日であつた、

父はウイリヤム、カーネギーと云ひ土地では相當の機業家であつて、當時四臺の織機械を持ち四五人の職工をも使用して居つた者である、母は純然たる蘇格蘭土の血脈を享け、其性質は沈毅熱誠にして、特に敬神の念に富だる婦人であつて、父の業務をば援け就中兒童をば敎育する事を以て己れが任務と爲たのであつた、カ氏が能く今日あるを得せしめたのは亦全く母の感化預りて力があるのであろふと思ふ、此外に氏に一種の感化力を與へたのは其叔父某であつた、故に氏は其頃の事をば述懷して云ふに、

元來余が家は所謂チャーチスト派であつて、俗界の帝王や貴族を見る事に重きをばをかず、余が家の天井裏には常に共和軍の旗幟さへ秘藏して置た程であるから、余の如きも何時しか此種の家風に薰陶せられた者と見え、其後今日でも王者や貴族の談があれば忽ち熱血胸中に躍りて來るのである、彼の數年前の事であつた、願くば全世界の王者と貴族をば悉く排除し了らむか

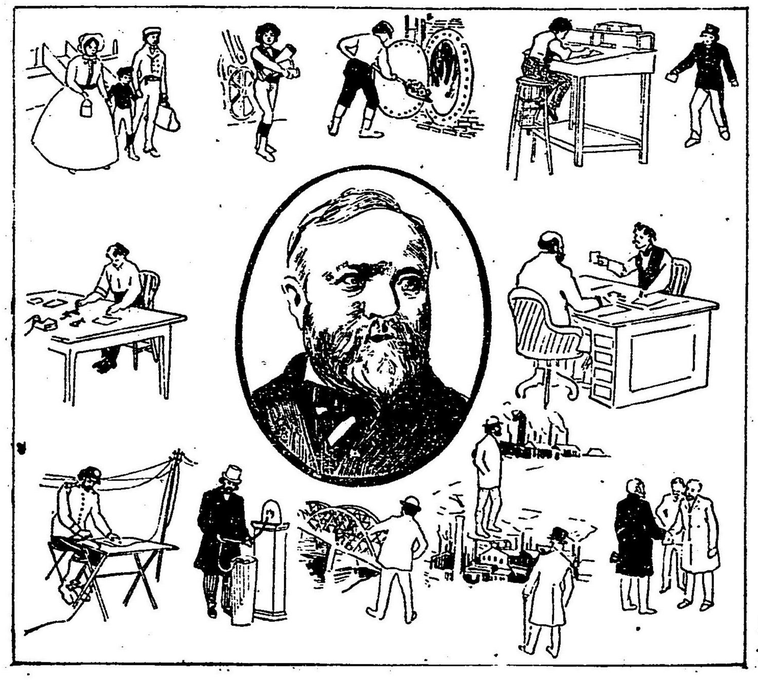
と迄も獨り自ら心で描た程であつたが、此等の感想をば養成せられたのは全く余が未た年僅に七歲の頃からであつたのであるから、現今でも貴族厭惡の念慮は到底除去する事は出來ない。

二、三人の崇拜者

亦カ氏には理想的崇拜の三人物があつた、彼の蘇格蘭土の獨立自由の爲めに、英王エドワード一世に反抗して、英將軍クレシンガムの大軍と奮鬪して、一時は英王をして戰慄せしめたが、其後不幸にも戰利あらずして破れ英軍の爲めに捕はれ、倫敦に護送せられて遂に千八百五年八月斷頭臺上の露と消えた愛國の勇士ワレース氏其人であつた、又十四世紀の初め頃やはり、英王エドワード二世十萬の大軍を率ひて、蘇國をば征討せんとせしとき僅かに一萬足らずの兵を以て之れをバンノックバーンと云ふ所に迎撃ちて、終に大勝利をば得たる傑王ロバートブルースであつた、此の二人は蘇國の愛國者として勇傑の士として崇拜して居つたのである、其外最後の一人は彼の蘇國の詩人として有名であつた、自由獨立平等を歌ひ、或は又勞働の神聖なる事を歌ふて、幾多の蘇國の少年を鼓舞し將た慰藉した熱血詩人ロバアトバアンス其人であつた、さればカ氏は幼時から民主自由主義の叔父と、慈母の感化を蒙り以上の三人の遺風をば享けたのは確かである。

三、米國移住

カ氏十一歲の未だ少年の時に、此の春風靄々たる家庭に家計上の困難が起つた、そは十九世紀文明の賜物なる蒸汽が機業の動力に使用せらるゝに至つたので、從來のような小規模の緩漫極まる、而かも小資本にて僅かに人力を以て機器をば廻轉するが如き仕掛では、到底蒸汽力とは競爭して其業をば維持して行く事が出來なくなつて、カーネギー一家の如きも之の影響をば受けて零落せざるを得ざるに到つたのである、氏が當時の事をば人に語つて云ふには、



カーネギーの書歴史

一日余が父は悄然として外から歸りて來たから、小供なからも父の容貌をば窺ふに、如何にも落膽して居る樣子でもつて、家内一同をば集めて最早四方八方奔走しても引受く可き仕事は無しと、悵然大息した、そこで家族會議は開かれたけれども、誰あつて策の出す者もなく、一同涙をば呑むのみであつた、其時側にあつた余も悲歎やる方なく、實に斷腸の思であつたが、其頃は未だ頑是なき子供心ながら竊に自ら思ふた、縱令身は碎けて粉となりても、極力勉强奮勵して此の恐る可き貧乏の神をば永久我が家内から逐拂ふと、一心專念其後肝に銘して一日も之をば忘れたことはなかつた、

然かり恐る可き貧乏の神をば永久我家門から逐拂はんとの此誓願は、實に彼れをして今日あるを得さしめたる偉大なる成効の動機であるであらふ。かくカ氏の家は不運に出遇ふたれば、百方思案して祖先以來住馴れし故郷に止まり家計をば立てんとは思へども、如何せん百方盡きて結局一家は擧つて米國へ移住する事に決定して、彌〻機業をば廢止し、機臺は勿論家財道具をば一切悉く賣拂ひ、千八百四十八年と云ふに親子四人は相携へて新大陸の米國へ向け出發し、七週日間永の旅程をも一つの魔事なく、ペンシルベニヤ洲ピッツバーク市へと到着したのである、

其頃カ氏の親戚に當る一人がピッツバーク市に移住して、可なりの職業をば經營し居つた者があつたから、カ氏の家族は先つ其人の方へと身を寄せ、其身に叶ふ可き金儲の仕事をば探索して貰ふた處、丁度某木綿工場にて職工をば募集して居つたから、父ウイリヤム氏は早速之れに應じて工場に通勤し、僅かながらの工錢をば得て細々なから一家の生計をば立て得るようになつたのである、

四、糸捲小僧

春秋幾度か往來して、カ氏は十二才とはなり、氏は父の通勤せる、同一の木綿工場の糸捲小僧に雇

はれ、一週間の給料一弗二十錢をば受けとる身分とはなつた、此時第一週の終りに自ら額に汗して儲けた給料をば初めて得た時の喜悦の感想をばカ氏自ら記してあるを讀むと、

余は最早全く父母の厄介物ではない、家族組合の一員として此の一弗二十錢をば出費するの能力がある、實に余は社會有用の者であると思ふと自覺した、其後余は巨額の金錢をば取扱ふたが然かし未だ此際得た一弗二十錢程愉快に喜ばしき事はなかつた、

夫れは其筈であろふ、當時は今日の工場法で所謂兒童勞働半日制など云ふ者もなく、日曜日の外は毎朝星を戴きては起き、富豪の小供等が未だ暖かき寢床に安々として眠る中に、そこらそこらに朝餐をば喫し、風の朝も、雪の夕も、午餐の休憩四十分間をば除くの外は、殆ど奴隷的酷苦の過度の勞務に服し、日沒後世界一面暗黑界に入らされば我家へは歸る事も出來なかつたのであつた。

五、工場瀘罐の火夫

其後カ氏が親戚の知已であつた、蘇格蘭土人の其紡績工場をば創業した、カ氏未だ年十三才であつたのに、其の工場の火夫として雇用せられたのであつたが、其の勤務は前の糸捲小僧よりも一層苛劇であつて、又其の任たるや非常に重任であつたのである、幸に此の工場の燃料は石炭をば用ひず割木ではあつたが、然かし瀘罐内の水量、機關運轉の速度等は萬事宜しきをば得るようにせなければならぬは勿論の事であるが、若しも自己の過失によりて時機をば過てば、工場の全体をば擧げて粉碎せしめるような事なきにしもあらずと云ふの虞れもあるから、此の重任を帶びて居るカ氏は終夜一睡をも出來なかつた事が屢々あつたのである、或夜の深更の事であつた、我家の自分の臥床から枕を蹴つて飛出で、自ら蒸瀘玻璃管の熱度をば計かるような態度をば爲た事すらあつたそうである、如何に可憐なる年齡僅かに十二才の少年

が、此の重任苛酷の職業に對して注意周到に勤勉でありしか之れによりて充分に知る事が出來る、此時代の狀態をば氏の自著なる實業の帝國に記して云ふに、

斯の如き苦役をなす者は我一人ではない、實に我一家は皆這斯勞働に服しつゝあつたのである から、家族は皆此等の勞苦をは物ともせず、互に愉快に語り合ふて悦び決して歎聲などは發せず、又精神の挫折する如き傾きだにもなかつた、之れ我一家族は互に心を合せ勞苦の爲め自暴自棄挫折するよりも、寧ろ死の勝される事をば決心して居つたからである、

而して當時家内には勿論召使如き者は一人もなく、母上は終日勞働をば終へて後に内職として靴をさへ縫ひ賜ひて、毎週數磅の貯金をすら爲し賜ふたのであつた、

カ氏の家は能くそろひもそらうて勤勉家の集合であるが、彼等は不幸をも嘆する事なく勤勉力行、

欣然として能く其の業務に安んじ得たは胸中常に生々たる希望があつたからであらうが、カ氏一家が貧賤なるにもかゝはらず清健なる家庭であつたからでもあろふ、

六、信使

カ氏は此の極苦極痛であつた瀘罐火夫の任務をば、滿一ケ年間堪へ忍んだが、然かしかゝる劇務は何つまでも身体上續く者ではないと思ひ、又氏が慈愛に富みたる父母もそふ考へたのであれば、遂ひに火夫の劇務を辭して、同市の電信局の信使となつたのであつた、此時が年十四才である、地獄の苦しみにひとしき火夫の職から信使となつたのであれば、氏は自ら後日人に語りて云ふに、

恰も暗黑から光明に移り、地獄を捨て天國にでも行つたかの如き心地であつた、何となれば從來火夫の境遇とは打變りて、信使の身邊には書籍、新聞紙、ペン、鉛筆、などによりて取巻かれて居つたからである、

是等は氏にとりては總て新奇ならざるはなき者のみであるから、欣然として居つたが、鋭意なる氏は、此の期に於て大いに見聞知識をば養ふ事にのみ專ら努力したのである、然かし氏は爰に信使としての技手は非常に感服して、遂に氏を推擧して技手とならしめたのであつた、氏の聽神經は凡人よりも極めて鋭敏であつて、其の機械の丁々と云ふ音響を聞けば、電信の意味をば了解する事が出來たのである、當時は彼のホエートストン氏の電信が發明あつてから未だ十年餘であつたから、全合衆國中で之の音響をば聽別出來たのは僅かに二人しかなかつたそうであるから、氏は之れが爲めに二ケ月五磅の俸給をば受ける事とはなつたが、此時には未だ十六才の若年であつたのである、思ふに此れカ氏が天與の才能にもよるかも知らざれども、氏が特性として勤勉忠實の致す處であらうと思ふ、

ラデルヒヤ局からの來信をば解する事が出來ずに、大いに苦るしんで居つたが、慧敏なる氏は技手の傍に居りなから、其の來信の意の何にたるかを知るものから、其事をば技手に教へた處、本職の技手は非常に感服して、遂に氏を推擧して技手とならしめたのであつた、氏の聽神經は凡人よりも極めて鋭敏であつて、其の機械の丁々と云ふ音響を聞けば、電信の意味をば了解する事が出來たのである、當時は彼のホエートストン氏の電信が發明あつてから未だ十年餘であつたから、全合衆國中で之の音響をば聽別出來たのは僅かに二人しかなかつたそうであるから、氏は之れが爲めに二ケ月五磅の俸給をば受ける事とはなつたが、此時には未だ十六才の若年であつたのである、思ふに此れカ氏が天與の才能にもよるかも知らざれども、氏が特性として勤勉忠實の致す處であらうと思ふ、

七、電信技手

當時の信使等が唯一の希望は電信技手に摘用せらるゝ事であつたから、毎朝早く技手等が未だ出勤する前には、信使等はあらそふて通信事務の實習をばしたのであつた、怜悧なるカ氏は直ちに其の大体をば通曉してしまうた、或時の事、技手がヒ

八、鐵道會社員

當時ペンシルベニヤ鐵道會社の支配人にトーマス、スコットと云ふ人があつた、氏も固と蘇格蘭土の生れであつて、其同郷人にてカーチギーなる駿才の電信技手中にある事をば知り、どうかしてカ氏をば己れが股肱の者とせんと欲するの意があつたから、一日カ氏をば自ら引見して鐵道會社の電信技手兼運輸係の職を取れば月俸七磅をば支給する事を以て遇したれば、カ氏は喜んで之れに應じ同會社員となりて、以來此會社に勤續する事が殆ど十三年であつたが、此の入社こそは實にカ氏が立身出世の曙光漸く開けたるのであつた、カ氏之の鐵道會社に入るやスコット氏は愈〻信用し寵愛甚だ淺からずであつた、

丁度その頃會社は社業擴張の爲め、株券をば募集する事となつた、そこでスコット氏はカ氏に向つて百圓券十枚をば購入するよふに勧めた、けれども元よりスコット氏はカ氏が餘金とては別になき事をば知つて居れば、「若し君にして其中五百圓をば調達し得らるれば殘餘は余自ら君の爲めに支辨せん」と云ふた、是に於てカ氏は此株券をば購入して置けば、他日必ず割高なる利益ある事をば知りて居れば、直ちに之の勧めに應じたかつたが、然かし先つ一應家に歸りて實を其母に告けた所、母は其の模様をば逐一聞き取り、今や我愛兒の利達の天運に赴くの門は開けたりと思ふて、斷然其の家屋をば質入して五百圓の金子をばカ氏に與へ、直ちに其の株券をば購はせたのであつた、カ氏は是にて始めて小資本家の仲間に入る事が出來て、其株券からして、始めて利益を受けた時の歡喜の狀態をば左の如くに記して居る、

余が初めて所有株券に對する利益をば受けた翌日は、恰も日曜日であつたから、例の通り二三の朋友と共に郊外に散歩をし、一寸ある樹下に立つて例の配當金額の手形をば友人に示して斯ふ云ふた、

利益の配當と云ふ事は此れ余にとりては新出來

事である、知らるゝ如く、余は糸巻小僧の以來心忠實に働いたのであつたからして、巨細の事物鐵道會社員の今日まで、金錢とし云へば勞働の報酬のみであつて、勞金以外の者は一錢だに手にした事はなかつたが、今は勞金の外に所謂資本から利益の配當をば産むの新事實の境遇に到つた、

如何に氏が得意であつたかを知り得らるゝであらう、

九、小資本家「小鬼のアンデイー」

今は己に小資本家となつたカ氏は、やゝ經驗も味ひ得たのであれば、氏は愈益職業に熱中して事を處するや最も敏活であつて、何事も氏の手にかゝれば成さゞるはなく果さゞるはなしと云ふも過言ではなかつた世間多くの人は云ふ、其事は余に嗜好なく、彼事は余が性情に適せずと云ふも、カ氏は適せずんば適せしむるよふにせしめよ　應せずんば應ずるよふになさしめよ、との氣性を以て勇猛精進したのである、故に氏は職務に對しては熱心忠實に働いたのであつたからして、巨細の事物にも能く通曉して居つたから、事を處するには頗ぶる敢爲敏活であつた、故にカ氏は常に云ふ、

若し青年にして苟も成効せんと欲するの大志望ありて、勤勉精勵せば之れに必要なる性格の如きは期せずして自ら發達せん、

とは是れカ氏が常に青年に對しての訓言であつて、實に氏は是れをば實驗したのである、

一日支配人スコット氏が未だ會社に出勤せなかつた前に、東區線路中に不意に故障が起りて急行列車の到着する事が甚だ延びた爲め、幾多の貨物列車は空しく停車場の構内に停滯して、空しく客車の到着をば待合さゝるを得ざる事となつたとの數通の電報を會社は受けた、そこでカ氏は其事變の眞想をば知り得たから、潜越にもスコット氏に代りて、臨機應變の處置をば取計つた處が、其の奇策は頗ぶる適宜であつて、實に完全無欠であつたが、此の働き振りにはさすがの社長を始め、餘

り會社員の耳目をば聳動して、終には誰れ云ふとなく、「小鬼のアンデー」と、カ氏をば呼ぶよふになつたとの事である、

十、從軍

千八百六十一年合衆國は奴隷問題の論爭が破裂して、南北戰爭となつた、カ氏の恩人スコット氏も政府から擧げられて、陸軍次官の職についた、故にカ氏も共に身を陸軍に投じ、軍用電信、及鐵道保護の任に當り、辛苦經營して、戰地の連絡は勿論、敵軍の爲めに屢破壞せられた鐵道をば修繕するなど、眞に遺憾なく其職務を盡くしたのであつたが、氏は此際不幸にも遂に敵の爲めに其の頬をば傷けらるゝの危險に出遇ふたのであつた、

元來氏は非戰爭論者の一人であつたが、自ら此の無情慘劇なる有樣をば目視してからは以來一層戰爭をば惡む事は恰も蛇蝎の如くであつた、夫で翌年千八百六十二年軍職は歸休を命せられて、再びピッツバーク市に歸りて、元の如くペンシルベニヤ鐵道會社の一員とはなつた、

十一、寢臺附客車

氏は戰地から歸りて間もなくであつた、或日の事、瀛車中で不圖寢臺附客車の發明者ウードラッフ氏と出遇ひ、遂いに車臺製造の合資共同の約束をば結び、此の事業に手を染めたのであつた、此れは實に偶然の出來事ではあつたけれども、實に成効の大階段とはなつたのであつた、氏自ら當時の事情をば記して左の如く云つて居る、

或日余は商用を帶びて瀛車中に居つたが、偶容貌温和なる一人の田舍風の紳士突然余の側に來て一禮し、余の鐵道會社に關係ある事をば他にて聞きたる由を云ひ、直ちに彼れが携へ居たる袋の中から一箇の模型をば取出して、余に示し、曰ふ樣、「是れは余が發明したる寢臺客車の雛形である、君どうぞ之れをば君の會社に紹介しくれたまへ」と云ふた、そこで余は如何にも有益輕便な物であると思ふて、余は爰にスコ

ット氏に從れを會見の勞を取つたが、スコット氏は例の烟眼で以て此の客車が有益である事を看破して、直ちに試驗用として二臺をば誂へた、

茲でウードラッフ氏は非常に喜び、歸路直に余が寓居を訪ひ、スコット氏と會見の有効なりし禮を述べ余にも共同投資者の一人となれと勸めた、余は此の事業の將來有望である事を知り、投資をしたさは山々であつたけれども、如何せん直ちに之れに應ずる事が出來なかつたが、然かし此の好機をば逸しては甚だ殘念と思ひ、金子の才覺には苦心慘憺して、遂に某銀行家に事情をば打明け、資金貸與の事を乞ふたれば、計らずも快諾を得て、此れを以て共同資本家の一人となる事が出來た、當時余の喜びは實に譬ふるに物なき程であつた、

案に違はず此事業は益社會の好評を博して、割高な配當をば得るよふになつた、之れは氏自ら乘じたる幸運であつて、恰も順風に帆を擧げるよふな調子となつたのである、

十二、石油事業

斯くしてカ氏は幾多の幸運に遇ふて、恰も昇天の如き勢ひであつた、然かしながら從來は未だ事業に手を染るのも、母の力をかりては鐵道の株を買入れ、或は寢臺附客車製造事業の時の如きも、某有力の銀行家の力を求めて漸く成功したのであつたが、英氣に富める氏は何時迄も他人の補助を借りて居る者ではない、特に寢臺附客車事業は大いに成功して、旬日にしてカ氏は其資本から幾萬圓の配當をば受くるの身とはなり、本來無一物であつた氏も、早已に數十萬圓を有するの身分とはなつた、

現今こそは米國諸洲からの石油の產額は莫大であつて、世界の需用の十分の七をば供給する程多大の財源とはなり居るも、當時は未だペンシルベニヤ洲の天產物である、豐富の石油事業にも手を出

だす者だになかつたのであるが、銳眼なるカ氏は早くも爰に着目し、今度は他より資本の借入などを仰がずに、二三の同志をば糾合して、石油事業に資本をば投じたるに、其結果は恰も黃金の泉にでも堀り當てたるかの如くであつた、故に氏は大いに之れによりて資產をば增加し、忽ち無慮數百万弗の資產家とはなつたのである、

十三、鐵工事業

總ての事業に於て勤勉忠實であるカ氏は、上下の信用をば博くして、其後頻りに榮進して、遂にはスコット氏の後を襲ふてペンシルヴァニア鐵道會社のヒッツボルリ部長とはなつた、

當時會社にては從來の木造の橋梁をば改めて鐵橋をば架設したのに、其の成績は極めて好結果をば得たのであつた、烟眼なるカ氏は將來最も鋼鐵事業の必ず有望である事をば看破して、同志の友人數名と相結んで遂にキイストン、ブリッヂ、ヴオークをば設立して、盛んに鐵工事業をば開始し、其第一回の工事としてはオハイオ河の三百呎の大鐵橋をば竣工したが、其後は各地方より鐵工事業の注文は引きも切れざる程で有つて、社運の隆盛なる事は宛ら旭の昇るが如く駿馬に鞭つて大道をば走るが如き勢を示し、其の利益する所も殆ど計かり知られぬ程であつた、夫故カ氏は鐵道會社の部長よりも鐵工事業が遙かに有望である事をば見て取り、終に斷然と鐵道會社の職を辭退して、專ら鐵工事業に一身をば委ねる事とし、以來は專心此の事業の爲めに力をばそゝぐよふになつたのである、

十四、鐵工場の大成

是よりして最早カ氏は雇人ではなく、一個の堂々たる獨立の有利有望なる大事業家とはなり、名聲は漸高く、苟も氏の關係する者は必ず隆盛繁榮をば期し得ると云ふ許さへもあるよふになつた、

故に氏の監理せるホームステッドの大工場を觀なければ、工業をば語る可からずとさへ人は謂ふよ

ふになつたのである、實に此の大工場の爲めに使用する敷地は我國の二十餘町歩に亘り、其の使役する職工の總數は四五千の多數であつて、爰には何れも最新最良の機械を用ひ、其の管理人と職工とは人物の秀英を拔きて採用し、堅牢精巧なる大車輪、大鐵槌の響は晝夜の區別なく轟々轟々として恰も雷聲の轟くが如くであれば、隨つて其の産出額の多量である事は米國否世界第一の大鐵工場であらう、

此のキイストン鐵工場をば始めとして、其の他のエッヂヤトムソン工場、デウクエンス生鐵工場、ピイウアフオウルス針金及び釘製造所、ヒツッボルグ建築機械工場、イサベラ鎔鐵所、ルウシイ鎔鐵所、フリック骸炭會社等は何れも皆直接或は間接にカ氏に隷屬し、或は監督の下にあるのであるが、殊に近年になつてからは、製鐵事業の隆盛の結果此の事業に必要である一切の原料をも委く自家の掌中に收めんとして、ヒツッバーグ郊外なる大炭田を買收し、メサビーの良鐵鑛をば占領し、此等の地方からピツッバーグの市場に至る運搬を便利にするが爲めに私用鐵道をば敷設し、或は私用電線をば架設し、又はシユーペリオル湖海の運送權をば掌握したるなど、其の勢は恰も大火の四方に延燒するが如きすさまじき猛烈なる有樣は實に雄大壯絕ではないか、

十五、慈善家

斯くてカ氏は粉骨碎身非凡の勤勞の結果として巨萬の富豪となりたる者であるが、世の所謂平々凡々者流の富豪が其多くは已が身を持崩し、酒食に溺れ、婦女を姦し、或は終日賭博に耽りて快々として居る輩ではない、かゝる富豪のカ氏は未だ一滴の酒をも飮まず、一本のシガーすら喫したる事だになく、勤儉刻苦して積上げたる財産をば以て兒孫の爲めに美田をば買ふと云ふのではなく、氏は遺産相續有害論を主張し、氏が自ら微賤より身を起したる經驗に徵して、遺産は有害無益とし

て、彼の貴族や富豪の子弟が生れなからにして、銀製の匙を口にするは、不幸不運寧ろ憐む可き者なりと云ひ、遺産相續は却つて子孫をして禍ひする者であるとして、斷然遺産は相續せしめざる事に決心し、恰も蜜蜂の蜜をば養蜂師に供するよふに、氏が巨萬の財産は生前に於て社會公共的有益なる事業に使用し果さんとの希望を以て、其の使用法については現今大いに考究中にあるのである、

這般英國の「評論の評論」主筆ステッド氏の問に氏は語りて曰ふに、

富豪は死後其の兒女に遺産をするは恥づ可き事であるが、然かし生前に富を社會公共の慈善に散ずるの其の方法宜敷を得なければ、返つて又同胞をして寧ろ墮落に陷入らしむる者である、積產の難きは勿論ではあるが、產の使用方法に到りては實に困難なる問題であれば、尙は一層注意研究し、最も適當で且つ有益なる事業に使

用せなければならん、世の所謂慈善事業なる者に多くの產を投ずるのは、恰も海に向つて物をば投ずると一般で何の効果も上らない事が多い、故に余は今や此の問題については深く講究中にある者である、

然かればカ氏は彼の糸卷小僧の時代から五十有餘年の今日まで總て浮世の艱難辛酸をは嘗め盡くして、漸く集め得たる無慮數億の財產をば人類の福祉社會公共の爲めに使用し盡さんと云ふ志願であるのである、

夫故にカ氏が已に今日迄で、數多の學校圖書館等其他公私の敎育機關を始めとして、幾多の慈善的事業に金錢をば寄附したる總額をば計算すれば、無慮三千百四十五万一千五百五十二弗の巨額に上りしとの事である、是れによりて之れを見れば今後年々喜捨し得る巨額は以て想像する事が出來よふと思ふ、

十六、スキボ城裡の閑居

願ればカ氏年十一歳其の父母等を共に米國に移住し、歳月匆々終に五十有餘年を費し、今は早頭髪には稍霜を帶びたそふであるが、然かし其の元氣は尚ほ少壯時代と敢て異る事はなく、其の健康も元の如くであるけれども、氏は近年大いに考ふる所あり、斷然米國の實業界から身を退ぞけ、故國蘇格蘭土の北端ドルノック、フアース灣の邊り、風景明媚であつて氣候も頗る温暖である、スキボ城との俗稱ある仙境に退隱して、天下の名賓學者を集めて談論などを戰はし、老後の無上の樂事として居るのである、然かし之の退隱は決して老衰の故でもなく、又少壯有爲の會社員などとの意見の衝突せし故でもない、之れ氏が多年の經營になれる諸般の事業は悉く整頓し、且つ氏が組合の一人であつて、聰明の聞へあるシユワーブ氏の手腕をば信用して、氏の事業は擧げて悉く之れに委託し、自らは退いて一身をば平安なる生活に置き、社會の風雲をば度外にして、只專ら社會公共の爲めには多年來積蓄したる富の使用方法問題につきて苦心經營し、此れ日も足らざる有樣である。

尚ほ近頃カ氏の近情について聞く所によると、昨年十月蘇格蘭土のアンドリユ大學の名譽總長に擧げられて、法學博士の學位をさへ授與せられ、其の大學總長就任論文には、「北米合衆國對全歐洲」をば披露したるに、此れ昨年後半期に於ける歐洲の社界をして覺醒せしめたる一大論文と稱賛せられて居るのである、

* * * * * * *

曾ては一日漸く一弗二十錢の賃金を得たる蘇格蘭土の一貧兒糸捲小僧に雇はれ、其始めて實業の端に就てから以來五十一年間未だ一度の失敗だもした事なく、或は溶鑛火夫となり、電信技手となり、總ての困難勞役に打勝つて、恰も昇天の如き勢を以て累進し、今は財を積む事無慮十億万圓、人を使役する事大約三万人、其の家族を合すれば總計

十數万人と云ふ、而して世は益拜金主義に流れ幾多のシャイロック的富豪の間に立つて、斷然其の富を散じて公共的事業に投ずると云ふの、義俠的精神は實に感ず可きではないか、故に世には氏をば謳歌して製鐵大王と云ひ、或は立志の師表と崇め、紳士の模範であると仰ぎ崇拜する者もある、嗚呼實にアンドリユ、カーネギーこそは壯絶快絶なる廿世紀の偉丈夫ではないか、（完）

編輯者附記。この記事の間に一頁大に挿んだのは、カーネギーの一生を畧にして著はしたものである。この記事と彼の畧歴史と相對照して讀まるゝならば、興味も亦た一層であらう。

新刊紹介

▲自然力の利用　著者は嘗て「自然界の現象」を著はしたる三澤力太郎氏にして、エネルギーの利用、蒸氣力の利用等に就いて丁寧反覆詳述せられたるもの、紙質もよく体裁また可なり、篤學の士の好伴侶たるべし、（定價六十錢東京神田裏神保町六光風館）

米國の富豪カーネギーの傳

▲天文讀本　二十世紀國民叢書として是れまた同舘より出版されたるもの、内容豊富、著者は河西壽氏なり（定價三十八錢）

▲處世の詩　新春万朝社賞をかけて處世の詩を募る、而も見るに足るの作なしと慨して白星氏が特に刊行せるもの、作曲は酒井勝軍氏にして、朗々として高誦するに妙なり。（定價六錢、東京神田裏神保町大平洋舘）

▲天明俳句集　熊谷無漏氏の著にかゝる。鳴雪小波醒雪無角臨風諸氏の序句あり、同好の士の一讀して可なり（廿五錢内外出版協會）

▲桂冠　彰功會の紀念として根岸學校同窓生が特に大友校長が二十年一日の如く勤續せられたる其功を彰せんが爲めに開かれたる其日の紀事を印刷したるもの、体裁甚だ可愛き小册子なり（根岸校友會非賣品）

▲雨月物語　芳賀矢一氏の著也、袖珍美本釘裝甚だ美なり（上製二十八錢富山房）

▲イリアッド物語　通俗世界文學の第三篇として富山房より發行せるもの、希臘の大詩人ホーマーの傑作を正宗白鳥氏が邦文に譯されたるもの、文章流暢にしてよく原文の妙を傳へたるものといふべし定價二十錢）

▲植物の感覺　三好博士の著名は世定評あり、内容の整頓せる此好著は必ず諸子の珍とするに足らむ（三十五錢富山房）

大學長の苦學實話

（コルネル大學長シュルアン氏實話）

長田秋濤

その少年時代——通學——自營自活——一生の運轉機——大學在學中の成績

シュルアンとは一体何者だ。何處の人だ。どんな經歷のある人だ。と讀者は一番に聞きたがるであらう。ひと口にいへば豪い人だ。怖ろしく豪い人である。

さらば、太閤樣もえらい人、孔子樣もえらい人、紀文大盡もえらい人、勿体ないが　天子樣もえらいお人。唯えらい人とばかりではわからない。力が強いのか、智慧があるのか、金を儲けたのか、軍に勝つたのか。全体シュルアン先生はどんな所がえらいのです乎。

シュルアンのえらいのは金を儲けたからぢやない。澤山の士卒を殺して自分が金鵄勳章を貰つたからではない。さらばと云つて大學長であるからえらいと云でもない。唯彼の實に感服すべき點は、一文なしの素寒貧、はなつたらしの小僧から、腕一本でこつ〳〵仕上げて、我が働き一つに博士となりすまし三十八歲といふにはやくも大學長となつて、全米國中最も善い大學長たるの名譽を博し、而かも最も人望篤く學校長として成功が著るしい所。是即ち吾人がえらいと稱する所以である。

シュルマン氏は實に勉強家で、是と思ひ立つた事は必ずやり遂げる。だから其成功の早い事、東雲を破る旭日がめき〳〵と大空さしてさし昇るの勢がある。今氏の昇進した模樣を一寸一口にかいつまんでいふとざつとかうである。

一、生れた所はプリンス、エドワード、アイランドで、十歲時分は小學生徒、見すぼらしい古服に破れ靴穿いて、時には畑仕事の手傳も仕て居たとの事。

一、十三歲になつて村の小店の手代になりすまし、年俸大枚十三弗也。

一、十八歲の時大學に入つて、夜間商店の簿記方になつて學資を儲けて居た。

一、二十歲、倫敦の大學が特待生を募集した時、澤山の加奈陀の學生と競爭して首尾克く及第してそれになつた。

一、廿五歲、早くもノバ、スコチアのアカディア大學で哲學科の敎授に擧げられた。

一、三十八歲、コルネル大學長に擧げらる。

一、四十四歲、時の大統領マッキンレーが比律賓統治の爲特別委員を置くや氏撰まれて其委員長となる。

黃金萬能主義の米國にもこんな人間が出たのは實に感心、吾人は一層の賞讚を以て氏の言に傾聽する。氏は

▲その少年時代

を語つて曰ふに、

『プリンス、エドワード、アイランドの四十年前の狀態といつたら、夫れはまるきり今日とは其趣きを異にしてゐるので、如何な奥山里にゐる人でも、到底今日の人達の想像にも及はぬ位のものでありました。考へて御覽なさい。鐵道はありませんでした。新聞紙なんぞは夢にも知りません。其外今日津々浦々のはてのはてまで必要品となつて居るもの、一つも當時は無かつたのです。私が初めて蒸氣で走る車に乘つて見たるは彼れ是れ二十歲位の時分で、劇場へ這入つて見たのは其また後の事です。よう〳〵物心が附いた時分に父の所へ來てゐた新聞紙は週刊の小新聞で、其記事としても却々今日のものなぞの比儕では無いのです。

『家に在つた書物はといふと、有りふれた物許り、例へばバイブル、バンヤンの天路歷程、フオックスの殉敎者談など其外孰れもそんな抹香くさい代物ばかりてありました。但しこれは五十年も百年も前の事ではないので、左樣私の生れたのが千八百五十年ですから、今から數へて見ると是は

僅かに三十年許り前の事です。

『父は家のまはりにある畑を耕したりなんかして居ましたが其貧乏な事といつたら、實に憫れな位、尤も近所合壁、孰れも此通りで、其頃はなか〳〵稼いだ所で旨い金儲けなんぞは無く、三五人の家内があれは一生懸命働いた所で、喰つて着る丈が關の山で、却々餘分の事には手が出ない。現に私の家内は皆で八人でしたが、誰一人遊んで居る者なしで、而も其位に金が無かつたのです。

▲通學

『其頃の教育はといへば實に幼稚なもので、自分の家から一番近い學校が一哩半の彼方にあるのです。兩親は少くとも普通教育丈は兒供等に仕込んで置きたいといふので、兄弟が打揃つて此長い遠い道を、土用の暑さ、寒中の冷たさも厭はず、あつちらをつちら通つたもので、一番つらかつたのは雪が始終降る、夫れも毳毛霏々位なら風流でもあるが、粉雪が風に捲かれて來るので、連日連夜

止む時なしだから、積雪軒を沒する許り、五尺六尺といふ高さになる。其れでも決して學校は休まないので、或時の如きは、父が大きな橇に兒供を乘せて學校へ往つて呉れた事もある。

『今から考へて見れば其時分の學校なんて。名こそ違はないが今日とは雲泥の違。教はる者こそいゝ迷惑だつたらうと思ふ。生徒といつても小供許りでなく、充分美髯を蓄へた大丈夫迄が一處になつて教はつたもので、之を教へるのが又おかしい。抑もいろは四十八文字から算術、習字、讀本なんぞ何から何まで教師は一人でした。

『併し此通り不完全な制度ではあつたが、小學校としては結構で、今日のと較べて大した劣りはあるまいかと思ふ。教師といふのは体操が得意の先生で、何でも一旦教へた事は忘れさせないといふ不思議な力を持つた感心な人でした。十三歳まで此學校へ通ひましたが、其頃もう讀み書き算盤、孰れも立派な一人前になつて了つた。

▲小店の手代

『十三歳の時故郷を離れました。尤も出る時にこれと極つた目的などあるでもなく、唯田舍の村と賑かな町へ往て、喰ふ事丈は儲けやうといふ考へであつたので。

『父が骨を折つて、最近い町で口を求めてくれた。サンマーサイドといふ所、人口一千人位の村なんです。はじめ一年丈に勉強して勤めましたが、給金を貰つたのが幾らだと思はつしやるのか、ハヽ賄付きの年三十弗さ。どうでせう。今の若い方がお考へになれば滑稽でせうな。朝は星を戴いて起きちや、夜は十時が鳴るまで切々と働いて、漸との事に年三十弗。一ケ月が二弗半です、けれども其頃にはこれでも自分は嬉しかつた。兎に角これでも世渡りの取付きで、自分の眼には人口一千の此小村が堂々たる一國の大都會のやうに思はれたのです。

▲自營自活

大學丈の苦學實話

『で此小店で働き出した折から、今日に至るまで一文半錢人の補助によらず、皆自分で稼いでやり切つて來たです。十四五の時分でも、我が手に這入る金で自分の稼がない金、即ちロハで人に貰ふ金なぞ一文もありませんでした。

『小店で一年勤めて今度は同じ村の中で稍大きい店へ這入つて、今度は賄付き年六十弗貰ひました。是で二年辛抱しましたが、もう少し學問が仕たくなつて來たので愈〻大學へ這入る事に決心して、主人に其由を告げると中々承知しない。が構はず暇を取る事にした。

『尤もどうして大學へ這入つてやり切つて往けるか自分にも目途は着かない。が兎に角人には依る事が出來ぬ。何の道自分で稼がねばならぬを丈け承知して居た。此時に自分が給金をのけて貯蓄して居た金が八十弗あつた。金といへば後にも先にも此れ限りで、即ち虎の子同前の代物なんです。

即ちシュルアン氏三年の勤務中の給金總額百五十

弗。其中から八十弗を貯へて居たのである。是だ。此の心掛さへあれは成功は出來る。彼は現に之を其少年時代に悟つて居たのである。

『自分の主人は切りに自分を止めて、學者にならうといつた處が學資の見込もなくては仲々の困難があるつて、非常に之を並べ上げ、若し自分が此店に辛抱して居着いて居れば即時に俸給を倍にしてやると迄いつてくれた、さアこゝが人間の

▲一生の廻轉機

である。一方には一年百貳拾弗といふ收入の確かに定まつたのが在つて、おまけに勉强次第で幾らでも昇進が出來る。一方には困難の峠や谿が横はつて居て、しかも其成功の望は茫々漠々、寧ろ失敗に歸しさうである。當年プリンスエドワードアイランドで一年百二十弗の收入といへば仲々大したもので隨分鄕黨の間に威張る事も出來る。相應の贅澤も出來る。一方學校に這入るとすれば先づ自活問題、是には贅澤どころか餘程辛い目も辛抱して、慾心も抑へねばならぬ。右せうか、左が惜しい、左せんか、右が惜しい。

『がとう〳〵極めた。自分が學校に這入らふといふのはもう極めた決心である。一旦定めた事を外に何があらうと俄かに又改むべきではない。男だ、定めた道に就かう。とかく考へた。今日から考へれば、商人として立つて居た方が大なる成功が在たかも知れぬ。が夫にしても、自分は決して此時の判斷を悔まないので。

『虎の子として居る八十弗を以て村の高等學校に這入つて大學に入る準備をした。其間一年である。尤も一年間しか金が無いので、もし準備が出來なければ忽ち喰ふ算段からしなければならぬのであつた、羅甸語、希臘語を一生懸命暗記する代數をやる。と最後の四十週間といふもの、其勉强した事、自分一生の中　あれ程やつたのは前後其ためしがない。愈其年の終りに、シャーロット市にある、プリンス、オブ、ウエールス大學の特待生

募集試驗の競爭に出て見たのである（西洋の特待生とは日本のと異り學資食費其他一切を支給さるゝもの）。が自分の準備は大急ぎに遣つて極々不充分であつたから、十中八九迄は通る見込がないと思つて居た。所が成蹟の發表になると驚いた。試驗に通つた斗りではない。プリンスエドワード全島の志願者中第一位の成蹟を占めて居るには我身ながらもあつけに取られた位で、勿論他の者の驚きはいはずもがなである。

『特待生にはなつたが、一年支給さるゝ金額は六十弗しかない。今から思へば眞とにつまらぬ樣である。が、三十年經つた今日に於て、自分は此時の成功が生涯中で最大なる成功であつたと思ふ。此後自分は度々褒美も貰ひ支給金も受けた。で、人には、後の方が幾ら大きいか知れぬやうに見へるかも知れぬが、自分の思ふ處では矢ッ張り此初めのが大成功である。何となれば初めのは必要欠くべからざる奴で、これが取れなければ學校生活

をやり切る事が出來なかつた、後のはといふに、勿論必要が無いではないが、取れなければ取れぬなりで往けぬ事はなかつたのだもの。

シュルマン氏は二年間此大學に居た。其間學校から貸付される六十弗と、夜間某商店の簿記方を勤めて貰ふ俸給とで、結局一年間百弗足らずの金で暮したのである。後一年の間田舍の學校の教師になつて、夫れから又大學教育を受ける爲めに今度はノヴア、スコチアにあるアケデイア大學に入つた。

▲大學在學中の成蹟

アケディア大學在學中の氏の同窓の人の談によると氏はあるとあらゆる賞與は必ず取つたのみ以て有名であるさうな。氏が將に同大學の業を卒へんとする頃ふと倫敦大學が特待生募集をして、加奈陀全州の諸大學の學生中から競爭試驗で撰拔する旨を聞き込んだ。此特待生支給費は一年五百弗で三ヶ年間である。氏は元來倫敦へ出て勉强した

いと感つて居つたのだから、機逸すべからずといふので猛然として手に唾きして起つたのである。

苟くも氏の試むる所、成らざるはなし。倫敦大學の特待生競爭試驗も無論美事に中原の鹿を射止めて、意氣揚々倫敦へ乘り込んだが、在學三年の間に酷く哲學に趣味を感じて、斯學を以て畢生の事業とせんとの決心を固めた。

哲學といへば獨逸である、斯道の碩學綺羅星の如く、人材山を爲して居る。斯學に志す者一たびは獨逸の地を踏んで、親しく此名流に接し研鑽するに非ずんば一人前と迄はいはれない。最非何うか往きたいものと、日夜希望して居ると、果報は寐て待て、愈甘露の日和が向いて來た。即ち倫敦のヒッバードソサエチーで賞を懸けて特待生を募り、競爭試驗に勝を占めた者には一年二千弗を支給するとの事であつた。ケンブリッヂ、オックスフォードの二大學に在る學生は素より其他社會に名を成して居る學者も尠なからず此競爭場裏に

立つて輸贏を爭ふたのであるが、中原の鹿再び無名の一寒書生シュルマンの手に落ちて、世間一般一大吃驚であつたそうな。

獨逸留學も首尾克く終へたのでシュルマン氏は、オット此時は既に哲學博士シュルマン先生だ、もと自分が學生として席を置いて居たアケディア大學に歸つて、今度は敎授として講堂に臨む事になつた。が幾くならずしてノヴァスコチアのハリファックスにある大學からの招聘で其處の敎師となつた。がこれも又久しからず、千八百八十三年コルネル大學に哲學講堂設けらるゝや、時の同大學長ホワイト氏嘗て氏を知つてゐたので迎へて其講堂を擔任せしめる事とした。

人間の運といふやつ、かうとん〳〵拍子に來ると何處まで伸びるのか止め度がわからぬ。其進歩の早い事順風に帆を張る潮に從ふ如し、二年すると又昇進だ。コルネルにある哲學々校は博士を擧げて其敎頭とした。後千八百九十二年、コルネル

大學々長の席が空になると、直ちに博士は其職に就いたので、氏時に年三十八。

氏の智力の深く強きはいはずもがな、はた人をして其威力の厚情に服せしむるも深くはいはず、博士が米國中年若き大學長なるに拘らず氏の管理の下に於て同大學は大に發達し隆盛を來して居る。氏は最も青年を愛し、殊に氏自身の如く、自營自活して社會に立たんとするものには深く同情してよく世話をし面倒を見る。氏嘗て曰く

『今ではもう直接學生に敎授する事は致しませんが、併し尚青年に對して敎訓もし、助力もする其影響は敎授連の力と同樣に、直接學生に及ぶ積りなんで、若しさう往て居なければ私は校長として失敗してゐるのです。』と

（完）

大學長の苦學實話

懸賞課題『平和』に就いて

第二講話集の懸賞作文課題『平和』に對して、會員諸子の奮つて應募せられしもの實に數百篇の多きに上ぼり、中には金玉の響きも尠からず。記者は悉く是等の優篇を滿載して、聊か初頭の本誌を飾らん事を期したりしが、如何せむ熱心なる諸先生の多趣味なる玉稿山の如く、殆んど割愛するに忍びざるものあり。遺憾ながら之れを次號に廻すの止むなきに至れり。猶ほ次號には必ず之れを滿載して錦上更に花を添ふべく、從つて其の賞として、本會は當選の諸君には第二號一冊宛を贈呈する事とせり。知らず中原の鹿は誰れの手に落つべき。

ロセッチ（D. G. ROSSETTI）

梅澤和軒

（一八二八年より一八八二年に至る）

（一）

ロセッチはラファエル前派の名將なり。ラファエル前派（Pre-Raphaelite Brotherhood）とは、以太利の畫伯ラファエル以前の繪畫に私淑し、詩聖ダンテ並に其の周圍の時代を憧憬せる「中古主義（ロマンティスト）」者の團躰なり。

此は近歐に勃興せる「中古主義」の新潮、英島に怒號して新に建設せられたる「荒唐復古」（Renascence of wonder）の餘波なりと知るべし。

ラファエル前派は、其の頭文字を取りて、P、R、B、と爲したるを以て、此の派勃興の當時、早くも三字派（Three-lettered race）の目ありき。

三字派は有爲の俊才に富む。

（一）ミルレー（Sir John Millais.）。氏は一千八百五十五年まで、P、R、B、を奉じたりしが、爾來自由に活動して、以て今日に至りぬ。P、R、Bとしての作品には、「ラスキンの肖像」「盲女（めしひ）の處女（おとめ）」「墳上の傷兒」、「安息の谷」等あり。

（二）ハント（Holman Hunt.）は、三字社中の錚々たる畫伯にして、「リエンツイ」其の他製作頗る多し。

（三）スチーブンズ（F.G.Stephens.）。刻下の英國美術界にありて、美術の批評家を以て嘖々の名あるが、畫て一度は、P、R、Bの忠臣たりしなり。氏はハントと斷金の交あり。かるがゆゑに入りて三字社中の一人たりしが、其の澎湃たる荒唐思想の、到底繪畫に表現し難きを看破するや、斷然刷毛を投じてペンを取りぬ。

（四）デエレール（Walter Deverell.）氏はロセッチの雄辯、ハントの美妙なる繪畫を嘆美するの餘、遂に熱心なる歸依者と爲りしが、惜いかな天死せり。

（五）コーリンス（C. A. Collins.）氏は一時は三字派の畫風を愛慕せるも、決して入社せざりき。氏は繪畫に滿足せず、後文學に轉じて令名あり。

（六）コーリンソン（J. Collinson.）氏は美術家にして詩才ありしが、舊教を信奉して、其の信心の熱度の上騰するや、刷毛を捨て僧侶と爲りぬ。

（七）ヴールナー（Woolner）氏は彫刻家なり。ロセッチ等が發行せる文藝雜誌「若芽」に寄書し、後入社せる者なるが、P、R、Bの影響は、氏が當時の詩歌以外に及ばざりき。

（八）スミス（Bernhard Smith.）も亦彫刻家なりしが、ロセッチ等と親交あり。一千八百五十二年濠洲に渡りて、遂に不歸の客と爲る。

（九）ヒウス（Arither Hughes）も亦派中の人士と管鮑の交ありき。

（十）ベル、スコット（W. Bell Scott.）氏も亦派中と親密なりしが、社員にはあらず、而も最初の展覽會以來、此の主義に信棄して、九年の間、絕えず其の作を出品せり。

（十一）ジョーンス（Burne Jones.）はロセッチと交際するに至りて、始めて繪筆を持ち、其の初一念たる僧侶志望を捨てにき。

以上十有一人の中、醇乎たる社員は、ハント、ミルレー、ヴールナー、コーリンソン、スチーブンズ、ロセッチの六畫伯なり。而してロセッチの令弟ウキリヤム ロセッチあり。氏は詩人にして評家を兼ねたり。今や令兄に後れて、三字派を青史に垂るゝを以て、其の天職と爲す。著はす所「ダンテガブリエル、ロセッチ」。「ラスキン、ロセッチ、前ラファエル主義」。「ガブエレ ロセッチ」等あり。此は先考の詩的自傳にして、附するに幾多の肖像を以てせり。本紙に掲載せる、ロセッチ兄弟が幼時の肖像は、本書のを摸寫せる者なり。

此の他ラファエル前派の詩人として、スキンバーン、モーリスの二大家あり。モーリスは社會主義を奉じたる詩人。スキンバーンは反基督敎徒に

して、樂天主義を有す。二氏はロセッチと共に、中古主義を信奉せるものから、なは各々異彩あり。ロセッチは伊太利を、スキンバーンは佛國を、モーリスは北方文學の荒唐無稽なるを喜びたり。此の如くラファエル前派は、高才俊足を雲集して、英の藝苑界を刷新せり。恰も此れ八種の清風光明より出づるか如し。ロセッチ人と爲り温厚謙讓、其の感化の偉大なる、此れと交るは之れが弟子と爲るなりと稱せらる。乞ふ温雅の德香を流布せしめて、三字社中の名家を傳へむかな。

（二）

天才は天賦なり。されば天才の輩出する時、多くは麟喰獨生のなれど、また遺傳の結果として、才人の多き家才人を出すこと無きにあらず。例へばロセッチ兄弟の梨園の名優團菊の如き、山陽の如き、三蘇の如き、魏の武帝一家の如し。我がロセッチに於いても亦然るを見る。父は以

太利の愛國家として、國事に奔走し、衆ねて詩人たりしガブリエル ロセッチ (Gabriele Rossetti) 其の人なり。氏が「以太利生活」(Life in Italy) と題する一小節に曰はく

I know my fame will have but scanty flight,
Readers to whom I speak of Italy.
Yet, if in any of you there rose a wish
To know me who I am, I'll meet it here.
Ovid's own native soil is mine as well.
He spoke about himself, and so will I.
In verses Ovid wrote, but I in prose—
Prose of eleven syllables with rhymes;
But, be they verses, I shall not content.
And, without more preable, hear me now.

Along the beach of the Frentani lies
On teeming hills, the Adriatic near,
A small municipality of Rome—
Histonium once and Vasto now'tis called.
There with no waft of Fortune, I recieved
A humble cradle from a worthy pair.

風光明媚なるアドリヤチックの海岸に近き、フレンタニーの温籍たる山容に沿うて、古昔ローマの一小市あり。嘗てイストニウムと呼ばれ、今ヴストオと稱せらるゝ者。此處に幸運の寵兒たらずして、余は貧き兩親より生れて、いたしき搖籃の兒と爲りぬとは、此れロセッチが父が我が家の歷史を叙述する冒頭にあらずや。ガブリエル、ロセッチの父は、ニコラア、ロセッチとて鍛冶屋又は錠前屋たりき。其の妻マリヤ、フランシスカ ピエトロコラアは靴屋の娘なり。二家は決して名家にあらずと雖も、ヴステス議會の一員たりしが如し。ロセッチ家の本名は、ロセッチにあらずして、デル

ラ、ゴールヂャ (Della Guadia) なりき。ゴールヂャ家の小兒に赤髪の兒ありき。而して綽名を附するは、以太利の國俗なり、ゴールヂャ家の才人、赤髪兒を一見するや、叫んで曰はく、「赤ちやん」と。蓋しロセッチ (The Rossetti) とは、「赤兒」(The Little Reds) の義なり。此の故に此れを英吉利ぶりに命名すれば、ロセッチとは、Reddish 又は Rudkins に當る。

ロセッチの父、ガブリエル ロセッチは、一千七百八十三年アブルッツオ シテレオレに生る、兄弟四人あり、長はアンドレーヤ、次はアントニオ、次はドメニコオにして、ガブエレは末子なり。ドメコオ曾て書簡をガブリエレに送つていはく、「我が家の世々大文士を輩出せるは、汝の熟知せる所なり」と云へり、此は必ずしも信頼すべからざる逸話なり。一千八百二十二年、父は革命に蹉跌して、マルタの遷客と爲り、同じき五年英國に逃れ、ポリドリー嬢と結婚せり。一八三一年キングス

カーレッヂの、以太利文學教授に任ぜられ、同四十五年視力衰へて辭職せり、散文律語の著者頗る多く、就中有名なるは、ダンテが「神聖喜劇註釋」、「革命を喚起せる反法皇精神」、「中世紀に於けるプラトニック戀愛奇譚」等あり。

(三)

將門必ずしも名將を出さず、天才の家必ずしも愚物ならずと雖も、ロセッチ一家の如きは、眞に文藝の名門と稱すべき者なり。姉はマリヤ フランシスカとて、「ダンテの片影」の著者。次は即ちダンテ ガブリエル ロセッチにして、一千八百二十八年五月十二日、ロンドン市、大ボルトランド區、シャーロット町二十三番地に在る。始めガブリエル チャールス ダンテと云へり。次はウ井リヤム ミケール ロセッチにて、詩人にて評家を兼ぬ。次は少妹クリスチナ ジオルジナにて、才藻容姿双絶の嬌名あり。テニソンの名歌モードアーサーに因りて、家兄ロセッチ皇后の愁

然物思に腦める矯態を畫くや、蛾眉淡粧を凝らして、騒人を惱殺せしめたる淑女にして「ゴブリン マーケット」、「ゼ プリンス プログレース」其の他律語散文の述作あり、閨秀作家の錚々たる詩人なるのみならず、其の叙情詩の巧妙なる、沙翁以外及ぶもの稀なる名手と賞揚する評家もあり。

ロセッチは、ポールトランド區のフォレー町の私立學校に學び、一千八百三十七年の秋キングス カーレッヂに入學して、ラテン語、ギリシャ語、フランス語、及び獨逸語を學習して、群籍を貫棟せるが、以太利語は父祖傳來の國語なるを以て自ら此れに熟達せりと云ふ。其の文學上の才藻は、早くも五歳にして喚發せるを見る。傳へて云ふ、ロセッチ此の時「奴隷」と題する戯曲樣のものを作れりと。十三にして「ロデリック とローサルバ」てふ荒唐なる散文の物語を試み、學校生活を終る頃には、「サー ヒーゼホルン」と云ふ物語に筆を

染め。一千八百四十三年青春十五歳、人は三伏の苦熱に、疾風迅雷を思ふ頃、彼は藝術學校にありて、一向技藝の蘊奥を極めむとて、藝術を博綜しき。後ワルポールの「オトラント城」デフオの「疫病記」、スコットの「ウェヴリー物語」、沙翁、バイロンの諸詩を讀破せり。

一千八百四十四年小品會の會員と爲り、二小品を作爲せり。一は「マーミオンの死」他はゴールドスミスの「荒村行」より摘思せる「老兵士」の畫なりき。かくも藝術に熱中せるが、Side by side に文學の研究をも怠らざりき。カヴルニー、トオユー ジョハノット、ナントイユ等の小説を蒐集し、好んでプロスペエ メリメエの「コロバ」を讀めり。此の零砕なる物語をば、他日ロセッチが英譯せるを見れば、其の云ひ知らぬ面白さを感じたるを思ふべし。而して「ラヂナスドイル」てふ不思議の物語を口を極めて嘆美せるを知らば、後日「ローズ メリー」、「王の悲劇」、「妹エレン」諸玉什

を得たるを怪まざるなり。

（四）

畫家にして詩人を兼ねたる、ロセッチの如きは、蓋し前古罕儷矣、父は文壇知名の高士なるを以て、朝夕出入する詩人畫工學者等は、皆當時有數の大家なりき。而してロセッチは此等の名士に親炙して、談笑の間、其の感化を受けたり。父は以太利語を教授し、且つダンテ並に其の周圍の文學を講ぜり。此の家庭の教育こそ、ロセッチをして、詩神ダンテの祭壇に、長跪合掌せしめ、遂に中古主義を信樂せしめし所以なれ。

ローヤル アカデメー在學中、彼はホルマン ハント。サー ジョン ミルレー。トマス ヴールナーの諸氏と往來し、情交骨肉の如くなりき。一千八百四十八年三月、畫伯ブラウン氏畫を裁して、其の畫堂に於いて、倶に研究せむことを乞へり。ブラウン氏はP、R、Bの先覺と爲りし人、當時滋苑の名家なり。ロセッチ報を得て狂喜し、此れよりブラウンの畫堂にあり。同七年ハントと協力して、畫堂を新設せり。此處にてロセッチは「メリー ヴーデンの處女時代」を、ハントは其の大作「リエンツイ」を、ミルレーは其の佳作「ロレンゾーとイサベラ」を作爲せり。此處に青春の畫家相會合して、佛國の中古主義者の流を掬みしが、彼等は何れも二十前後の青年にして、而も筆力穩健、着想清新、他の唯物主義者の接踵すべからざる者ありし也。

十九世紀の藝苑に、第二の文藝復興を企てたるは、ラファエル前派の運動なり。ラファエル前派の運動は、ワットが所謂「荒唐復古」にして、ラスキンの云へるが如く、「近世科學の助によりて、自然をば、彼等の周圍にある如くに描寫するに在り」しなり。

一千八百五十年一月一日、ロセッチは其の同好と共に、文藝雜誌「若芽」を發行せり。此は第三號に至りて「美術と詩歌」と改題せり。ロセッチ

は十有二篇を以て、紙上に花を添へぬ。其の篇名をあぐれば、散文の寓意的物語なる「手と魂と」。「我妹が眠」。「天福を得たる侍女」。「絕壁より」。「海の端」。「カリーロン」。「世の寶」。「處女と小供と」。「聖カザリンの結婚」。「海神の踊」。「ゼニスの牧歌」、「海より救はれしアンダリカ」等の珠玉あり。此の中「天福を得たる侍女」は、最も有名にして。ロセッチが青年時代の傑作と稱せられ、

Her hair that lay along her back
Was yellow like ripe corn.

背にかゝれる髪の毛は、熟穀の如黄かりき。

The sun was gone now; the curled moon
Was like a little feather
Fluttering far down the gulf.

日は今入りぬ。
遠く下界を眺むれば
弓張月は羽の如

など金玉の文字に富む、阿娘白玉樓中の人と爲りて後、阿郎は地上の空閨を守りて、遙かに天上の情人を追懐し、娘は天上にありて地上の阿郎を思ふ戀々の情を描寫せる、愛言情話、綿々として絕えざるべく、其の宗教的なる所、直ちにミルトン、ダンテを連想せしむ。

此の時代の作なる Stuff and Scrip" に巡禮を叙せるの一段亦「天福を得たる侍女」の筆致ありと稱せらる。詩にいふ

"The Queen sat idle by her loom:
She heard the arras stir.
And looked up sadly : through the room
The sweetness sicked her
Of musk and myrrh.

Her women, standing two and two.
In silonce combed the fleece.
The pilgrim said, 'Peace be with you,
Lady,' and bent his knees.

She answered, 'Peace,

Her eyes were like the wave within;
Like water-reeds the poise
Of her soft body, dainty thin;
And like the water's noise
Her plaintive voice."

女王は徒然なるまゝに、
み機の下に座し給ひ
花氈のさやぐ音を聞きて
悲しげに見上げ給へり。
麝香、沒藥、
清香苦しさ、薫かな。

侍女は二人づつ並び立ち
しづまりて羊の毛を梳りぬ。
時しもあれや巡禮は
「さはらせ給へ姫よ」と云ひて跪けば

姫も「さはらくあれ」と答へ給へり。

(女王の)眼は綿津海の碧さごと
其のたわわなるみ姿は
川邊の葦の直さごと
其の悲しげのみ聲こそ
水の咽ぶが如くなれ

第一句中に麝香、沒藥の烈香、胸苦しきまで匂へるを歌へる句法は、モーリス、スキンバーン諸氏の襲用せる、ラファエル前派の特徴とも見るべき者なり。

一千八百五十四年ロセッチ青春二十六にして、其の門人シッター嬢と婚す。翼ならぶる鴛鴦も若かじとぞ見ゆる情交は、其の書簡にあらはなり。嬢や天姿艶麗、皓歯朱唇、双眸碧玉の如く、巻を含み面を背けて、玉手掻頭すれば、一見騒人を惱殺するの魔力あり。始めロンドンの商賈にありて店員たりき、ロセッチ一日此れを瞥見し、殆んど

其の運命の定まれるものあるを感じたりとぞ、婚後數年蘭房の清香忽焉として消えシッター遂に出界の人と爲る。ロセッチ潜然其の死骸に訣別し、其の最愛の詩集をば、其の最愛の遺骸と共に、墓門に沒りぬ。友人愛惜して止まず、後七年にして、再び詩集を墓門より堀出しぬ。

此れよりロセッチ快々として樂まず、昨夜蘭房夢細かなりし處、今はた亡き人を思ふの紀念のみ。多恨多情の詩人は獨り空閨に任するに忍びず、即ち轉してブラウン氏と共にあり。後又チェーンヲークの一邸に住す。邸や雅致に富む、鐵門佳麗にして前に細流あり、後園廣大、殆んど其の理想的邸宅たりき。此處にロセッチは、スキンバーン。ジョージ・メリデース。ウヰリヤム ロセッチ等と同居せしが、兩雄並び立たざる慣なるに、かくも威力ある、或意味に於いては襲撃的なる、少くとも自尊自信、自説を固守する詩人文士の、共同生活は永續すべうも思はえず、メリゲース先づ去

りて、スキンバーンも其の影を現さずなりて、同胞二人と爲りしが、一千八百七十四年ウヰリヤム ロセッチの結婚するや、ロセッチは一人わびしく暮したり。

此の後ロセッチは「エロナに於けるダンテ」、「流の秘密」、「ローズ メリー」、「白船」、「王の悲劇」、「人生の家」などの各篇を作りて、一千八百八十二年三月九日遂にピルチングトンに於いて、かへらぬ客と爲りぬ。

(五)

ラファエル前派の一人なるハント嘗てロセッチを評すらく、「ロセッチは、眞に仙姿ある畫伯の風貌ありき。容貌閑雅にして、頭髪房々たり。其の行くや常に蹣跚として、このもかのもに漫歩し、何事にか熱心せる色見え、一見いたく多感の青年たるを示し、而も可憐なる姿ありき。

彼は大陸の詩歌に精通し、且つ其の趣味の高大強烈なる轉た驚嘆すべきものあり、彼の渾身は詩な

りし也。詩の爲めに生れ、詩の爲めに死せりとは、洵にロセッチをや云ふべき、其の一身を詩神に捧げて、諸根悅豫するの餘り、敢て現世を擧げて詩的ならしめむと切願せるが如きは、何ぞ行爲の詩的なる。

されど彼は、此の如き清望の、到底濁世に實行せられざるを覺りて、ひたすら孤獨の生活を爲し、其の觀察の範圍を小社會に限りたるは、バイロンと同じく竟に宇宙的詩人たらざりし所以なり。彼の詩界は此の如く狹陋なれど、凡そ詩歌の眞價は、ひとり詩界の廣狹のみを標準として決定すべきにあらず。アーノルド曰はずや、醇なる詩歌は、靈魂の力によりて作らると。

それ熱情と誠實とは、詩歌の生命なり、而してロセッチの詩歌は此の二者を並有す。

彼はダンテに私淑して愛の福音を說き、其の空閨を守るに至りて、更に地上の愛情は、天界に於ける無限の幸福の前驅のみ。人生は現世に盡くる者にあらず、白玉樓上一日千秋の思を爲して我を待つ人ありと知らずやとの信仰は、ロセッチの詩歌に一貫せる思想なり

Your heart is never away
But ever with mine, for ever,
For ever without endeavour.
To-morrow, lore, as to-day.
Two blent hearts never astray,
Two souls no power may severe,
Together, O my love, for ever!"

と、彼も亦十九世紀の優美なる一詩人にあらずや。其の畫家にして詩人を兼ねたるは、吾人として南畫の鼻祖にして、而も唐代有數の自然詩人たる王維其の人を連想せしむる者あるなり　（完）

寫生帖

村羊生

小序

『寫生帖』の一篇は、近きわたりより、わが文讀む窓のつれ〴〵を、二くだり三くだりつゝ、幼き眼に映じたる各方面の觀察を、其のまゝに埒もなくしるし置けるを拾ひ集めたるものにして、篇中『花』『雪』『月』『鳥』其の他の數篇にわかる。

已に筆のすさびなり。其のたわいもなく、見るかげもなきを怪しむ勿れ。その博物學上より觀、之れを歷史上より觀ると稱するも、素より是れ專門大家が苦心研究の後になれる見榮あるの類にあらず。すでに閑餘の漫筆なり。之れを詩的觀察といひ、自然の寫生と稱するも、素より彼の一世の才人が、絢爛人の眼を眩するの彩あるにあらず、まして微妙の靄につゝむの文あるべき理もなし。たゞ是れあくまでも有のまゝなり。わが眼に見、わが心に感じたる其の儘を、あやしき筆のわすりに書きすてたるもの、一言にいへは、いづこまでもつまらなき閑文字のみ。これよりして專門的研究のうまし香を得んとするあらば、そは大なる誤なり。かくの如きは余の自らもはじめより期せざる所、況んや卷頭歷々の博學多識なるわが講師諸先生の興味涔々たる卓說のあるあり、何ぞ多きを淺學の余に求むるの要あらんや。

はじめ此の篇を草するにあたり、一度はTheなる冠辭の下に筆を執らん心組みなりしも、そはあまりに永き時日と、長き頁を要すべく、加之、下手な長談義の寧しろ諸君を煩はす事多からん事を思ひて『日本に於ける』てふ前提を附する事とせり。こは强ち余自身が研鑽の勞を厭へるにはあらざるなり。

以つて春雨のつれ〴〵の友たるべし、以つて眠むけさましの友たるべし。もしそれ諸子が正課の傍に於ける——烏評がまじけれど——參考となる

あらば是れ望外の喜びなり。余は再言す、是れ決して専門家の眞面目なる金玉の響に似かよふべくもあらぬ筆のすさびなり、閑餘の漫筆なり、一片淡はき事水の如き閑文字に過ぎざるなり。

花

▲はしがき
▲植物學上より見たる花
▲地理の上より見たる花
▲歴史の上より見たる花
▲自然と花
▲詩的花觀
▲むすび

▲はしがき

そは朝まだきなりき。

朝日はの〳〵と、花にわけゆく卯月の空は、白絹もて拭ひたらんやうに麗らかなり。祈のあとを藤の倚子に身をもたせて、聖き日ととこしへに定めたまへる此の日の、さてみのづからなる想よ。

ゆめのごと、幻のごと、朗らかなる友の讃えの聖歌、祈りの御聲さながらに耳におぼゆる心地してふとわれは、笑みに醒めたり。

天なるとぼそ、聖なる寶座のともしびとはに震るふらし、風なきに散る花のふゝきの聲なきさゝめきに、葉守りの神々しこ御姿、ほの見ゆるらむのうつゝのさが——夢ならましのかくてー——分。

鈴鳴りて人の訪ふ音、ふたたび鳴りて人の去れるけはひす。と思へば人のしとやかにもて來し小包やうのもの、紅の毛糸わつさりと、たゞ一重十文字に。うすずみもやのよすが、さて甲斐なかりし、名もしるさで、消印は函館とありき。

輕やかなる包の、さはわが腕、わが胸の何とはなきゆらぎよ。おやしみながら手早やく結い目を釋いて、二重に蔽へる紙打ち披らけば板金の鏤。猶豫なく蓋おしのくれば、まづ——まづ、えならぬ高き、聖き香りの濃艶なる露のやうにくゆりいでたる。ふるよ手にみどりの葉かいのくれば——

あゝ花、花、花——。

天つ御園生の
千代の白雪にも
例へつべき純白
なる花の、ソロ
モンの榮華も及
ばずとナザレの
聖者が敎しへ玉
ひし其のおも影
をこゝに、野の
百合(Lily)大和
名を鈴蘭の花ま
たの名を君影草
といふ。

御歌もやと
かいさぐれども色紙らしきさへ見えず。友。やさしき彼の友の御名其のまゝなる清き思ひを遙か

く束して一つ、二つ、三つ、一束は駿河臺なる病院に病を養へる友の許へ。一束をは師の君へ。一

東は青山の學の窓にいそしめるわりなき友へと送りぬ。其のかへしに『思ふことわり、風やわらかに若葉のみどりをわたる春のあした、五稜郭畔彩ある花雲のむしろにたのしかりし園藝の睦びよ、思へば早や一年の昔なり。其の春を思ひ、其の花を思ひ二百里の山河を通して其の人を思ふの時、君に何等の感愴かある』とあり。知らず此の花、猶は當年の誓を記するや否や。

＊　＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊

かくてもわかず、其の色香のさめやらぬ間を玉なす露に染めたる花の譜、それよこゝに『花』の一まきなむ。

さは恥かしくも亂勝ちなる筆のわすりの、まいて才わさく學わはき身の、いかで花守る神の御許しを請ふべき。よし其の時こそは潔く筆を燒いて三年鳴かず飛ばず、靜かに高興の時を俟たん哉。

よく見れば蚤なりけり花の蟲（遊名）

▲植物學上より見たる花

幻のごとくなればよくは覺えず。たしかに夢なりしなるべし。

藤紫の帷のかげは立てるねれの、西にしづみし夕日影の殘んの光はのじらう、彩雲とざす築山の芝生のあたり、いみじくも妙なる聲して花の如き女神の尊き御姿をふと見たり。

光ある金色の御髪はふさやかに後に長う垂れて、その御頬は馨ぐはしき花の床のごと。谷川の流のほとりに、人の、獐と野の鹿とを指して誓ひし面姿か。つゝましげなるそゝろわるき、綾羅の裳のひゞきもかすかに、まばゆき黄金の杖輕やかに調とりて、銀鈴を揮ふさながらの御歌、口吟さみますよと見れば、女神はつといりて花園の眞中に立たせたまひぬ。黄なる、紫なる、焔のごと紅なる、花は皆かしこみて頌榮の歌をうたひぬ。

しとやかに會釋したまへる女神は、ことにさゝやかなる花の、美くしき冠つけたるおとめを召し

て、黄金の杖そと唇にあてゝにこやかに、さて問ひたまふ。

『いみじくも美くしき御身の裝粧かな。めぐまれたるうましの花よ、姫の御名は』

はぢらひの花の冠は、まづ仰いで口籠りぬ、かしこみ〳〵て答ふらく、

『尊さ〳〵天つ御姫よ、罪にねぶれる人の世を飾れの天敕たぶらひて、わらはの名は花冠（Corallia）とこそ申し侍べれ、これなるが合瓣花、あれなるが離瓣花、――』

『離瓣花とは』

『花瓣の一つ〳〵離れたる、たとへば櫻のごと、等しき形狀の花片五つまでも相揃へる、かゝるをばおしなべて整齊花とこそ。あれなる菜の花のごと十字をかたどれる花の名を十字花となむ。

さは神の御業のくすしからずや、すみれ、藤、蝶形花冠と稱へられ侍る。』

『合瓣花とは』

『花瓣の一つに合へる。ことに管狀花とてわざみのごとき、舌狀花とてたんぽゝの如き、唇狀花とてさるびやの如き、假面狀花とてきんぎょさうのごとき、漏斗狀花とてわさがはの如き――』

えましげに肯きたまへる女神は更にやさしく問ひたまふ。

『よし。そこに、華やかなる花冠をさゝへて、綠玉のつゝましやかなる――御身の御名は』

『尊き天つ女神よ、わらはも花被のやから、しもめの名は花の萼（Calyx）とこそ。五つにわかれたるはらからは萼片とて異國の名を Sepals となむ申しはべる。』

美はしき黄金の杖はそと閃きぬ。

『うまし香の、さはあまりにもなよ〳〵しき姿かな。御身は。』

『人のアダムになぞへ玉へる、僕は雄蕊（Stamens）

妹が名を雌蕊（Pistil）となむ。さは、智慧の樹の果實をアダムに強ひしイヴの淺はかなるうとましさはいまだえ知りはべらず――族の名を花蕊とこそ。」

雄々しき聲よと女神そゝろには〻笑み給ふ。

「雄蕊といひしな。」

「げに、長さみどりの柱は花絲（Filaments）と呼び、天にまつみどりの其の梢に、いとちいさやかなるは葯（Anthers）とて、神がとこしへにみのれ殖へよの御敕うけて、こゝに美はしくもくゆる花粉（Pollen）をつゝむ。」

「雌蕊といひしな。」

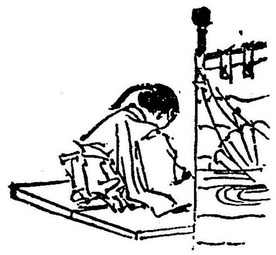
「はづかしき姿かな、ゆりませ。いただける柱頭（Stigma）に花粉を受けて花柱（Style）を傳ひ、やゝ太やかなる子房――幼兒をつゝむ――に送る。異國の名をば Ovary」

女神は羽衣の御袖微ひもあへず、白玉のごとき美はしき乳歯かすかに紅のごとき御唇をもらしたまへる。

「榮ある族や、とこしへに幸多かれな。さらば今一度び其の歌天にひゞかせたまへや。」

女神はえまじげに會釋して、玉歩さてゆるやかに花園の中をめぐりたまふ。

歌は靄に溶け、靄は風に流れて春の光はやゝにくらく暗く、くれゆく空を蛙は聲はなやかに相うたへり。



譚叢

十九世紀の文豪ディッケンス

文學士　芙蓉生

ディッケンスの誕生地――その家庭――讀書癖は少年時代から――母が語學の初めの先生――その讀書した者の種類――文學癖も少年時代から――話上手、歌上手――初めての觀劇

本誌に繪はがきとして添えたのは、『クリスマスカロル』の作者として、『ピクウヰック、ペーパーズ』の作者として、『オリーヴアー、ツヰスト』の作者として、『ニコラス、ニックルベイ』の作者として『チャイルヅ、ヒストリー、オブ、イングランド』の作者として、その他、幾多有數の文學的著作者として洽ねく人に知られて居る、十九世紀に於ける英國の文豪チャールス、ディッケンス氏（Charles Dickens）の誕生した家である。由來、山高水長の地、多く文人を產す、と云ふようなのが、わが國人一般に認められて居る思想なるにも關はらず、英國に於ける稀代の文豪ディッケンス氏は、實に、かゝる殺風景なところで、その初發聲を擧げたのであつた。しかも處はランポートの商業街（コムマーシアル、ロード）と呼ばるゝ、最も殺風景な土地であつたのである。

CHARLES DICKENS.

全体、筆者の胸算では、前回に揭げたゴールドスミスの續稿を、此の號にも揭げる筈であつたのであるが、この號にディッケンス氏の誕生した家の繪はがきを添へることになつたので、彼の續稿は次號へ廻すこととして、此の號には、少しばかり、此のディッケンス氏のことに就いて書き記すことにしたのである。ところで氏の少年時代は如何。

▲少年からの讀書癖

頃は西暦一千八百十二年の二月七日(金曜日)にチャールス、ディッケンスは英國ポートシーなるランドポートに生れたのであつた。

父はジョーン、ディッケンスと呼ばれ、海軍出納局の書記をして居たのであつた。でその母はエリザベス、パローと呼ばれ、チャールスは八人の兄弟のうち第二子であつたのである。

チャールスの誕生後、父は其の職務上、ロンドンへ轉任せねばならぬことになつたので、家族一同は諸共にロンドンへ引き移つたことである。その頃チャールスは生れて九歳の齡であつたが、丁度この頃の住居の直ぐ近くに、父が其の出納局へ勤める造船所があつたので、彼の時間の多分は、こゝで費されたゝめ、海事思想はいたく激まされ海事に關することについて、彼は無上の趣味を保つようになつたのである。

ディッケンスは、その少年時代に於いて、まことに矮少虚弱であつた。爲めに他の多くの小兒のように、活潑な運動や遊戯をすることが出來なかつた。されば、彼は決してクリケットの上手でもなければ、大將でつこの上手でもなかつたのである。が、彼は、かく他の兒童等が盛んに活潑に運動して居るとき、その傍で讀書しながら、喜んでそれを傍觀して居るのであつた。即はち彼れの虚弱は、自ら彼をして讀書好きにならしめたのであつた。而かも、かく彼が讀書好きになつた種子は彼の母に依つて蒔かれたのであつた。彼は其の母から、たゞに英語の初歩ばかりを習つたのではなく、共にまたラテン語の手ほどきも致して貰つたことであつた。まことに、彼は彼の母から、氣根好く規則正しく日々語學を學んだことであつた。

▲讀書の書類

ディッケンスは、その著作の一なる『デヴィッド、カッパーフィールド』(David Copperfield)の數節のうちに、その少年時代に於ける彼の讀書のことについて書き記して居る。

「自分の父は、その書齋のうちへ、若干の書籍を遺して行かれた、父の書齋は、丁度自分の室の隣であつたのであるから、そのうちから、夥多の面白い書籍を探し出して、しきりに讀書に耽つたのであつた。その書籍は……

Roderick Random. Don Quixote.
Vicar of Wakefield. Gil Blas.
Robinson Crusoe Tom Jones.

等である。これ等の書籍を熟讀した結果、これ等の書籍のうちに在る事柄は、空想多き自分の腦に深く印せられたことであつた。しかも、生生と腦裏に殘つた居るのである。自分は、以上の讀書を讀み盡し、猶は進んで

Arabian Nights. Tales of the Genii.

を讀んだ。これ等の書籍も決して自分を毒することはなかつた。否、自分を毒することの無かつたのみか、これ等の書籍に出て居る、自分の

家の近處の教會の一石一木に至るまでも、悉く興味あるものとならしめた。云々」

▲文學癖

かゝる讀書癖の自然の結果として、ディッケンスは夙に文章を綴ることが好きになつた。彼が斯く勉めて文章を綴つて居た結果、彼は其の同輩のうちでも最も能文者として指られては居たが、取り分け

"Misnar, the Sultan of India."

と云ふ一篇の悲劇を書いてから、彼の能文秀才の譽は最も著しくなつたのであつた。が、しかし、この一篇は彼が愛讀した一書籍『テールス、オブ、ジエンニ』に基づいて作られたのである。

彼は斯く能文であるばかりでなく、仲々の話上手で、滑稽た歌を諳ふことも上手であつた。

そのようなことの遊び仲間として、彼はその幼時、ジエームス、ラマートと呼ばるゝ少年と最も親しんで居た。これは彼の母の妹の義理ある子供

であつたのである。彼の此のジエームスに誘はれて、初めて演劇といふものを見た。チャールス、ラム(Chales Lamb)は、六歳の時、はじめて"Artaxerxes"と云ふ演劇を見たといふことであるが、ディッケンス此時の年齢は、當年のラムと殆んど同年配であつた。猶はまたウォルター、スコット(Walter Scott)は、僅かに四歳の時、はじめて"As You Like it"といふ演劇を見たといふことであるが、此の時のディッケンスの年齢は當年のスコットよりも若かつた。けれども、それは兎に角、此の時のディッケンスの齢は、道徳堅固のリッチモンドに對し、その一生の間しきりに相爭つたリチャアード王の恐ろしき樣(これは沙翁の劇『リチアード三世』のうちにある)を、その若き心のうちに記憶することの出來るほどの齢であつた。

彼の腦裏に、多少なりとも劇といふものゝ空氣が觸れたのは、まことに此の時で、はじめてであつたのである。

彼の少時年代の話は、仲々これだけで盡きたのではないが、紙數にも限りがあることだから、またの折、『ゴールドスミス』の話が終つた後に、更に改めて書き記すことにして、こゝには、之れだけで、此の稿を終ることにする。

新刊紹介

▲獨絃哀歌(蒲原有明氏著)　氏が新體の作にかゝる新体詩十五篇を、及び更に『明星』以下十五篇をば附錄として、都合あはせて三十篇をまとめて一册子とした者である。氏が新体詩は既に自ら世評があれば、こゝに今更贅言する必要もあるまいと思はれるが、今この篇中『別離』と題する一篇中の一節をこゝに紹介すれば「別離といふに微笑む君がまみ、わかるゝせめての際にそは何にゆえ、にほへる面わの罪か、世も、ねがひも、希望も、かつてかがやくその光に……かつて賴る、わが身のその幸の限りあらざりしを」。美しき册子である。(定價三拾錢、東京神田區佐久間町四丁目白鳩社發行)

冬の夜がたり

孤島

シチリーの王レオンテスとボヘミヤの王ポリクシネスとは幼き折の學校友達で、互に位を繼いでからも、手紙の往復や、使節の送迎に消息は絶たなかつたが、さて親しく顏を合せる折もなく打ち過ぎたのである。

レオンテス王今は皇后ハーミオンとの中にマミラスといふ王子をさへ擧げて、美くしい皇后と愛らしい王子を相手に、何不足もなく國を治めて居らるゝものゝ、冬の夜長の物語には、いつも昔の友達を思ひ起して、是非一度は此の國へ呼び迎えて和方にも紹介せ度いとの述懷であつた。

レオンテス王が多年の望もよう〳〵熟して、使節の往復數重ねた後、ボリクシネス王が日ならずシチリヤの朝廷を見舞ふといふ運びになる。

ボリクシネス王の來着以來多くの日數は夢の如

く過ぎた。日々の話はたゞもう幼な時の樂しさにかへつて、主客二人の心は、殆んど熔けて一つになつたかとばかり、側に侍る皇后さへ引き込まれて同じ樂しさに醉ふのであつた。

さて長々の滯在にボリクシネス王も別れを告げて歸らうとするのを、皇后の言葉で尙ほ數週間延ばすことになつたのが、抑〻災の初、自分があの位言ふたのも肯かないのに、ハーミオンの言葉一つで思ひ返すといふのは心得ないと思ふと、ナーニ、ボリクシネスに限つて其の樣なことはない、殊にもハーミオンの心は長年連れ添ふて知つて居るものを、是れは自分の邪推といふものに違ひないと、自分か自分を抑へても見るが、また直ぐに何うも怪しからぬといふ聲が腹の底から込み上げて來る。エヽ惡魔めとジッと堪へて思ひ直はさうとすれば、する程 嫉妬の焰は益〻燃え狂ふてもう殆んど留め途もない程になるのであつた。

よく氣を附けて親友の心を慰めるやうに、決し

て旅の淋しさを思ひ出させぬやうに、充分に款待をして居た王子マミラスを引き離して皇后を獄舎に下して了ふ。

マミラスは子供心にも父君の無情を怨み、また母君のお側を慕つて、日毎の悲みに夜も眠らず、食も進まず、日に〳〵痩せ衰へて今はもう死ぬばかりであつた。

王は皇后を獄舎に送つた後、クレオメネス及びデオンといふ二人の宮臣をデルフォスへ遣つて皇后の操に就いて、アポロ神の神託を伺はせる。

此の時ハーミオンは丁度懐妊して居たのが、月満ちて獄舎の中で姫君を生み落す。心淋しき獄舎の朝夕にも赤子の可愛さがまた一入の慰みで『本當にお前と同じやうに母様は何も知らないものをねい』と口も聞けぬ赤子を相手に憂き月日を送るのであつた。

皇后ハーミオンの日比親しまれるバウリナといふ夫人が一日此の獄舎を訪づれた時、お附きの女中に向つて

「エミリヤ様、皇后様に何卒左様申上げて下さいまし。姫様を此の妾にお任せ下さいますれば、何の様なことを致しましても父君のお側へお連れ申します、罪のないお顔をお覧に入れましたなら、少しはお心も和らぐこともでおらうと存じます程に、御心配なくお手離しなさいますやうにと、ね、左様申上げて下さいまし。

「本當に左様でございますよ」とエミリヤは『奥方様、直ぐに申上げませう。今日も今日、誰れか姫を王様のお側へ連れて行つて呉れる者はなからうかと仰しやいましていでございます。と起ち上つて皇后に此の由を申上げる。皇后はバウリナの志を喜んで姫君を夫人の手へ渡して、萬事を懇ろに頼むのであつた。

バウリナは姫君を受取つて歸ると、夫のアンチゴナスが王の御機嫌を氣遣つて止めるのも肯かずに、御前へ出て皇后の何も知らぬことを充分に辯解し、王の處置の間違つて居ることを憚りもなく

申出て、姫君を其の儘其處へ置いて下つて來る。

バウリナの考では何といつてもあの無邪氣な御顔を御覧になつたら王の御心も幾らか折れるに違ひない、左様したらまたハーミオン様の御難儀も自然と消えるやうにならうと思つたのが、案に相違して王には大變な御立腹、直様バウリナの夫アンチゴナスに命じて、海を渡つて人の目に附かぬやうな他國の海岸へ此の赤兒を捨て來いとの御錠なので、アンチゴナスは即刻船に乘つて何處ともなくシシリーの岸を離れたのである。

レオンテス王は皇后に不義の行ひがあつたと一圖に思ひ詰めて、デルフォスへ遣つた使の歸りも待たず、皇后を朝廷へ曳き出して、公卿群臣の列座の前で、其の罪を審問する。

クレオメネスとデオンの二人の使節は恰も此の審問の席へ歸り合せて神書封のまゝ王の前へ捧げるのを近侍の者が高音に讀み上げる、其の神託は斯うであつた。

『ハーミオンに汚れなく、ポリクシネスに罪なし、カミルロは誠の臣にして、レオンテスは嫉妬深き暴主なり、若し失はれたるものを見出ださずんば遂に王嗣なし。』

群臣襟を正して此の神意を傾聽する中に、王は獨り此の樣な言葉は畢竟皇后ハーミオンの一味の者が故意に作つた詐りに相違ないと言ひ消して、尚ほ審問を續けやうとする。

此の時一人の者が入つて來て、王子マミラス母君の今日の審問のことを聞くと等しく、且つ悲み且つ耻ぢて、俄にれ沒れになつたと申上げる。

之れを聞いたハーミオンは姫君を奪はれた悲みの上へ、重ね〳〵の此の凶報に、胸も潰れ、今迄抑えた心の張も弛んで、其の場へ氣絶して了ふのである。

王子の御逝去といひ、また皇后の此の有樣は電の如く王の胸を突いた。

其の上にパウリナが折角の介抱も其の効なく、

皇后樣にはついあの儘に御落命遊ばされましたと聞いた時には、流石の王もさて不愍なといふ心が込み上げて來て、今迄は嫉妬の雲に蔽はれて居た心の光も俄かに晴れ渡つたやう、由なき疑心のため罪なきハーミオンを殺し、最愛の王子まで死なしたのも思へば皆な此の身の過ちであつた。

夫れにしても爭はれぬは神の御言葉である。

『失はれたるものを見出ださずむば遂に王嗣なし』

とあるからは、たゞ捨てた姫を尋ね出すのがせめてもの頼みである。あゝ今思へば何うして彼の樣な恐ろしい心になつたものであらうと一念發起しては、今迄のこと全で夢のやうである。

此の後王は只管悔恨の念に責められ、姫の身の上のみを思ひ煩らつて、十數年の月日をたゞ味氣なく送つて居た。

（その一終り）

鐵血宰相瑣談

ドクトル、オブ、フイロソフイー　鹽澤昌貞

近頃伯林の友人からビスマルク公の逸事や直話などを集めた小冊子を贈つて來た。讀書正に倦んで精神の疲れた際一閲して頗る興味を感じた儘に、其内より二三節を抄譯した。ビスマルク公の事に就ては勿論英雄の心事は英雄知るだから敢て贅言を加ふるの必要はあるまい。

▲ビスマルクと佛國

政治家ファブル

普佛戰爭終り千八百七十一年九月二十七日にビスマルクが佛國の政治家なる媾和委員ジュール、ファブルと談判中ファブルは涙を流したと云ふ事だ同月二十七日にビスマルクは客を召て馳走の席で右に就き次きの樣な話をした

『それは眞實だ。渠れは眞に泣いた後に見へた。わしも氣の毒と思ふて少しく慰めては見ました。然しわしは熟ら〳〵觀ると渠れは大丈夫眞の涙

を出したのでは無かつたと思ふ。渠れは大方巴里の辯護士が公衆に對する樣に少し演劇を使つてわしを動かさうとしたに相違ない。わしは渠れが又白粉を着けて來たことも確かに知つて居る、第二回の談判の時は特にそふだ。悲痛と深愁とを示す爲めに渠れは何時もよりも遙かに蒼白に見へた。恐らく渠れには實際うまく出來た積りだつたろう。が、渠れは政事家ではない、感情の表現など云ふことは政事に屬するものでないことは知らなければならん筈だ。わしがストラスブルヒとメッツの事を持ち出した時は渠はわしが冗談でも言ふと思ふ樣な目附をしてわしを見た。其時わしは彼のウンテル、デン、リンデン街の大きな皮革屋、彼れの名は何と云ひましたツけね……彼れがわしに言つたことを話して遣りたかつた。わしが曾て妻と共に右の皮革屋へ外套へ附ける毛革を求めに行つた事がある。一ツ氣に入つたのが在つたから聞くと大層高か

い價段を言ふから、わしは『御前冗談を言ふて居るのだろう』と突き込んだら『どう致しまして、商賣に冗談は申しません』と遣り込められた

▲最貴重の葉巻煙草

ビスマルク後年語りて曰く

『ケーニヒジレッツの役であッたが、余は軍服の隠しの中に只ッた一本の特製の葉巻煙草を持ッて居て、合戰中恰かも客嗇家が其の財寶でも保護するやうに大切にして置いた。いまだ一度もそれに口を附けなかッたので、軍さが勝利となッた跡でゆッくりそれを吸ふたら、さぞ好味だろうと思ッて愉快の時間が來るのを待ち兼て居た然るにすッかり當てが外つれで仕舞ッた。余は偶然一人の龍騎兵が負傷して横はッて居るのに出逢ッた。其兩腕を挫折して何とも仕樣なしに仆れて居り、何にか飲み物でも欲しそうに呻ッて居た。余は服の隠しを悉く捜したけれども金錢ばかりしか見附からぬ、金錢では役に立たぬが、例の大切の葉巻煙草はまだ持ッて居たから直ちにそれに火を附けて負傷兵の口へ入れて遣ッた。其時彼の不幸者の感謝を表した笑顔ばかりは眞に人に見せたかッた。吁嗟わしは自分で飲まなかッた彼の煙草程貴重な佳ひ味がした煙草は知らぬわい』。

▲ビスマルクと モルトケ將軍

ビスマルクが曾て戰陣中にモルトケ將軍に出逢ッたことがある。其の時ビスマルクは只ッた二本の見本葉巻煙草が入ッて居た煙草入を軍略家に差し出した。將軍はそれを受け取ッて、能く氣を附けて二本の内の佳い方を摘み取ッた。これに就てビスマルクは後ちに人に語ッて曰く

『それからわしは御互ひの見込みはどうしても誤ッて居ることが有り得ぬと斷定した』

本多庸一師

不紡生

一

▲基督教界の名士

有美青柳君嘗て押川師を論じて言基督教界の事に論及して曰はく、

『今や我が日本の基督教界も、亦稍と此くの如き觀ありて、今の思潮に先んずると一歩、到底事を今の世と共にする事能はざる如き一種の人才と不平家とは皆遁れて基督教界に隠れ居る者の如し。これを譬ふるに、日本現時の基督教界は潜龍窟にも似たらんか。其内にありてこそ人々樣々の批難もあるなれ、これを天下に押し出せば多くは之れ一騎當千の強者にして、皆一代に珍たる人物を得べき者也。雲照の如きを得るは或は難からんも田舎のヘッボコ牧師なれば且つ多くは宗演以上の識と胆とを備へ、又其の修養に於て勝る所なしとせじ。今の基督教界にありて稍〻頭角を擡げつゝある者を起こして、これに位置を與へ、處を得せしめば、皆以つて國家主要の任を負うて

Rev. Y. Honda.

能く其の責を盡くすに足る者あるや固より也」と、蓋し至言なり。よし其の言中多少の誇張の嫌なきに非ずとするも、苟くも釋宗演禪師さへ得易からずとする佛教界に比して、如何に基督教界の人材彬々たるかは識者の夙に唱導する所なり、聖壇の燄時として電光石火を閃かし、忽として其のひそむや天下の風雲杳として聲を收むるの觀あるわが押川方義師や、靈火内にもえて、而も唯見る溫健の君子、實踐躬行の如雲巖本先生の如き、天浩々たり、地渺々たり、山をも貫く信念の泉より迸る雄辯に帝國の新生命を絶叫する海老名彈正師の如き、博學多識よく万巻の蘊蓄を備ふる植村正久師の如き、何れも是れ當代の師表として餘りあるもの。其の他よく罵り、よく書く内村鑑三君あり、よく怒鳴る松村介石君あり。小崎弘道君、宮川經輝君、長田時行君、横井時雄君等何れも非凡の才識と手腕とを有するの士にして、社會主義の先驅者としては、片山潜君あり、安部磯雄君あり、

熱烈火の如き木下尚江君あり。政界隆々の盛名ある者を擧ぐれば、片岡健吉君、江原素六君あり。孤獨正義の壘に據りて政界の麒麟兒加藤高明氏と爭ひ、大多數の得票を以つて中原の鹿を射たる島田三郎君あり。若しそれ隱れたる珠玉を求めんか北米の野に放浪する事三十年、此の間高徳ハリス師に就いて修練苦行細ぶさに嘗め、殆んど祈禱と斷食を以て神に事へ、轟然として一旦悟る所あり一昨年飄然歸つて小石川の閑居に隱れ、靜念奉神の悟道に樂しむ奥邃新井先生の如きは、實に天下稀に見る所にして、其のいふ所、其の說く所、深遠幽妙、漂莅として天地の窮まりなきが如く、宛然ら幻影の捕捉すべからざるが如し。且つて政界の名士あり、師を訪ひ卒然問をなして曰はく『貴下どうして生きていらつしやいます』と。蓋し衣食の道なくして而も平然たるを怪しめる也。師冷然として曰はく、『殺す人がないから生きて居ります。』客啞然として去れりといふ。其の言ふ所概ね

かくの如し。

而して、更に第一流の人物として、身は一の私立學校長に過ぎざれども、而も隱然わが基督教界の大黒柱として、實に千鈞の重きをなす本多庸一師を忘るべからず。

二

▲基督教界に於ける師の位置

舊教の一派ヂユスヰットの徒が、天草の亂に敗ぶれてより、邦人の頭腦に映ずる基督教なるものは全然國を毒するの邪教として排斥せられ、因習の相久しき、切支丹バテレン邪宗門の名は、今猶は一部の人士に蛇蝎の如く忌まるゝと雖も、而も新思想の發達と共に、有爲なる青年が靈的渴望に堪えずして、來りて基督の十字架の救贖に縋る者漸く盛んに、新教の我が邦に入りてより僅かに四十年に過ぎざるも、今や優に五萬の基督新教徒を數ふるに至り、卿々たる人才は翕然としてこゝに集り、一大新天地を形くる觀ありと雖も、而かも

猶は其の活動の殆んど見るに足るものなきは是れ果して何の因ぞ。求めて一を得たり、曰はく、小黨朋派の小ぜりあひ是れ也。

曰はく一致教會、曰はく聖公會、曰はく組合教會、曰はく浸禮教會、曰はく普及福音教會、曰はく美以教會、而して其の外廓としてはユニテリアン教會あり、救世軍あり。曰はく何、曰はく何、殆んど數ふるだに其の煩に堪えざらんとす。況んや全じくウエスレーより出でたりと稱する美以教會にして、猶は監督美以、加奈陀美以、南美以、日本美以等の諸派に分かれ、表立ちての爭はなくも、相互感情の疏通せざるものあるは彼我の共に認識する所なるをや。殊に近時新舊思想の衝突よりして神學上の爭端ははしなく教派の確執となり、聖なる神の宮居に、時に聽くべからざる呪咀の叫をさへ耳にする事なきに非ず。爭ひやよし、而も其の爭たるや必ず正々堂々たるべし。何爲ぞバリサイ一派の徒を學んで、卑怯にも他の揚げ足を取るの

を學ばんとする。

而して此の弊は實にわが教界、是れを統轄するの人才を缺けるに因するなきか。說教家やあらむ學者やあらむ、才子はあらむ、智者やあらむ、而も是等を悉く網羅して、各〻其の得意によりて其の人を用ひ、遺憾なく其の手腕を揮はしむべき統轄の大才に至りては是れを何處にか求めむ。船頭の多き船は却つて轉覆を免かれず、一人之れを統轄する大度量を欠ける我が基督教會の、依然として吳下の亞蒙たるの觀あるもの決して故なきに非ざる也、あゝ偉人出でよの叫び豈偶然ならむや。彼の一時熱火の如く燃えあがりし大擧傳道の、何等日本の靈性上に献ずる所なく、否、却つて倦退の頽勢は、今や教會をして殆んど凡べて昏睡の狀態に居らしむるに至りしもの、思ふに其の原因や多からむ、而も其の根本的原因に至りては、實に教派の小ぜり合ひ也、つまらなき睨合ひ也。而して最も重きをなすものは言ふまでもなく「遺憾なく其の手腕を發揮せしむべき統轄の大才」の缺乏に歸せずんばあらず。

然り其の人今やなし、然れども此間、若し比較的に成功に近き、より多く其の任に堪ゆべき人才を擧げしめば、一人あり、本多庸一師是れ也。

史に稱す。元龜天正の頃群雄四方に並び起り、一代の風雲を掌中に握るべき英雄其の人に乏しからざりしが、而も遂に覇を天下に稱して三百年の基礎を定めしものは、寧しろ敗軍の妙を得たる三河の小身德川家康なりき。這般の消息必ずしも識者を通してはじめて知るべきものならむや。

三

▲半生の師の經歷

聖經に曰はく、

『人は二人の主に事ふる事能はず、なんぢら神と財に兼ね事ふること能はず』（新約馬太六、〇二四）

此の聖言は、よく本多師の半生の面目を說明し得て餘りあるを覺ゆ。

師はもと奥州津輕の藩士にして、所謂二本棒を腰にたばさみし「おさむらひ」の一人なりし也。時は德川の末流、安政嘉永の黑船騒ぎは鬱積せる風雲を捲いて天下益〻騒然、幕末の頽勢は殆んど救ふべからざらんとす。あゝ三百年の榮華の夢はあともなく、うすれゆく夕日の影にも似たる千代田城頭の悲雲を仰ぐ、義涙なからむや。乞ふ大義名分を努々するをやめよ、勝てば官軍、負くれば賊軍、當時に於ける天下の大勢豈必ずしも、しかく容易に測斷すべきものならんや。

伏見、鳥羽の役は彰義隊の敗走となり、榎本が率ひし艦隊は舊幕の脫兵を滿載して北海に走り、東北の雄鎭會津、庄內、仙臺等、所謂奥羽六國同盟は立所になり、殺氣に滿ちたる戰雲は見る〳〵東北の天に渦いて天下の安危いまだたやすく知るべからざるものあり。此の時に當り、幼き本多の「われちさむ」は、年少氣鋭の一腕白者として一番に鳴り、或は干戈砲煙の裡を潜りて會津に走り、庄內に使し、書策至らざる所なかりしと雖も、而も大厦の壞るゝは一木の支ふべきに非らず、搖るぎそめたる三百年の礎は遂に如何ともすべからず。六國同盟は破れぬ、會津は白虎隊の奮鬪に名殘りをとゞめ、尋いで庄內藩の歸順となり、函館戰爭は五稜郭畔の白旗に終り、王政は正に舊に復して明治維新の大業は成りぬ。時勢は一變せり。有爲の男子が願るべきの時は來りぬ。

明治三年、師は擢ばれて津輕藩の遊學生となり、横濱に出でゝまづ宣教師某に就いて泰西の學を修む。是れ師が基督教に近づきし第一步なりし也。由來聖壇の說教によりて眞に救はれし人あるを聞かず、百千の傳導師の千萬言の說教よりも、更に力あるものは、人物の感化也。說かず、語らず、嘿々默々の裡に閃く人格の靈光は是れ傳道の眞訣也。蒔きたるの種はいつしかに芽ばえざるべからず、我れ知らず、彼れ知らずと雖も、熱誠なる宣教師の高き人格は、不知不識の間に耶蘇教證據論を本

多師に吹きこみたる也。果然迫害は起これり、嘱々は高まれり、當時弘前市中に於ける基督教徒の迫害は非常なるものにして、異國の邪教を信じたりとの理由を以て、累代相傳の一刀を擧げて其の愛子に擬したる慈母さへありし也。

而かも一度射られたる靈光は再び暗ますべからず、「われよりも息子娘を愛するものはわれにかなはざるもの也」とのシナイの神の聲は、本多師をして凡べてに打ち克しめたるなり。明治五年斷然決する所あり、荒ゆる迫害を甘んじて受洗し、師は遂に基督教に入れり。新たなる生涯は開けたり新らしき望は加はりぬ。而して時代精神の革命的反動は、師をして全然身を宗教界に投じて忠實なる基督の僕たらしむるに至れり。

間もなく再び横濱に出で、七年また弘前に歸へり、當時昂天の勢ある菊池九郎氏等によりて設立せられたる東奥義塾に入りて教官となり、遂に出でゝ青森縣々會議長となり聲名藉甚たりしが、事により自ら退き、愈〻按手禮を受けて傳導師となり、直ちに海に航して北米に遊び、廿三年歸朝し議會の開設に大いに盡力する所ありしが、幾程もなくして籍を宗教界に置くものは政事に干與すべからずとの布告を見るに至り、一時非常に煩悶に煩悶を加へしが、遂に二人の主に事ふべからざるを曉りて冷然政界と斷ち、塵世俗界の幻にも似たる聲望を弊履の如く打ち棄てゝ一念奉神の自由にたのしむに至れる也。

問ふ、宗教家として師は如何なる成功を此の世に成せしか。

四

▲宗教家、教育家としての師

且つて青山學院に遊び、其の禮拜に列りしことありき。定刻にして牧師は立つて壇上に起てり。其の人短軀肥滿の洋服姿おかしく、やゝ禿げかゝりし半白の胡麻鹽あたまを振りて、先づ眼鏡を直ほしてさて聖書を開けり。年齒正に五十余、赤子

も懐くべき莞爾たる温容なり。友側にあり、耳語して曰はく、是れ有名なる本多庸一師なりと。暫くして其の語るを聞けば、やゝ濁を帶びたる音吐は朗々として巨鐘の響の如く、時々眞摯の中に諧謔を交じへ、手を振り足を動かして極めて快活なり、極めて愉快げなり。而も其の説く所に至りてはどこまでも是れ平々凡々、何等天來の福音もなく、奇警人の心膽を刺すが如き節もなし、飽くまで有りふれたる舊説を、出來得るだけやさしく、出來得るだけ單純に、如何なるお爺さむ、お婆さむにも了解する樣に敷衍せるに過ぎず。Why なしの信仰——彼の田舍牧師の口癖なる「唯信仰」の口調と何等の選ぶ所あるなし、後、九段美以教會にゆき、再び本多師の説教を聽けり、全じく前に見る所の如し。試みに信者の誰彼を訪ひて談本多師の事に及べば、皆曰はく『本多先生は好い牧師さんです、あんな好い方は他にありませんよ』と是れある哉、基督の使徒を選び玉ふや、必ずしもパウロの如き博識の人のみに限らざりしを。

是れを其の閲歴の上より見るも、是れを其の人物の上より見るも、本多師はたしかに今の基督教界に欠くべからざるの人にして、其の特色は實に平凡のうちに眞理の大綱を捉へ、言笑の間に煩雜紛錯の事柄をわけもなくまるめてしまふの手腕を有するにあり。一時の瀾經と譏る勿れ、間に合はせの姑息主義と罵るなかれ。新舊思想の過渡時代に於て、基督教的教養に長けたる師の、最も重要の地位に立ち得しもの故なきに非らず。加ふるに基督教會なるものの多くは、今猶ほ資を外國に仰ぐの悲境にあるを以て、東西洋を異にし、人情相異る宣教師の徒が、頻りに干渉容喙を逞しふして爲めに有爲の人士往々にして彼等の制臂を蒙り、遺憾なく其の手腕を揮ふ能はざるの結果、兩者間の衝突は常にわが教界に絶えざる所にして、是れ最も本多師の大量に俟つ所多き所以也。

かくして師は、單に美以監督教會に於いて重んぜらるゝ牧師たるに止まらず、日本基督教會の重鎮として、又日本組合教會の重鎮として、又日本聖公會の重鎮として、又日本メソヂスト教會の重鎮として、又日本バプテスト教會の重鎮として、又日本ユニテリアン教會の重鎮として、又日本ホーリネス教會の重鎮として、又日本ルーテル教會の重鎮として、又日本カトリック教會の重鎮として、又日本ギリシヤ教會の重鎮として、又日本ロシヤ教會の重鎮として、又日本ユニバーサリスト教會の重鎮として、又日本クエーカー教會の重鎮として、又日本セブンスデー教會の重鎮として、又日本アドベンチスト教會の重鎮として、又日本ミッション

ぜらるゝのみならず、教界——いづれの基督教會に於いても歡迎せられざる所なく、師の聲望は内外人を通じて老幼に關せず藉甚たるものあると共に、矯風事業に、社會事業に、慈善事業に、神を知らざる幾多上流社會の人士によりて認識せられ尊敬せられつゝある也。

而も師は遂に多數の人に非らず、宗教家として比較的に成功したるの師は、其の副業といふべき教育事業に於いて、寧ろ大いに失敗したるものの如し。師は、今や青山學院教會の牧師たると共に青山學院に總理たり。福音同盟會に會長たると共に、青山神學校、女學院、手藝學校の校務に參與する所多しと聞く。而も萎微として振はざる青山學院の現情は、たそがれゆく秋の枯野の雲低く、廢寺の鐘聲遠く大江に消え行くにも似たらずや。活氣なく、生命なく、何等校風の揭げて以て他に誇るに足るべき者あるなし。是れを仝じく宗教學校？的なる明治學院に比し、江原氏の麻布中學に比し、立教中學に比し、何ぞ夫れ遜色ある事しかく甚だしきや。地積三万坪、遠く都門の塵を離れて雄然天下に鳴りしもの、今にして寥として聞く所なく、一人秀才のあるありて校名の重きをなすものなし。あゝ青山神學校の名世に忘らるゝや久しく、今や青山學院なるもの漸くまた世に忘却せられんとす、是れ果して何の因ぞ。

今や教育界の濁流は滔々として止む時なく、殊に近時教科書事件の醜態は天下青年の風紀に惡影響を及ぼす事非常に大なるものあり。此の時に當りて、特に其の特色を精神教育に有する青山學院の、振はざる事かくの如きに至りては頗る心細さを感ぜずんばあらず——あゝ學風の獨立、是れ實に識者の三考に値すべき問題に非らずや。

（論じて未だ半ばに達せず、而も紙數已に限りあり。暫く擱筆して次號にまたんと欲す。（六月六日）

鐵血宰相瑣談

ドクトル、オブ、フイロソフイー　鹽澤昌貞

これは首題の續稿である。尙ほ本誌へ揷さんであるのは、青年時代のビスマルクを銅像にしたものと老後のビスマルクが其の庭園を逍遙して居るところである。この揷畫を此の話と對照して讀まれたならば一層興味があること、思はる。

編輯者しるす

▲ビスマルクの愛犬

古來英雄豪傑と愛犬の話は珍しくない。上野公園の高臺に儼然として立て居る明治の人豪西郷南洲の銅像も其傍に平生の愛犬を伴ふて居る。支離滅裂なる聯邦を統合して今日の獨逸帝國を創建したる近世の偉傑鐵血宰相ビスマルク公も常に愛犬を伴ひ居たことは能く知れ渡つたる事實で、其愛犬は「帝國犬」（ライヒスフント）と稱せられて獨逸帝國内に聲名を馨かしたものだ。ビスマルクの一生中には其愛犬にも數度交迭があつたが、何つれも皆主公に對して誠實なる忠僕であつたことは「ビスマルク」の直話を見て分る。「帝國犬」中で「チラス」（上古波斯國の大王の名で英語では「サイラス」と呼ぶ）と名つけられたる愛犬は有名なものであつたが、其前に公の寵遇を受け居たる「ズルタン」（英語の「サルタン」にて土耳古王の稱）と呼ばれたる犬も頗る尤物否雄犬であつた。左に記するはビスマルクが其家族附醫師ドクトル、ハンス、ブルームと云ふ人に話した直話である。

「わしが旅行をすると、「ズルタン」は何時でも大憂鬱の体で室中わしを探し廻つた。どうしても見當らないので、到頭わしの白色の略軍帽と鹿皮の手袋を見附け出して少しく安心したと云ふ体でそれを噛へてわしの書齋に這入り込みて、

自分の鼻の先きをその上に載せて横はり、わしの歸るまで何時でもそうしてじつとして居た。

老「チラス」も矢張り頗る怜悧で又忠實であつた。わしが帝國議會へ行く時常に官宅の庭園を通つて裏門からケーニヒグレッツェル街に出ましたが、「チラス」は何時でも愉しそうに隨て來る。

裏門を開けてわしが「チラス」に唯一言「帝國議會」と言ふと「チラス」は頭と尾を下けて不性々々に跡へ戻りました。或る時わしがうつかり杖を持つて出て來たことがある。其時は軍服を衣て居つたので、街上に杖を携いて行く譯には參らぬから、裏門を出る前に、庭園の塀へ立て掛けて置いた。それから四時間經て帝國議會から歸つて來た。然るに「チラス」は何時もの樣に宅の入口へ出てわしを迎へなかつたから、不審と思つて守衛巡査に犬は何處に居ると尋ねた。巡査の返答は斯うであつた、『彼犬は四時間程御庭の裏の塀の側に立つて居まして閣下の御杖の近所へ何人をも寄せ附けません』。

又或時わしが「チラス」を伴ふてアルチンへ運動に行つたことがある。其時小車の上に小材木が積んで在るのを見た。其木か生木から伐採したる所を見ると必定盜伐したものとわしは鑑定した。それで犬に其車の側に停つて居れと命じてわしは何人かに其譯を尋ね樣として其處を去つた、それでわしは跡を振り向いて視ると「チラス」は跡に氣が掛りながら矢張りわしに附て來る。わしは更に跡へ戻つてわしの手袋を其車の上に殘した。すると「チラス」は其所に腰を据えたつきり一歩も去らずに番をして居ました』。

▲『假從兄』

近頃の事であるが、瑞典國の一老婦人がビスマルクの逸話に關する次の如き一條の面白き物語を公けにしました。

『私が未だおぼこ娘の頃で、今から六十九年も

前の事でしたが、伊太利の羅馬府へ參つて數月間逗留する樣になつた事がありました。それで一人の老女と二人の侍女に伴はれて旅立をしました。羅馬へ參る前に伯林府に暫時立寄ると云ふ事に話が極りました。私しの父方の伯母が獨逸人に嫁づいて居まして一人の息子がありましてそれを皆んなが『獨逸從兄』と呼んで居ましたが、私しはまだ一度も逢つた事がありませんでした。丁度其時に右の從兄は伯林で修業中でありましたから、私しの出發前に父が手紙を出しまして何時々々に私しが伯林へ參るから其節はよろしく案内を頼むと申し送つて置いたのです。私しも無事に伯林へ着きますと『獨逸從兄』が大そう親切に迎へて呉れました。その從兄は鼻の下に濃い鬚があり妙にひかる眼を持て居る逞しいカップクの青年で、私しの伯林滯在の三日間と云ふものは、私しに附き切りでそれは〳〵大層親切に世話案内をして呉れました。尤

もその從兄は瑞典語は少しも出來ませんでしたけれども、立派な佛蘭西語を使つて居ました。

私しはあんな良い方には逢つたことがありませんでした、私しは『獨逸從兄』に就てはほんに鼻が高く感じたのです。そうこうする內に時も直ぐに經過して私しは伯林を立ち去ることゝなりましたが、丁度私しの出發の折りでした從兄が私に向つて申しました『僕は御身に一言申し上げたい事があるのです、御覽なさい僕は……エー僕は……エー實は御身の從兄でないと云ふことを御知らせ申したいのです、御身の眞實の從兄は僕の親友ですが今丁度試驗の準備で非常に忙しく勉強中で、御身の御父樣の御申越に付て實はどうか僕に代理をして呉れと云ふ譯であつたのです、僕はオットー、フォン、ビスマルクと申す者です』

私しはそれを聽て吃驚して辭も出ずに見詰て居ます內に馬車が動き出したので胃嚢の青年は飛

び降りて仕舞いました。それより幾十年の月日は過ぎ去りて當時の名も無きビスマルクは帝國の宰相となり公爵と出世しました。で私しも結婚してから四十年經つた後の事ですが一老婆の姿で千八百八十六年に再び伯林へ參りました其時私しは私しの名刺へ一二語書付けて公爵の所へ送つて見ました。すると一時間程經て公爵の所から招待狀が來まして私しは早速帝國宰相の官邸へ參り。直ぐ打解けて昔語りが始まり大笑ひを致しました。ビスマルクは其時上々機嫌でした。四方山の話しの内に公爵は斯う申しました『私しが彼の時伯林の博物館や見世物などを觀に行くことが出來たのは御身の御蔭だから御禮を述べなければなりません、私しは彼の時以來復たと行つたことがありません』。

編輯だより

▲九夏三伏、まことに堪えがたき此の頃に候、讀書せんにも興來らず、晝寐すれば蒼蠅めが邪魔をする、あ、〳〵云はんかたなく不愉快なる此のころに候はずや。會員諸子のうちには、それ〴〵山紫水明の地に旅行されし向きも之れあり候こと、存候。本會は諸子の消息聞かまほしく存候。

▲前々たび〴〵申上置候、第一期『中等教育』棹尾の號も、月の十日發行いたし候。即ち之れにて第一期は少しく不完全ながらも完結いたし候ことに御座候。第二期の會員諸子も參考として右第一期をも別に御購讀あらば、中等教育の智識を圓滿完全ならしむる上に、最も良好のこと、存ぜられ候、敢て右御勸め申候

▲會員諸子も既に御承知の如く、本會諸講師は、いづれも各方面に於いて第一流の人々に御座候。されば從つて仲々多忙なる人々に御座候。されど此の夏季休暇中には、それ〴〵かねて本會が囑托し置ける各講話に筆を執らるゝ筈なれば、本誌はます〳〵多趣味のものと相成り行くこと、存候。

▲中等教育講話會も、來る秋冷の候を期して開會さるべき筈に御座候、巨細のことは恐らく次號に發表さるゝこと、存候、匆々。

——六月二十一日——

楠正儀の德風

大塚素江

和泉、河内、大和、三州の地に據りて、足利氏が天下の勢に抗し、南朝三代、五十年の偏安を能く一木に支へたりし、楠氏の義膽忠肝は、事新しく說かずとも、一門闔族奉公の至誠、懦夫をも起たしめ、鬼神をも泣かしめ、末代人臣の龜鑑ぞと稱へらるゝ中に、獨り、左馬頭正儀のみ、兎角後人の議論を免れざるは實に惜むべき事なり。尤も、正儀、晩年に到りて、常久入道賴之が執持にて、君父三代の怨敵たる室町義滿に降り、一時、花の御所に、大紋の袖列ねて、菊水の淨きを涴しゝのみならず、當時、南帝の宮居たりし天野殿に、反り忠の一矢射向けたりしは、いかに、庇護せんとしても、掩ひ得ざる事實ながら眞實、正儀、南朝の微運を倦み、望みなき恢復の軍慮に疲れ、父兄烈霜の遺志を擲ち、名も、辱も、君をも棄てゝ、徒らに、一身の榮華を冀ひたりしものならば、既に、義滿の恩眷渥く加はれる日に於て、攝河泉三州の本領相違なく知行せしむべきの教書握りもちて、何を苦みて、今は、纔かに、吉野の一角に、悠陽西天の微光をとどめたる南朝に皈順したりしか、こゝが、後世史家の、大に研究すべき疑問の一つでは無からうか。去れど、开は、別問題として、こゝには省き、他日研鑽を經て後論ずる事と爲さう。

正儀、元來、資性愼重、事に莅みて輕忽に動かず深慮熟考意到りて即ち發す、といふ質の人物にて偶〻、機を逸するの弊なかりしとも云はれぬが、亦、事に處して、甚だしき遺策を見なんだ。去れば、延文年間、畠山の道誓が率ゐたる今上りの坂東勢二十餘万騎、楠和田も何程の事やあらん、唯一と揉みに、吉野を攻落せと、競ひける時に方りて、僅かに、三万に足らぬ味方の小勢をもて、豫め必勝の利を期して懸け合せ、痛く兀龍の角を撓

め、尾を鞭うちたりし如きは、坐ろ、乃父の俤を偲ばしめるが、惜むべきかな、餘りに重き父正成の令名や、一閃直ちに敵人の心をさす、兄正行が電の如かりし利兵の氣にけおされて、遲重、因循、なまぬる殿など、あらぬ名呼ばれたりしが、兎角の是非はさておいて、要をとりて、評すれば、氣に於て、正行には劣りしものゝ、量に於ては、正儀優に、一日の長があつた。近き例は、正儀、北方の降將細川清氏と、相率ゐて、義詮を追ひ落したりし、康安の都責めに、佐々木道譽が明屋敷に入りかはりける時、道譽、脱るゝに方りて、豫め、掃灑盛飾意をこめて、酒瓶を湛へて、人を殘し置きて迎へしめければ、燒拂はんと罵り喚げる清氏を制止して、障子一重毀らしめず、其の後、軍利なくして、己れ都を落る砌、秘藏の鎧に、白幅輪の太刀一振添へて殘し留めて、道譽が厚意に酬ひたりしなんどは、大平記中の美談として、湛々たる襟懷、うたゝ、正儀が丰彩を想見せしむるが、敵人の首級手玉にとりし正行が一代の事蹟中には、迚も這個の消息をば見出し得ぬ。扨て、茲に、正儀が仁心、敵人の怨恨を和げしめける一事を叙して、諸子と共に、古長者の風彩をしのばんか。

當時、楠氏の押へとして、津の國を固めありし、赤松の大夫判官光範、屢〻、正儀が奇變にあてられて、脆き敗軍のみしてければ、流石、聞えたる勇將も、すべき樣なくて、いかにして、此の無念はらさんかと、やすからず悶に憤り、切齒して過しありしが。于時、光範、側近く召使へる兒小姓に、熊王といへる童子があつた。此の熊王は、去ぬる年、住吉の合戰に、光範既に危かりける析柄、懸隔てゝ、正儀方のつはものに討たれて失せにし、宇野の六郎とて、赤松家にて、聞えたる勇士の、その遺子にて、未だ、やう〳〵十歳ばかり、若干もこえぬ小悴ながら、穗にあらはるゝ光範が遺恨の面持　さも堪へぬげに罵る言葉、見るにつけ、聞くにつけ、年齒には勝りて、大人びたる心に、

父を討たせし吾が遺恨をもこきまぜて、遙かに河内の方睨みやりては、孱細き腕振りて、人知れず打泣くことしば〳〵であつた。

ある夜、光範、徒然なるまゝ、近臣等を對手にして、何の城責め、それの退口と、面白かりしこと、難儀なりしと共、語り出て、座ろ興を催しありしが、果は、復た例の大息吐息、さるにても、心憎きは正儀が軍さだて、彼れ、いかに、父判官が弓矢傳へたればとて、我れも亦、赤松の光範なり、今の世に、名を得たる武士の、誰れに劣らんとも覺えず、幾十ヶ度の戰場に往來して、勝つも、負るも、思ふ程手痛き軍さして、武勇の譽れこそ顯したれ、曾て、見苦しき芝生踏みたることなかりしが、正儀に懸合ひては、何時も、彼れが、小勢の軍に懸惱まされ、立足もなき脆き敗軍のなしつること、光範が一期の名折れ、あらぬやからが嘲りにあはんこと、心外此の上なしとて、鬢髮戰がして、憤り喞ちければ、側に侍べれる熊王、今ははや堪へずなりけん、悄然と光範が前に進み出、いかで、殿、今宵かぎり熊王に身の暇賜はれかしとて、はら〳〵と泣きて平伏した。光範、心得ず思ひて、何事の意にみたで、左は願ふぞと、訝り問へば、熊王、いたいけなる涙の面振仰向き、光範が面つれ〳〵と打まもり、頓て、復たさし俯向き、歔欷しつゝ、左ばかり、止みがたく憤り在します殿の御無念、いかで、晴らし參らせたく、二つには、又、住吉の合戰に、討たれて果てにし父六郎の讐も報ひたく、身の暇たまはりて、河内へ立越え、いかにもして、赤坂の御内に仕へ、隙を窺ひて、左馬頭を一刀に刺通し、御首賜はり候はんと、やう〳〵、小弓射習ひし稚き者が、雀は追はで、人にこそよれ、宮方の總大將、楠左馬頭正儀が首級揚げんとは、容に似ぬ膽の太さ、左りとては殊勝らしさよと、光範歎賞の涙を湛へ、あゝ流石勇士の名を得たりし六郎が子なるよ、健氣なり、去りながら、汝よく思へみよ、意到らず、力

足らぬ、小冠者が小さ刀に、討取らるべき敵ならば、我れかばかり惱みはせじ、益なき事に心勞らし、若し恙など起らば、光範いかに悲しからん、我れに代りて討たれたる忠義の武士の生形見、またなく最惜きものを、おらけなき敵人の刃の霜に枯らさんとて若草のをさなき身を、などか放ち遣るべき、去る事は思ひ絕えて、たゞ、側近う仕へよ、頓て、正儀が首とりて得させんずと、諭し和むれども肯かで、押返し、稚き程こそ、左馬頭も心ゆるして近づけ給ふべけれ、大人びてはいかゞ候はん、今の間に、河内に參り、一年、二年、七年八年、心長く仕へさふらはゞ、討つべき便りもおはすべし、お暇たまはせ、仕損じ侍らば、頸差し伸べて尋常に討たれてこそ、女に童べの讐討たう術もなくてよと、母が悲歎も去りがたう侍べれば、一筋に思ひ入りたる少人の凛々しさ、頭脫の光頭、枉げで支へんも心なき業なれば、光範も強て止めず、去らば、暇遣はさん、河内に到りなば、兎せよ、角せよ、はやまりて仕損じすなと、くれ〴〵もいましめて、此れもて、本意を遂げよとて、日頃、身を離さず佩きそへる、小刀をはなむけに取り與へた。熊王、心勇みたちて、宿にさがり母に、しか〴〵物語り聞にければ、健氣なるこゝろざし、愷しさは嬉しけれど、足利殿の勢にても討つこと難き敵なれば、千筋の髮の一筋も稚なき手に引き得べき事かはな、いとせめて、武士らしう生ひたちて、贖れの芝生に、いさぎよき名乘あげて、其の讎の手に懸合ひて、敵はずば、斬死して相果なんには、憾みなけれど風にも堪へぬ雛鶴を空にうたせ、荒鷲に合はすを義理とは、なんぼう辛き世の心よなど、歎きに其の夜明けては、盡きぬ名殘を、いさぎよき土器の水に笑ひて、熊王が門出祝へは、光範は亦、武士ども數多差添へて安部野まで送らしめた。

熊王、此所からは、這度の供に召連れたる、己れとおなじさころの、小僮一人と、二人ぎりに成りて、心遣しきも、稚な氣の邊かに、とぼしうなれば、夜一夜、歎き明したる母の事や、何や彼や思ひ出て、ほろ〳〵涙ふり落して、物悲しう後の方振返り振返り、足は前に進みかねたが、何はさて、蛺蜻蜻蛉やきり〳〵すの面白ざかりが、二人連れだちては、夫れもしばしよ、命懸の仕事に往く心配さへ、何所へやら振落して、綯れつ、縋れつ、道草の面白きに、飛ぶ鳥の空に戲れて、日影やゝ傾けるころ、やうやく赤阪に到り着き、扨て、何として入り込まんかと、急に途方にくれて、何を便りともなくて、城の大手前、うろ〳〵彷徨ひあるく術なさ、折柄こゝに、正儀の老黨、兵庫の介忠元、ゆくりなく通りかゝりて、いぶかしみ、打まもり、此の邊には、見もなれぬ稚なき人の、思ひくしたる狀して、彷徨ひ給ふは、いかに、尋ぬる仁おはしてや、和子は、何所、いかなる人の御子ぞなど、まめだち問ひければ、光範のおはせりし方便はこゝぞと、熊王いとゞ打しほたれ、のう、

方樣よ、聞き給はせ、此の身は、津の國の大夫判官光範が御內にて、宇野の六郎といひける侍の子に、熊王といへる童べにて候よ、父にて侍べる六郎は、往にし年の、住吉の合戰に、討死して相果候を、一門にて侍べる備後守、そをよき事にして、惡心たくみけるより、我れは、領地を奪はれ、家を逐はれ候へども、主の判官、同腹にて爲さする業の、誰れに歎かんやうもなし、斯かる上は、僧とも成りて、亡き父の跡弔はゞやと志して、故郷を迷ひ出て、彼所、此所、さすらへ侍べれど、知らぬ御寺の軒の下にも彳みかねてと、すゝり泣きてみせければ、物の哀知る武士も、よしとや云はん、あしがりの、なにはの事も思はずて、一向に、便なき者と涙もろうて、あな、痛はしの御事や、年齒もゆかぬ御身の、行方しられぬ旅の空に、樹の下かげや、石の上、甲斐なくてふる袖の、露しげからん朝た夕べ、悲しき事のかさならば、扨て、なにと、成りません末ぞ、いざ〳〵せ給へ、惡しう

は計はじと、分別過ぎて、仔細もなく、主の首級覘ふ小冠者を城中に引入れ、我が方に留め置き、讀み習へよ、かけては、弓矢、大刀打つ技　馬騎る術も懈らず勵み習ひて、成人の上は、天下正統の君に在します吉野の帝に、弓引き奉る逆賊原が首級、一つにても多く斬りかけよなんどとて、己が首根へ、大刀引當てう小手とりて、おふし立つる危うさ、悲しさにつけ、嬉しさにつけ、感じ易き稚なき者は、亦、知らず〳〵、正儀が恩義に絆されて、眞實の主とも、父とも、なれ慕ふやうに成りて、怨みの刃切合はすことも、何時か、忘るゝともなく年月經て、茲に、十五歳の春を迎へ、初陣の若武者ぶり、左こそはと、老功の武士らが眼はそめさす程となりたれば、正儀も、ことのほか喜びて、河内の内にて、なにがしの所領知らさんとの沙汰もありしが、せめて、恥ある矢の一筋も試み候ひて後こそなど〳〵心から、御内人に、成りすまし仕へてゐた。

翌年の、恰も亡父の七回の忌日に當り、死灰再び

熱して、またもや復讐の念むら〳〵と萠し、ふそましやな、目前咫尺に讐人と共に語り、共に笑ひ乘るべき隙をわれから逸して、年月を徒に過ししし云ひ甲斐なき吾れよ、何つの世を期して來りきやわれには、判官光範の君をこそ主人とは仰きまつれ、赤坂の主といふ者あるべきかは、元より一時の方便にて、君と仰ぎたればとて、敵は敵なり、假初の情に絆され、討つべきを討たざらば、君には不臣、親には不孝、契りし言葉も恥かしや、いでや、今日こそは、左馬頭が御首賜はらんものをと、思ひ決めて、往年、光範の賜はりたる小刀密かに振り試み、只一打と、油斷なく氣を配る。正儀は又、いつこまでも、最惜きものに見まして、恰もよし、其の日吉日なりければ、熊王を呼び近づけ、汝、いつまで童形にてあるべきならねば、今日は、元服して、男一人の武士となれや、烏帽子親には、兼てより、日本無双の武士を撰みおきたれば、其の人の武場見ならひ、あはれ雄々しき

弓取と成りて、孤節を守る正儀に一臂の力をも添へて、逆賊足利が與黨命のかぎり懸惱まし、落日の御運の末果敢なみて在します君の御無念、つゆばかりも晴らし參らせてよと、しみ〴〵と申し含め、遽かに、贖がましき儀式調へて、扨て、義烈勇剛は、先立ちて、忠義の鬼と成りにし父兄の誰れにも劣らず、飛石鉾刀を碎くが如き軍さぶり、敵人の心膽を寒からしむる、一門の旗大將、和田和泉守正武に、髻とりあげさせて、同き小次郎正寛と名乘らせ、吉野殿より賜はりし秘藏の鎧を引出物したる分外のなさけに、熊王、張詰めし弦さと降りかはり、身の置所にくれ惑うた。

夜に入りて、熊王たゝ一人、正儀の側に侍べれる得難き好機を得ては、復た更に、今こそと、さわぎ立つ胸の高浪、とゞめかね、密かに、小刀の鯉口きりて、膝立直して、屹つと見れば、またゝく短檠の灯の危うきを知らで、見臺に對ひて、物の

本くり繙げ、温然として靜坐せる、正儀が面には
あり〳〵と、年比の情け浮びて、刄向うべくもあ
らぬに、默然として控ゆれば、朧氣ながらとめこ
しゝ俤の父は忿り、泣いて別れし母は怨み、扨て
は、判官光範が叱咤の聲に復、むら〳〵と氣昂り
刮つと眼みひらきて、這度こそはと、怨みの刄、
拔かん〳〵とあせりても、穆々たる長者の高風に
壓しつけられて、腕動かず、頭擡らず、恨氣胸に
塞りて、堪へかねて、廣椽に立出て、どうと身を
打付て、大聲あげて泣き倒れた。
何事やらんと、かけ集へる近臣原、此の有樣に、
仔細はわかず、直物呆れて、面見向ふ。正儀も亦
いぶかしく思ひて、立寄りて見れば、物狂しく、
伏し悶に悲める、尋常ならぬ事の躰に、いかにや
と、覺束なげに、立ちくらしゐる。
熊王、潛々たる涙の隙に、あまたゝび心拊ちて、
苦しげに長く嘯き、事のよし知ろしめさねば、訝
かしみ給ふも道理よ、まこと、熊王は、殿の御首

賜はらんとて、此の赤坂に入りこみし敵方の刺客
にて候なり、吾が君判官、殿の弓矢に、しば〳〵
惱められ給ひて、無念やみがたくて、悶え憤り在
すを見、且つは、往年、住吉の合戰に、判官既に
討たれさせ給ふべかりし折柄、父にて候六郎御馬
前に懸塞り、殿の御勢に渡り合ひて、其の場に討
死して候ひしかば、小供心にも、一途に殿を怨敵
と思ひこみ、いかにもして、此の無念はらさんも
のと、君に暇乞ひまをして、此の土に立越ゑ、稚
なきを幸ひに、備後守が惡心に所領を奪はれ、家
を追はれ、世にさすらへ侍べるなんどゝ方便をた
くみて、兵庫の介がふりかけし袖に身を寄せ、事
なく、殿の御内に仕へまつりしが、暗に、復讐の
切刄合はす、不敵の小冠者ともしろしめさず、偏
へに、便なき者よと憫れみ思召す御情けの重なれ
ば、怨みは燃ゆる陽炎の、扨て、しかとあらずな
りて、夢の如く年月經て、筋も、骨も、みそなは
す如く伸び太り、着背長の厚實みごと切りはる大

太刀も、振らばや振らん拳の力、身に知らるゝ十
六歳の今月今日、あだかも、亡き父が七回の忌日
に當り候へば、心頭更に積年の痛みを覺え、情け
はなさけ、仇は仇、假初の絆に心弱りて、一尺の
匕首萬丈の虹を長み、五歩の席上千里の雲山を疊
み、讐人の面影、空にのみ觀つゝ過さば、萬刧を
經るとも、一念の憤恨、はらし得べき期あるべか
らず、さぞな、冥府の亡き父は、修羅の妄執拂ふ
によしなくて、腑甲斐なき熊王を憤りてや在らん
なん、母はいかにや、左馬頭の御首賜はりて、潔
よく吾が兒死しぬと、嘻しき悲しき世のたより、
疾し遲しと待ちゐなん心はよ、別れて、主君判官
の、御無念の深かるべきに、いでや、今日こそは
君父が怨みの心もて、殿を刄に懸けまつり、返す
刀に、熊王が細首刎ねて、殿の仇をも仕止め候は
んと、密かに、決定の臍を固め候ひし折も折、螟
蛉の子を、御前にて、曠がましき加冠の御沙汰た
まはり、世に聞ゑたる和田の殿の影にそはしめ給

ふ御なさけ、更に又、萬鈞の重きを覺え、今宵し
も、唯一人、御前に侍り候へば、討奉らんには、
齷竟の機を得ながら、寸も御前に迫りえず、苦し
きあまり、斯くは、打歎き候なり、所詮、忠孝義
の三道に、向背規を失へる、熊王がうつゝ身は、
只潔よき一劍の導きに從ひ候はん、免させ給へと
云ひもあへず、小刀ぬき持ち、あはや、左の脇壺
に突立てんとしゝを、正儀、侍共して押止めさせ
動かせず、死の益無きを懇ろに說きさとし、義心
を稱へて感涙にくれければ、武士等も共に、悽愴
の感にうたれ、打しめり、そよめかす息の響きは
露の笹葉に風戰ぐ風情であッた。
熊王の小次郎正寛、今は、死ぬにも死なれず、長
くひける呻吟の聲と共に　小刀取直して、今日と
りあげし初髮、ふつつり斬りすてゝ、十六歳のあ
たら莟を、吹き落す浮世の風、袖に拂ひて頓て、
往生院に入りて、圓頂緇衣に容をかへたと云ふこ
とである。

冬の夜がたり

孤島

さても姫君の御身は何うなつたことであらう。捨てに行つたアンチゴナスでも歸つて來たらば、まだ何かの手掛りもあつたらうに、アンチゴナスも遂にまたシヽリーの朝廷へ歸つて來なかつた。

誠は夫れも其の筈である。アンチゴナスの船は海へ出ると風に遇つて、ある濱邊へ吹きつけられたので、姫を其の濱の林の蔭へ捨て置いて歸つて來たが、林の中で一匹の熊に出遇ひ、無殘の最後を遂げたのである。

シヽリーの朝廷では此の樣なことがあらうとは誰れも思はぬので、姫は何うなつたことか、アンチゴナスは何うしたことかと八方へ手を分けて尋ねたが遂に見出だし得なんだのである。

アンチゴナスの船が吹き着けられた濱邊といふのは、ボリクシヂス王の治めらるヽボヘミヤの國で、姫は此の濱邊の有樣と、頸へ掛けた貴い珠玉と、此の紙片の文字とで、何れ平人の種ではないと見て取つたので、人の嫌疑を避けたるために、ペルヂタを連れて他の地方に移り姫の身に着いた寶玉の一部を金に易へて、羊の群數多を買ひ入れ、其の土地でも富裕な牧羊者の一人となつた。

＊　＊　＊　＊　＊

月日は水の如く流れて、ペルヂタも今は妙齡の處女となつた。牧羊者の夫婦は我が子だと人にも言ひまた誠に我が子の如く愛するので、姫も誠の

兩親とのみ思つて其の妻が世を去つた今は、心を盡して老人に事へて居た。が、生れは爭はれぬもので、何も別に敎えたといふことはなくも、成長するに從つて其の心の優しさ、美はしさは、其の美くしい姿にも增して、誰れとて其の心に感ぜぬ者はない程であつた。

國王ボリクシヂスにフロイゼルといふ一粒種の王子があつた。此の王子が一日獵の歸りに偶とペルヂタの姿を見染めて、夫れからといふものは雨の朝、風の夕、日毎に牧羊者の家を訪づれて、ペルヂタの優しい待遇に心を奪はれて居た。が、來る時は姿を變し、ドリクレスと名乘つて居るので是れが王子フロイゼルだとは夢にも知る者は無かつた。

ボヘミヤの朝廷では此の頃王子フロイゼルが兎角に落ち着かぬ素振を不思議に思つて密かに探らせると牧羊者の娘を思つて是れ〳〵の所へ通ふて行くのだと分つたので、王はカミルロと共に姿を

變へて御自身樣子を見に御出掛けになる。

二人が來た時は恰も羊祭の日であつた。此の日には知らぬ人でも勸迎するのが例なので、二人は祭の庭へ迎えられて、見ると食卓は彼方此方に設けられて、田舍にしては此の上もない御馳走が山の樣に並んで居る。老若男女打ち雜つて笑ひ興ずる有樣芝の上には少女と手を執り合つて跳り狂ふ若者の一群、戸外の露店の周りにはリボンや手袋等の贈物を爭ひ買ふ樣も見えた。

と見れば、此の雜沓の群を離れて、彼方の隅に肩を並べて樂しげに打ち語らふのはフロイゼルとペルヂタの二人であつた。

王は徐かに二人の背ろへ近づいて二人の間の話に耳を傾けると、飾こそないがペルヂタの言葉遣ひの如何にも上品に、人の心を惹く力のあるのは王も意外の感に打たれて、カミルロに向ひ

『斯の樣な美しい者には似合はぬ擧動ではないか。言ふこと爲すこと斯ういふ身分の者とは思

はれぬ。

と呟くのをカミルロが受けて

『如何にも乳絞りの中では女皇とも見受けられまする。

王はツカ〳〵と若者の前に進んで

『お前は今日の御馳走を見向きもしないで、何が其の様に楽しみなのか。私なんぞが若い時には澤山品物を買ひ込んで思ふ女に贈つたものだが、お前は夫れを何一つ買はぬので、商人はもう行つて了ふではないか。

と言ひ掛けるのを王子は父君だとは夢にも知らずに、

『エヽ、此の娘は其の様なつまらぬものは欲しがりませんよ。ペルヂタの欲しがるものは私の胸に封じ込んであるのですもの』とペルヂタと方を見返り『サア、ペルヂタ、此の老人の前で私の言ふことをよく聞いてゐ出で』とまた王に向ひ『何卒貴君が昔のことを思つて、我々二人

の約束の證人になつて下さい。

と頼む。

『如何にも私が二人の離縁状に調印してやらうと王は俄かに假の裝を脱いで驚く王子に向ひ、此の様な賤しい牧羊者の兒と結婚しやうなぞといふのは何事だと、懇々と其の不心得を責め諭し、さてまたペルヂタに向つて若しお前が二度と再び王子を迷はすやうなことがあれば、お前の身は勿論のこと、お前の親の牧羊者も一緒に殺して了ふぞと嚇しつけ、王子のことはカミルロに扮附て置いて御自分は先へ御歸館になる。

王の言葉はペルヂタの氣高い性質を勵ましたのである。ペルヂタの背影を見送りながら

『皆な殺されても恐ろしいことはありませんわ妾は幾度も言はうと思ひましたわ、貴君の御殿を照すお日様が同じやうに此の小舍をも窺いて居らつしやいますつて。』と言つて王子に向ひ、如何にも悲しげに『ですがね、妾はもう眼が覺

めましたの、是れから女王の眞似なんかよしませうから、貴君も、もう思ひ切つて下さいね。妾は行つて牝牛の乳でも絞りませうよ。

と言ふのであつた。

側に居たカミルロの心は知らず識らずペルヂタの潔白な心と氣高い素振に引き込まれて、此の様な思ひ合つた二人を引離すのは罪だと思ふと、何んなことをしても此の二人を保護しやうといふ氣になるのであつた。

カミルロはシヽリーの王レオンテスが前非を後悔して、今は昔に變つた良君になつて居らるゝといふ噂を、風の便りに聞き知つて、もう一度是非舊主の許へ歸つて、懐かしい家内の様子をも見度いとの願ひはもう久しいことであつた。が、ボリクシネス王の厚い待遇に今迄其の機も得られなかつたのである。

であるから今フロイゼルとペルヂタを保護するについてもこれは一つシヽリーの朝廷へ行つて、

レオンテス王のお袖に縋つて見たら、或は望の叶ふこともあらうかといふので、二人にも此の考を話し、牧羊者の老人も共々に一先シヽリーへ立退くといふことに定めたのである。

牧羊者の老人はペルヂタの身に着いた寶玉の殘りと、拾つた時の衣服と、上衣に縫ひつけておいた紙片を一まとめにして、此の一行に加はつた。

（その二終り）

本多庸一師

不紡生

五

▲本多師の人物と美以教會

師は果して如何なる人物なるか。

敢へて、漫に基督教界一流の人物となすか、あらず、德識よく万人に範たるの人物なりといふか。こはわれ人の切に知らんと欲する所なるべし。されは後進の黄口兒にして、みだりに先輩大人の人物を品騰するが如きは斷じてなすべからざる所なりとす。故に余は單に△△師に聽ける所を敷衍して、聊か識者の眼に映じたる師を紹介するに止まらむ。

曰はく、

一言にして盡く、渾圓！取りも直さず本多氏は實に常識の極めて圓滿に發達したるの人也。宗教上に於けると教育上に於けるとを問はず、深遠なる靈的蘊蓄と、すばしこき——所謂機敏なる變通の道や、縱横の術策は到底氏に於いて見るべからず。而も——而も、大洋の百川を吸ふが如く、率直にして粗放ならず、胆勇にして剛愎ならず、便々たる其の大腹はよく人を容るゝと共に、よく人々同化す。洒々磊々たる襟度は聊かも人に對して城府を設けず、人をして自ら懐き服せしむ。淳朴にして春風常に其身邊を匝ぐるが如き宏量と、優々として迫らず、温雅恬淡の風兒は、所謂無爲にして化する底の魔力？を有す

是れを押川氏の大質實に天地の窮まりなきが如く、幽玄なる宗教的意識、即ち其の眞生命を握れるに比し、元より同日の談に非らずとするも、而もよく人を容れ人と調和し、總てを包括するの技倆に於て、師は實にわが教界獨歩の舞臺なり。故に風雲に乗じて革命軍の先鋒となりて、宇内に雄飛するが如きははじめより其のがらに非ずして、平和のうちに難關を斬り拔け、守成の中によく調

變するの手腕に於て、外人の容喙を蒙る事多き今の基督教界に於て欠くべからざるの人物也。

見よ、教育家として新島氏の熱誠なく、巖本善治氏の徳望なく、宗教家としては押川氏の靈命なく、海老名氏の雄辯なし。唯だ凡てを包容して餘りある其の襟度は本多氏を措いて他に比疇なし。渾圓？然り、須らく氏は平凡の大人物と稱して可也。

由來美以教會は感情を以て鳴る。曰はく聖別會、曰はく信仰復活、曰はく神の癒、曰はく何、曰はく何と、殆んど理性なるものを全然滅却して、所謂唯信仰を強ふるもの、必ずしも中央福音傳道館の一派のみに限らむや。一も二もなく神恩に歸する淺薄なる世の宣教師の徒は措いて問はざるも、多少教育あり、才識ある新進の牧師傳道師の人士さへ、猶ほ多く其の信仰の立脚地は感情の上にあり。故に其の信仰は常に境遇と感情の冷熱に正比例し、其の化學的反應——カメリオン的變色作用の著しき事、決して他教派の比に非らずとなす。此の間にありて、獨り渾圓師の如きを得る、蓋し異數ならずとせんや。

六

▲所謂基督教徒の家庭

是れを人に聞く。いづれの宗教女學校にありても、蛞茶式部が平素理想とする所を探るに、必ずしも地位や勳爵等の有形的の富貴に心を動かさゝる女性と雖も、自ら進んで牧師傳道師に嫁し、生涯神の爲めに働かんことを期するもの殆んと皆無にして、否皆無なるのみならず、寧ろ眉を顰むるもの多しと傳ふ。是れ宗教學校一般の風としては甚だ不思議なる現象なりと言はざるべからず、然も綴つて考ふればまた一理なきに非ず。

蓋し彼等の理想は極めて單純なり。彼等が孤燈かすかなる寄宿舍の一室に、覺束なげに繙く聖書のかたはら、何となくほゝ笑まるゝ未來の曙光を通じての家庭觀は到底是れ書中のもの、よし之れ

を實現すべからざるを自覺するまでも、より高き信念の相愛の人と共に、基督による美はしき好家庭（スヰートホーム）を作らむ事の如何にたのしかるべきかは彼等の常に理想する所なるべし。是に於てか、彼等は曷めて此の種の風潮に接近し、其の温かき薫風に浴せんと欲するの結果、最も親接し得べき牧師傳道師の家庭に向つて特に多大の注意を拂はむとす。抑もまた何の得る所ありしや。

あはれ散りゆく花の香りにも似たる果敢なき理想よ、冷めたき現實の波は日毎〳〵に浸蝕し來るを知らずや。理想は飽迄も理想なり、現實はあくまでも現實也。朝の禮拜に基督教徒の家庭の美はしきをたゝえられし牧師の家庭は、さて立ち入りて見れば案外に冷めたいもの。生活難の痛痒は猶豫なく此の小天地を侵かし來りて、殊に薄給なる牧師傳道師の何事も心にまかせず、從つて其の家庭間に於ておもしろからぬ感情を言外に現はすに至るはまた止むを得ざる所なりとす。是に至つて彼等が、さながら自己の理想を全然蹂躙せらるゝが如く感じ、失望の嘆聲を發するに至るは、多く世故に通せず、處世難の味を知らざる無經驗の女學士にありては無理ならぬ有り勝ちなる事實なりとす。思へばなるまじきものは牧師傳道師なる哉。

而して余は此の點に就いて、特に一箇の例外（エキセプション）を語らざるべからず。他なし、本多庸一師の家庭是れなり。

七

▲本多師の家庭——附賢夫人

何が故にエキセプションといふか。

余は常に思ふ。今の所謂クリスチャンの行動に往々自ら求めて世人の蹈さを買はむとするが如き嫌ひあるの痕なきか。たとへば大舉傳道の時にあたり、妙齡の束髪連をして殊更に路傍に立たしめ街頭行人絡繹の衝にトラクトを配ばり、廣告（アドバーダイスメント）をまかしめたるが如き、よしや燃えたつ信念の熱誠より出でたる所爲といへども、婦人天稟の性より推

して決して稱すべきの行動に非らず。或る者は曰はく、破壞の後には建設あり、かくの如きはまた以つて舊思想打破の壯擧ならずとせんやと、蓋し事の本末を知らざるものの言なり。抑も傳道の事たる、天の人に對する至重の大命にして、此の間實に寸毫の權謀術策を許るさず、一點の私心私慾を容るべからず。飽くまで愼重に、飽くまで忠實に、綿密の上にも綿密なる注意を加へ、戰々競々として事に從はざるべからず。彼の思慮淺き張三李四の徒の輕率なる行動が、屢〻篤實なる人士を誤るは吾人の常に耳にする所也。保守といふか、守舊といふか。知らず、順性の用をかへて社會の秩序をみだるものと就れぞや。かくの如くにしてはじめて建設せらるべき新思想ならば、寧ろ是れ社會に無用なる破壞なり、建設なり。殊に口先のみを以て傳道の方を得たりとなすが如きは是れ大なる誤謬にして、先哲の所謂「沈默は金なり」といへるもの、實に千古の至言なるが如く、傳道の眞訣は男女各〻其の分を守り、其の分に應じて働くにあり。而して無言の說教——美はしき個人の人格より、更にかぐはしき家庭の美風は期せずして未信の徒を感化するの力を有す。吾人の基督教徒の家庭に重きを置くも故なきに非ざる也。

* * * * *

もし世に美はしき家庭と稱すべきものありとせば、本多師の家庭の如きは確かに其の一つなるべし。よし理想的の標榜を揭げざるも、嚴肅のうちに靄々たる和氣は家庭にみちあふれ、是れに接近するものをして自ら春風場裏に遊ぶの思ひあらしむ。

家族は師及び夫人を中心として、次郎氏、まり子孃以下八人、いづれも父君の面影を傳へて人の愛好する處なりといふ。其の他特に監督を托せらるるもの、學生二名（學院通學）女學生二名（女子手藝學校通學）、外に女中二人を加へて實に十六人の

大家族は聊かの不平もなく、朝に夕に怨嗟の聲を聞かず。殊に夕餐後の一時間は家拜の時として聖別せられ、一家族、女中に至るまで一室に會し、讃美を歌ひ、聖書を讀み、祈りをなすを例とす。こは基督教徒の家庭に於ける最もうるはしき特色なり。

夫人名はてい子、永峰氏の女、女子高等師範學校の卒業生にして、曩に弘前女學校、函館遺愛女學校に教鞭を取れる事年あり。本多家に嫁してより良人に侍する事十年一日の如く、夙に賢夫人の譽れあり。專ら身躬から愛兒の教育に任ずると共に、婦人會、矯風會、日曜學校等の爲めに力を盡くし、傍らよく家政を整理し、宗教上教育各種の社會事情に奔命する良人をして後顧の患なからしめ、平常、儉素自ら持して毫も倦怠の狀なし。本多師の今日あるを得たるもの、蓋し夫人の功最も多しとなす。

余は最後に此の論を結ぶべく今なりぬ。人を議するものは自らもまた議せらるべし、禿筆ここに至つて一層の鈍を加ふ。

宜べ。余は幾度か師を論じて、調和の大方に於いて天稟の技揃を稱揚したり。然り、師はいふまでもなく現今の基督教會に欠くべからざるの人物なり、從つて師に對する吾人——民衆の期待する所、また一段の重きを加へずんばあらず。何ぞや、曰はく、人格の發揮——否な、何事にも今少しくはきくして欲しき也、而して其の行動のより更に堂々と、(世俗的の意味に非ず)確然たる區劃ある範圍に濶歩せられん事を望むもの、換言すれば、調和其のものが今少しく張合ある、意味あるものたらむ事を望むもの也。

客年福音同盟會の大會を青年會館に開かる。時に一致教會の一有力者にして奇怪至極なる一動議を提出せるものあり。題して異端者征伐といふ實

は海老名彈正師の聲聞を嫉める一派の、卑劣極まる排斥案なり。余はこゝに其の是非を云々するを好まずと雖も、此の案の抑も因りて發る所を聞くに及んで、余は實に其の面に唾すべく、辛らじてわが口を噤せずんば非らず。

古來國を誤るものは小人斗筲の輩也。基督教を誤るものは實に獅子身中の蛆蟲也。而して此の種の人決して尠きに非らざる也、事の起因は海老名師が新人誌上大膽にも基督論を掲げ、其の信仰を告白し、福音新報の植村正久師に論戰を挑みたるよりはじまる。(所論は載せて「基督論集」にあり)海老名師は曰はく、基督は人也、人にして神性をそなへたるもの、故に吾人もよく學んで是れに到達し得べく、茲にはじめて基督は人類の救主なりと尊崇し得べきなりと。而して被挑戰者たる植村師は、所謂正統流の代表者としてどこまでも舊神學の壘に據り、兩々相對して教界近時の偉觀なりしなり。是れ即ち異端者征伐案のそも〳〵の遠因なりとす。

海老名師はわが基督教會に於ける第一流の雄辯家說教家なり。勿論松村君の如き演說つかひは多士或は濟々たらむも、而も、聖壇の焰よく万衆の渇仰を博し得るもの、曩には押川方義師あり、今に於いて獨り海老名彈正師を推す。其の說く所、議論雄大、學識該博、眞に教界の講壇に嶄然として異色を放ち、有爲の青年糾然として其の德風に仰ぐもの故ある哉。さは喬木は風に憎まる、高德の後には必らず嫉妬の嘵々の伴ふは世の常なり。さらでも狹量の張三李四の徒が、見す〳〵寂びゆく己が教會のあなたに、毎日曜の禮拜に、時たまの演說會に、優に數百名、殆んど立錐の地なきまでの聽衆に歡呼せらるゝ海老名師を見て、彼等の胸中豈よろこびんや。——果然として嫉妬の餘炎は思ひがけなき所に飛びぬ。江戸の敵は長崎にて取るべしとの金言は其の第二因となりたるなり。

即ち議して曰はく、われ等は異端者なる海老名氏と行動を共にするを欲せず。之れを排斥するの道一あり。――〳〵思ふに、大擧傳道の如きは海老名氏の必ず贊成せざる所、機乘ずべし、まづ行いて氏の一致運動を希求し、其の斷然唆拒するに及んではじめて公然異端者として其の罪を鳴らすべき也。と、即ち委員を撰んで師を要せしむ。師快然として曰はく、諾、大いにやりませう！衆みな呆然。諺に所謂藪をつゝいて蛇を出せるにもまして、彼等の苦心は悉く水泡に歸せり。さりとて今さら斷はるわけにもゆかず、而も〳〵海老名師を交ゆるに至りては正に群雀に鴉を配するもの、虎を野に放つの愚を敢てする也、彼等の苦悶知るべき也。是に於いてか圖々しくも卑劣なる彼等も策の出すべきなく、遂に一言の師に挨拶するなくして大敲ドン〳〵（大擧傳道）をはじめたるのみか、其の餘憤は期せずして異端者征伐案となり、堂々たる福音同盟會の大會の議場を汚がすに至りし也。其の

心情、其の行爲の墮劣さ加減、猶は稱して宗教家といふに至つては蓋し言語全斷なり。

綴つて思ふ。此の間に處して本多師の行動は、果してよく福音同盟會々長として、一黨の首領として重きをわが教界に荷ふに足りしや。あらず、教界第一流の人物として何の施設し、策戰する處ありしや。余は疑なき能はざる也。

余は素より多きを師に求むるものに非ず、調和者の位置に立つ師の苦衷も略ぼ之れを諒す。さは れ余を以て見るに、調和なるもの〳〵範圍の、師に於いてはあまりに廣義に、あまり食ひ過ぐるの患なきか。再言すれば師の調和なるものは寧ろ不健全なる、病的の發作を含めるには非るか。もし――もし調和なるものが、全然自ら立つ所の主義をも主張をも滅却して、甲者に和し、乙者に調し、其の間に立つて徒らに唯々諾々たるが如きものとすれば、是れ一種の機械なるのみ。Person に非らずしてGoodsなるのみ、もし調和の意味かくの如

きに過ぎずとせば、所謂調和者なるものも亦憐れむべきの至りなる哉。余は、人の師を呼んで姑息主義、鼻息主義を以て目するもの〳〵一面の理あるを見て、師の爲めに深く遺憾とせずんば非らざる也。

自信と自負とは似て非なるもの也、眞の調和は決して盲動附和の謂ひに非らず。範圍あり、時機あり、凜然として自ら立つ所により、明確なる主義主張の下に融合し調和せしむるもの、是れ眞の調和者の行動に非らずや。彼の曲學阿世の徒が、一にも調和、二にも調和と雷同盲附するもの、之れを蒟蒻主義と稱へて君子の齒するさへ恥づる所なり。本多師豈しかく無定見、無見識の人ならむや、而も其の行動に於いて往々這般の消息を耳にする事あるはまた止むを得ざるに出づ。思ふに、師は往々境遇に制せられて調和の範圍以外――自ら僭ずる所を拜げてまでも人に調和せんとするの嫌ひなきか。是れ師の爲めに甚だ惜しむべき事

にして、人の『押川氏は無限大の圓也。而も本多氏に至りては中心を距る事甚だ遠からざる圓周を薄墨をもてぼかしたるものに過ぎず』と評せるもの故なきに非らざる也。

獨り宗教上の事のみならむや、教育上に於いてもまた然かり。師が總理の下にある青山學院――青山神學校、青山女學院、青山女子手藝學校は、果してよく成功の位置にありといふを得べきか。長崎に活水女學校あり、函館に遺愛女學校あり、而して堂々大都の青山女學院なるもの遂に何等名聲の是れに加ふるものありや。余は素より師の位置と苦衷の幾分を知るもの、而もかくの如くにして猶は神聖なる教育事業までを規するに忍びざるものある也。大義親を滅す、此の種の事須らく正々堂々、公明なるべし正大なるべし、公義の前には區々纏綿の私情の如きは斷々として排斥せざるべからざる也。

女子教育は措いて問はず、青山學院――殊に

頃者の寄宿舎の紛擾――舍監の人撰より起これる紛擾に對する師の態度の如きは、まさに茵蒻主義、瓢箪主義を遺憾なく發揮されたるものとして、吾人の甚だ感服せざる所なりとす。

さはれ余は本多師を信ずるもの、一人也。師の大度量を信じ、其の大才を信ずるもの、一人也。時非にしていまだ師の大手腕を揮ふの機にあらざらむも、一旦時みつるに及んでや必らず快刀亂麻を斷つてわが教界の面目更に一新せらるゝものあらむを信ずるもの、何ぞ片こととまじりの黄口兒の差出口に師を累するを敢てせむや。如上の苦言、聊か師を讃する所あるに似たる、罪まさに鼎鑊に値ひせむ。かさらばシナイの山影白雲遠く、ベツレヘムの星を仰いで靜かに〳〵『悔改の歌』を歌はん哉（完）

――三十六年六月十日稿――

編輯だより

二六

▲會員諸子が消夏讀書の一材料にもとて、近く新たに發行されし有益なる雜誌二種を、こゝに紹介致すべく候。

▲その一は『英文新誌』、その二は『理學界』に御座候。前者は嫩ねて『英學新報』として洽ねく江湖の喝采を博しつゝありしもの、故ありて改題いたし候ものに御座候。卷頭にはエマーソンと其の居宅、社説には新渡戸博士の學生觀、その他島田三郎氏の英語と英國民、本田增次郎氏の英雄崇拜論註釋等いづれも必讀の好文字と存候。定價は一册拾錢。發行所は東京麹町五番町十六番地英文新誌社に御座候。

▲『理學界』も亦た近頃に珍らしき有益なる雜誌と存候。卷頭には無線電信を送る圖あり、後藤學士の『鑽火式の話』あり、松村醫氏の『諸人種頭骨圖譜』あり、その他有益なる文字多し。一册の定價十五錢。發行所は東京神田裏神保町六番地理學界社。

▲このごろ本會へ新たに寄贈されし雜誌は『麻布中學校々友會雜誌』『早稲田中學興風會雜誌』『岡山縣教育會雜誌』等に御座候。第一者には會頭江原素六氏の『倫理講話』あり、第二者には坪内博士の『遠足會の利弊』あり、第三者には奥村五百子の『滿韓視察談』ありいづれも有益の文字に御座候。

讀叢

英國の文豪 ゴールドスミス

文學士 芙蓉生

傳記の概要――その著作と其の心事――『ウエーキフイールドの牧師』と『荒村行』――その著作年表

▲傳記の概要

會員諸子にお話しすべきことは、いろ〳〵ある。それに此のゴールドスミスのことばかりを書いて居るのも聊か必外のように思はれる。

それで、こゝにゴールドスミスの傳記をば最も肝要な點ばかりつまんで、極く簡單に書いて見れば、大体次のようになる。

『ゴールドスミスはアイアランドのペラスモアーで生れた人であつて、『ヴイカー、オヴ、ウエーキフイールド』の著者として、英文學のうちで有名である。彼は實に天才であつた、けれども別にこれぞといふ職業に就いたことが無くして一生を終つた。即はち初めには教職（傳道者）に志し、中頃にして法律に志し、終りに醫師にならうとしたが、いづれにも失敗した、がその都度、その道〳〵の書籍を讀んで少なからぬ學識を得たことは勿論であつた。

彼は斯の如くして、遂に大膽にも大陸へ無錢旅行を企でた。その携ふるところのものは、僅かに一管の笛ばかりであつて、彼はこれを吹き〳〵少しづゝの旅費をこしらへては旅行した。かくして彼れはロンドンへ來た。ロンドンで彼は最初に教師の口を求め、教師として暫く生活したが、その後遂に文學者として生活し初めた。そして、い

ろ〳〵の書籍を著はしたことである。

かくして生活をして居るうち、彼は、いつしか文學倶樂部の會員となりジョンソン(Jhonson)や、レイノールヅ(Reynolds)や、バークなぞと交際しじはめた。(これ等はいづれも有名な學者なのである。ジョンソンの肖像は前の頁に載せてある。)

彼は此の際、また、いろ〳〵の詩集を出したのである。

『游子』……"The Traveller."

『荒村行』……"Deserted Village."

なぞは、その主なものであつた。この他に、彼は喜劇も書いた。それは『シー、スツープス、ツー、コンカー』(She Stoops to Conquer)といふのである。

彼は極めて不規律な一生を送り、死ぬ時には借金の山が築かれてあつた。けれども、彼は此の間に處して、決して人道といふものを忘れなかつた。

彼はまた、グリース及びローマの歴史も書いた。生れたのは一千七百二十八年、死んだのは一千七百七十四年。年齒、四十六。』

▲彼の著作と心事

英國の詩人のうちで、ゴールドスミスほど、人々から廣く愛せられたものはない。彼は尊敬さるべき作家ではなくして、愛憐さるべき性質を具へて居た。

柔和、俠氣、厚情、輕忽、放縱、名聞を好む癖、これ等は、彼の性質のあらましであつて、そのうちでも著しかつたのは、慈善心と薄志弱行であつた。

されば彼が、かく貧のうちに一生を送つたのも一方から見れば、その性質が取締らなかつたのかも知れぬが、一方から見れば、あまりに慈善心が薄かつた爲めと云ふことも出來よう。その如何に慈善心に深かゝつたかの二例を擧げれば、その貧

民や乞食なぞに金を恵む時には、いかにも前後の考へなく、かく人に恵んでやつたゝめに、自分は洋服の拂ひにさへ困つたことがある位である。されば、かゝるをば、一方から云へば、いかにも、彼が取り締りの無い人間であつたといふことを證據立てる材料にもなるのである。

▲『ウエーキ、フイールド』の牧師』と『荒村行』

この二書は、いづれも過去を回想して、今昔の感を寫したものである。

サッカレーといふ文學者が、ゴールドスミスを評して、次のように云つた。

『彼れは明日のことを空想したり、昨日のことを歎いたりしては今日を送り、必要迫らない限りは現在をも忘れて居る人である。』

實にゴールドスミスは、日をも月をも年をも、生涯をも、このようにして送つたものと思はれるのである。

以上に付け加へて、彼は輕忽であつて、名聞の心があつた。であるから、彼は時の文學社會の寵兒とするとゝもに、笑話の材料にも爲つたのであつた。

で、このような性質が、その作の上に現はれると、美しき悲哀となり、優雅なる惻隱となり、柔和なる微笑となるのである。

この『ウエーキ、フイールドの牧師』は有名な且つまた面白い讀みものであるから、苟くも英語を研究さるゝ人々は、折を見て一讀さるゝが好からうと思ふ。勿論、日本で飜刻されてある。

それから次ぎには『荒村行』。

これはゴールドスミスが、その年齒四十三に達して、已に人生の大半を經過し、遍く浮世の辛酸を嘗め、人情の冷熱常なきを知つた時、その身はロンドンの大都の紅塵のうちにありながら、目前

に生存競爭の活劇を見、中宵徐ろに往事を回想し人事の夢の如きを感じて、人生の眞相は果たして如何、といふ問題に撞着し、名利を拋つて故園に歸らんといふ平生の希望は更に禁ずることの出來なかつたとき、その故園なるバラスモアの孤村を尋ぬれば滿目蕭條として、草笑ひ水謠ひし昔の樣を留めず、土地は悉く大地主の所有に歸して、半ばは荒蕪に委し、奢侈俗を成すのを見て、舊時の故園を追慕する心更に深く、質朴を愛し奢侈を惡む念漏らすにところなくして、この『荒村行』が出來たのである。

されば此の詩のうちに訓誡の意も處々に含まれてあり、その經濟說も處々に、それとは無しに出て居るとも云へるのである。

この『荒村行』も鏤刻になつて居る。少し、むづかしくはあるが、そのうち一讀さるゝが好からうと思ふ。要するに此の詩のうちには、高くはないが、極めて清く、奇ではないが、頗る醇なる感情が含まれて居る。

▲著作年表

ゴールドスミスの主なる著作に就いて、年代的に記せば次のようである。

The Traveller……一七六四年	
〃 Vicar of Wakefield……一七六六年	
〃 Good-Natured Man……一七六八年	
〃 Deserted Village……一七七〇年	
She Stoop to Conquer……一七七三年	

岳忠武王

文學士 南川伊川

精忠岳飛——特出の天才——號中の兒——貧生涯——宋と金——靖康の禍——岳飛と秦檜——時代の犧牲者——主戰論と主和論と——十年の力一旦に廢す——盡忠報國

岳忠武王とは其の諡なり支那の歷史を繙き、南宋の章に讀み及べるとき、誰れかは、岳飛の精忠に泣かざるものあらん。

岳飛は至誠の人なり。精忠の人なり。野心家にあらず欲望の人にあらず。その欲するところは、獨り中原を恢復し、金虜を降し、宋室中興の大業を立て天子を安んじ、國家を太平ならしむるにあり。まことに彼は精忠の人なり。されば彼は『精忠岳飛』として知らる。

岳飛

されども彼は世界の大局に關せしものに非す。僅かに南宋に於ける一武辨として存在せしのみ。しかれども、まことに彼は人間として完全に近く人臣としては精忠、武將としては有數の好將軍なりしなり。

岳飛は精忠の人なり。されば爵位、官職、金帛は、以つて彼を喜ばすに足らざりき。彼の心事はかく廉潔にして精忠なりき。精忠にして廉潔なりしが爲めに、彼は其の志を遂げ得ず、敵黨の毒計に中てられて、悲慘なる殉國の死を致すの止むを得ざるなりしなり。あはれ何等の痛恨ぞや、吾人をして、少しく彼に就いて記すところあらしめよ。

（一）

宋の岳飛は徽宗皇帝の二年二月十五日を以て生る相州湯陰の人、家、世々農を業とせりきと傳へらる、されは岳飛出身は、所謂將門將を出せしものにあらずして、特出の天才を以つて生れしなり。彼の王侯將相豈に種あらんやの諺は正しく此の岳飛に用ひらるべきもの。

飛生れて彌月ならず、河決して洪水氾溢し一家危うからんとす、その母、飛を抱いて甕中に坐し、濤を衝いて岸に及び僅かに免かるゝを得たりといふ。されば一個の甕中に其の運命を托しつる呱々の孩兒は、後來、內憂外患の間に南宋の運命を負ふて立てるなりしなり。

貧の生涯、これ飛が幼時の境遇なりき。しかも、學を好んで最も左氏春秋、孫吳の兵法を喜びしといふ。飛また生れて怪力あり。未だ冠せざるに三百斤の弓、八石の弩を挽きたりといふ。その他の詳細、多くは傳はらず。

（二）

支那の地たる、その領域に於いては開放的なり。その生育と發達とを異にせる幾多の人種は、各、割據し、移住し、攻伐し、亡ぼさるゝ者、呑併さるゝもの、一起一伏は其の常態なりき。寔に人種の競爭は各時代少時も絕ゆること無かりしなり。

太古のことは姑く云はず、秦の始皇帝の長城を增築せしも、これ、われ取りて代はらんとする匈奴の侵入に備へしものなり、しかして、彼の青塚、草離々として佳人琵琶の恨を遺しゝも、寨外、風慘として烈士牧羊の苦を怨ばしめしも共に之れ、この匈奴の禍を漢になせるなり。

宋に禍を爲せるものは金なり。渤海、遼陽五十四州を併はせ、また遼西の五州を降し、國を建てゝ大金と號したる其の金なり。しかして、宋をしてその末路を近かゝらしめしものは、實際を重んぜずして空理の末に走り、朋黨の爭は人々相擠陷して、政治更らに擧がらざりし此の氣運なり。岳飛

は此の氣運の犧牲者となりしなり。

天子歡樂に耽り、盛んに土木を興し、淫佚を樂みしも、天子徽行して折花攀柳の狂態を演ずるに至りしも、これ宋の大厦漸く朽ちなんとするの兆を示せるものにして、彼の施耐庵が舞臺をこゝに取れる水滸百八の豪傑が橫行せるも寔に此の時なりき。金の新進氣銳、當たるべからず、而して此のとき落日暮雲、その餘燼僅かに存せる遼あり。しかるに、宋の政を爲せるもの當時みな瞶々の徒なりき。されば彼等一つの眼識なし。故を以て彼等は、遼もし亡ぶれば、金その餘威を以つて又た此の國に禍を及ぼすべきを知らずして、宋の衰を以つて金の莊と結び、而して遼の弱を倒さんとす。豈に自ら禍を招く所以にあらずや。

果然、宋は其の力なきを金に示し、金は其の約を破りて宋を輕侮したり。金軍の強は好く遼主をして走らじめしと雖も、宋の師は途に破れて其の弱を證じぬ。しかして、徽宗の宣和七年には、金遂に遼を滅し、更らに宋は金の禍を受くるに至り、しかして此の時たま〳〵徽宗は位を欽宗に讓れりき。しかして宣和は靖康と改元されぬ。

靖康の元年、春未だ淺くして、梅枝未だ花を着けざるに先ち、金の軍は早くも京師に迫り來ぬ。金は宋に要求して曰はく。償金、五百萬圓、銀五千萬兩、牛馬萬頭及び宋の中山、河間、太原三鎭を得んと。しかして宋は、その府庫を盡して二十餘萬兩、銀四百餘萬兩を得つるのみ。この時、宋の窮策は、三鎭を割くの詔書を出すの止むを得ざるにいたり、而して金軍は此の詔書を得て一たび去れりと雖ども、宋の內兇は既に金に見透かされたり。

同じ年の十一月、金の兵、再び京師を圍む。この際、和を主とするもの、戰を主張するもの、廟議は曖昧、しかも天子は困惑して決する能はず。遂に二帝の北行を見るの止むを得ざるに至りしなり。これ實に支那史に特筆さるゝ「靖康の禍」にて

して、支那歴代、夷狄に惱まされたること多かりしと雖も、その大打撃を蒙れる第一者は、まことに靖康の禍に於てなりき。云ひ更ふれば、靖康の禍は支那中國が蠻夷の爲めに被りし打撃中、その最大なるものゝ最初なりしなり。

この靖康の禍は、まことに岳飛二十五歳の時に起れるなり。しかも、飛、宣和四年、宋の蓼に膺じて、一たび戎馬の間に出でしより、處々に功を立つること多く、しかして、此のとき飛が青春の壯氣は、天に冲せんばかりなりき。

(三)

岳飛の名とともに何人にも聯想さるゝものは、秦檜が名なり。

秦檜は古來、極惡無道を以つて目せらる。彼、秦檜は、その人狹量にして嫌忌の心深かりしも、彼は其の祖國を滅ぼすを以つて快とするものにはあらざりし、而して彼は才能の顯脫したるものありき。彼は斯く才物なるだけ多くの欠點を有せり。

彼は果斷家なるだけ執念深き性格を有せり。されば人間としては極めて不完全なるものありき。

秦檜の主張するところは戰にあり。岳飛の主とするところは戰にあり。檜は文官にして、飛は武官なり。即ち飛は檜の反對黨なりき。檜はその量極めて狹し、されば反對黨を視ること蛇蝎のごときものありしなり。檜はまた、甚だ鄙劣なる根性を有せり。されば其の政見の異るものは、之れを斥けて姦臣と稱し、痛罵するを絶たざりき。

欽宗の後に高宗あり。高宗は暗愚の人にあらざりしも、聰明果決の英主にはあらざりき。されば和戰の決は彼が胸中になし得べくもあらず。されば時の相たる人々の意見に從ひ、遂に姑息因循、僅かに一時の安を偸むのみなりき。

岳飛は、大いに高宗の信任を蒙り、中原恢復の大任に當れり。されど彼と秦檜とは絶對的に其の意見を異にせるものなり。されば飛が大擧を圖らんとせるとき、主として之れを沮みたるものは秦檜

なりき。しかして、元首たる高宗の聰明叡智ならざりしが爲め、國家多事の際に當り、文治派と武人派の爭久しくして遂に、その國是は一定するに至らざりしなり。南宋の運命は斯くの如くにして日に〳〵衰亡に近づき、しかして、精忠岳飛は此の間に處して、遂に時代の犧牲者となり、殉國の死を致すに至りき。豈に惜しむべからずや。

吾人豈に岳飛のみと云はんや。國運かく危機に迫れる時、狂瀾を既倒に回さんと力めたるものは、この時の前後に、宗澤あり、李綱あり、張浚あり韓世忠あり、正氣歌を唱へて從容死に就ける文天祥あり。いづれも之れ國家有用の材なりき。されど彼等の多くは、時代の犧牲者となりしなりき。

(四)

吾人、こゝに岳飛を序する、多く其の大綱を摑むに止むべし。いかんとなれば當時の錯雜せる記事は、徒に讀者の欠伸に價すべく、而して多く益す、る無きを恐るればなり。

岳飛民王

日色黯として風悲しまんとす。

吾人はこゝに至誠の偉人が其の志を遂げずして、敵黨の毒計に中られ、悲慘なる殉國の死を致せし狀を叙せざるべからず。

その初め朝に於いて主和論者最も其の得意の境にありしも、當の相手なる金の政府は一變せり。而して曾て金に於いて媾和を非とせる一派は入りて政權を握るに至り、媾和は遂に破裂せり。かくして、宋の主戰論者が得意の時は來れり。

紹興十年五月、金の軍兵は四道に兵を分ち侵し來れり。岳飛は即はち之れを迎へ戰ひ、至るところこれを風靡せり。これ岳飛一生の戰史中、最も光彩あるところのものなり。而して主戰論者の領袖たる岳飛が最も得意の秋なりしなり。されども、岳飛が將軍としての功は、こゝに畢れり。而して彼が末路は來れり。

あはれ、日色黯たり。風また悲しまんとす。吾人は、こゝに飛が慘怛たる末路を叙せざるべからず。

(五)

岳飛今や河北を席捲し、更らに北して朔北を衝かんとす。しかして、金兵は爲めに大いに沮喪せるなり。これ獨り主戰論者の乘ずべき時なるのみならずして、主和論者も亦た乘ずべき機なりしや勿論なり。

然れども、あゝ、然れども、秦檜は唯だ其の見を貫くのみに鋭意なりき、彼は我意を立てんが爲めに、國家が蒙るべき利と不利とを等閑に附せり。元來、秦檜が劃するところは、淮以北を棄つるに在り。飛が揣は其の不利とするところなり。されば其の軍大いに中原に震ひたりし飛の軍は、是れよりして長驅して河北を復し、直ちに朔漠に入らんか、鐵騎胡兒の帳幕を踏破して、綿々の恨を報ずること易々たりしにもかゝはらず、あはれ、天子の詔は重くして動かすべからず。秦檜等が勸めて發せしめし班師の詔は、遂に飛をして師を班すの止むを得ざるに至らしめき。

されども、岳飛一たび師を班さば、河北瓦解すべく、金人跋扈すべく、中原恢復の功盡く書餅に歸すべきのみ、まことに之れ千載の痛恨事、されば飛悲泣し、東方に向ひ再拜して曰はく

「十年の力、一旦にして廢す」

と 蕭然として馬嘶かず、士首を俛れ、後髪ひかるゝ思ひして、軍を旋さんとすれば、百姓老父、相率ゐ、馬を遮り慟哭し、飛にして去らば彼等盡く其の屠戮するところとなるべきを訴ふ。しかして哭聲道路に滿ち、野に滿ちぬ。

三たび重ねていふ。日色黯たり。何等、痛恨の事ぞ。

(六)

あゝ、憎みてもあまりあるものは秦檜なる哉。

秦檜は、岳飛が部將張憲が變をなさんとすと誣告せしめ、かくして岳飛父子を捕へて張憲のことを

證せしめんとす。使者その郡に至るや、飛一笑して曰はく。皇天皇土この心を知るべしと。

かくして飛父子は、憲とゝもに獄に下されぬ。鞫問ぜられぬ。鞫問の間、飛、その裳を裂いて背を示す。四大字の黥みさるゝあり。曰はく、

盡忠報國

* * * * * *

岳飛は斯の如くして鞫問されぬ。されど其の精忠なる、豈に他より難ぜらるべき處、一點だにあらんや。されば飛は遂に陷擠すべからざるなり。檜の計策は全く齟齬せり。こゝに於いて檜は最後の窮策として、出來得るかぎりの手段を巡らせり。されども、かゝる窮策は未だ飛が罪を搆成するに全く可ならざるなり。こゝに於いて、憎むべき檜は自から一小紙に書し、死の命を獄に下せり。

かくして、岳將軍として聲名中外に喧傳し、金兵をして震慄せしめし一世の名將は、遂に、風寒くの日光薄き一日死を賜はるに至りぬ。死を賜はりしにあらず、寧ろ殺されたるなり。檜の亡狀も甚しといふべし。時に岳飛僅かに三十有九歳。岳飛死するや、金の諸酋が集り、酒を酌んで之れを賀せりといふ。

然れども金人の喜ぶところは、宋人の哭するところなり。即ち秦檜飛を罪すと雖も、宋の輿論の源泉は之れを鎖すに足らず、しかして民飛の冤を訴ふるもの聲、雷の如かりしといふ。

こゝに於いて孝宗皇帝、詔して飛及び雲の官を復し、禮を以つて改葬せしめ、廟を建てゝ忠烈と號せしめき。しかして、岳忠武王と諡せられしは、更らに其後に屬す。

(七)

あゝ三十有九年！飛が一生は極めて短かゝりしなり。されども其の事業は少なからず。否な、その事業は長へに傳へらるゝものにあらざれども、その人と其の人の行とは、遂に天地とともに盡くる

なきなり。

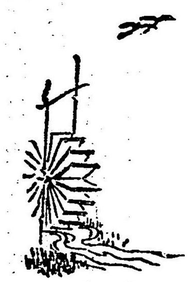
飛死して宋金の和成りぬ。秦檜が常に懐抱したる意見は達することを得たり。

檜は飛を殺して、その意見を貫けり。されども、檜をして其の意見を貫かしむるに至りしものは亦た飛等の力なり。飛將軍の名、岳字旗のなびき、金人をして大に恐るゝところ無からしめば、檜いかに主和論者なりしとはいへ、遂に其の意見を貫くを得んや。

最後に、こゝに重ねていふ。岳飛の死する、猶は春秋に富めり。彼の勇と、彼の略とを以つてすれば天下當るところなし。中原恢復は心のまゝならんのみ。されども飛は能く自ら、到底秦檜と兩立すべからざるを知れり。知りて而して獄に投ぜられ從容として死に就きしものは、彼、人間なるの本分を盡し、臣子たるの本分を盡せるなり。

あゝ、その初め一個の甕中に其の運命を托せるの兒たりし岳飛は、內憂外患の間に處し、南宋の運命を一身に擔ひて立ちしと雖も、時、彼に利ならず。不祥、遂に獄中に死しぬ。あはれ、一個の甕は狂瀾の間に孩兒を救ひぬ。されども滔々たる世波は、南宋運命の附托者たる一個の偉人を顚覆して、一切をうたかたの泡と消しぬ。彼は死し、一切はうたかたの泡と消えしといへども、人間たる價値は彼に依つて現はされ、人間たる本分は彼に依つて遺恨なきまでに盡されたり。

岳飛は實によく人間の本分を知れり。されば遂に彼は自己の爲めに、何等の術數をも盡するところなく、彼の希臘の大聖ソクラテースが、平然として毒盃を傾けしが如く、一切を天に委し、從容として死に就けるなり。



冬の夜がたり

孤島

フロイゼルとベルヂタとカミルロと牧羊者の老人と四人の者は、海上恙なくシヽリーの島に着して直ちにレオンテス王の朝廷へ伺候する。

王には殊氣なく日を送つて居らるゝ折柄、舊臣カミルロの歸參、夫れに加へて今は懐かしいポリクシテス王の王子フロイゼルの思ひ掛けない來朝に王の喜びは抑えられぬ程であつたが、中にも深く王の心を惹いたのは、王子が自分の妃だといつて紹介はせたベルヂタ姫の美くしい姿であつた。「あゝ若しあの時に、あのやうな無法なことをしなんだなら、捨てた姫も丁度此の位にはなつて居るであらう、と思つて見ればまた氣の故でもあるか、何處やらに亡き皇后の面差に似た所があるやう、今眼のあたり此の愛らしい姿を見、過ぎ去つたことを思ふにつけても、また今更思はれるのは

失なつた姫の身の上である。

牧羊者の老人は王がベルヂタの姿を見て、自分にも一人の姫があつたが、故あつて幼い時に分れたきり今以て行方が知れぬと嘆く言葉を聞いて、自分がベルヂタを拾つた時の有樣を思ひ合せて見れば、若しや其の姫君といふのが此のベルヂタではなかつたかと思はれる點がないでもない。

老人は進み出でゝ、實は此のベルヂタも自分の誠の娘ではなく斯樣〳〵の譯で拾ひ取つて幼い時から自分の兒にして育てたのだと、拾つた時の有樣から、アンチゴナスが熊のために噛み殺されたことまで、殘りなく物語つて、携えて來た證據の品を人々の前に開くのであつた。

席に連なつたパウリナは進み出でゝ其の品物を檢べて見ると、上衣は如何にも見覺えのある其の時の上衣、數々の珠玉は皇后樣が姫君の頸へゐ結びになつたそのものに擬ひもなく、またベルヂタと書いた紙片の文字こそ疑ひもなく亡き夫の手跡

である。

斯ういふ證據のある上からは、此のペルヂタが今迄久しく求めて居た姫君に相違ないと知れて、さては父君であつたか、姫であつたかと喜ぶ中に、パウリナは若しやと思つて居た夫は愈〻非業の最後を遂げたのであるかと、心の中は喜びと悲みと打ち雜つて且つ嘆き且つ喜ぶのであつた。

王とても此の喜びにつけて思ひ起すのは亡き皇后のこと、若しハーミオンが生きて居て此の有樣を見たならばと、姫の手を固く握つて、

『アヽ、お前の母が、お前の母が。』

と言ふ外には暫らく何の言葉も出ないのであつた。パウリナはやがて涙の顏を上げて

『實は此の程伊太利の名人ヂュリオ・ロマノに賴んで置きました、皇后樣の御像が出來上つて參りましたのですが、如何にも美事な出來でございまして、若し王樣が御覽になりましたら乾度ハーミオン樣が生きて來たとお思ひ遊ばすに違ひございませぬ。何卒皆樣で一寸妾の座敷まで御覽にお出でを願ひまする。』

といふので、ペルヂタ姫はたゞもう母君は何の樣なお方であつたらう、早くお像が拜み度いものと飛び立つ思ひで、人々の後からパウリナの邸へ行くのであつた。

さて皆々パウリナの家の奥座敷へ來る。パウリナが靜かに幕を拂ふのを見ると、如何にも名工の鑿のあとに亡き皇后の立像、宛ながら生きた人を見るが如く、王は暫し言葉もなかつたが、

『如何です、此の御像は本當の皇后樣のやうではございませぬか。』

とパウリナの言葉に、王は我れに復つて

『初めて逢つた時にの、丁度此の樣な氣高い風で立つて居つたのぢや。併し、パウリナ、ハーミオンは此の樣に年を取つては居らなんだではないか。

『其處が、貴君、彫像師の上手な所でございませう。今生きてお出でなすつたら、多分斯の樣であらうと思つて拵らへましたのでございますもの。』とパウリナは言葉を繼いで『ですが、もう幕を引きませう、ね、夫れでないと何だか動くやうに思はれて參りますから。』

『マア、引かないで置け。何うだ、カミルロ、お前には息をするやうには思はれぬか。エ、何だか眼が動くやうに思はれるが。』

『王樣、夫れではもう幕を引きまして宜敷うございますか。アレ、左樣お寄りなさると御像が生きて參りますよ。』

『夫れならば二十年茲に居ても苦しう無い。夫れでも何だか息が來るやうだ。何の樣な名工でも、まさか息を彫るといふことを出來さうもないものだが。皆な笑うては困るが本當に接吻したく思ふよ。』

『アレ、王樣お止し遊ばせ。唇の紅がまだ乾きませぬからお口が汚れますよ。さあ、幕を引きま

しても宜敷うございますか。』

此の間ペルヂタ姫は膝を突いたまゝジッと見凝めて居つたのぢや。併し、パウリナ、ハーミオンは此の樣に年を取つては居らなんだではないか。

『其處が、貴君、彫像師の上手な所でございませう。今生きてお出でなすつたら、多分斯の樣であらうと思つて拵らへましたのでございますもの。』とパウリナは言葉を繼いで『ですが、もう幕を引きませう、ね、夫れでないと何だか動くやうに思はれて參りますから。』

『マア、引かないで置け。何うだ、カミルロ、お前には息をするやうには思はれぬか。エ、何だか眼が動くやうに思はれるが。』

『王樣、夫れではもう幕を引きまして宜敷うございますか。アレ、左樣お寄りなさると御像が生きて參りますよ。』

『夫れならば二十年茲に居ても苦しう無い。夫れでも何だか息が來るやうだ。何の樣な名工でも、まさか息を彫るといふことを出來さうもないものだが。皆な笑うては困るが本當に接吻したく思ふよ。』

『アレ、王樣お止し遊ばせ。唇の紅がまだ乾きませぬからお口が汚れますよ。さあ、幕を引きま

せう。』

此の間ペルヂタ姫は膝を突いたまゝジッと見凝めて居つたのぢや。併し、パウリナ、ハーミオンは此の樣に年を取つては居らなんだではないか。

『其處が、貴君、彫像師の上手な所でございませう。今生きてお出でなすつたら、多分斯の樣であらうと思つて拵らへましたのでございますもの。』とパウリナは言葉を繼いで『ですが、もう幕を引きませう、ね、夫れでないと何だか動くやうに思はれて參りますから。』

『マア、引かないで置け。何うだ、カミルロ、お前には息をするやうには思はれぬか。エ、何だか眼が動くやうに思はれるが。』

『王樣、夫れではもう幕を引きまして宜敷うございますか。アレ、左樣お寄りなさると御像が生きて參りますよ。』

『夫れならば二十年茲に居ても苦しう無い。夫れでも何だか息が來るやうだ。何の樣な名工でも、まさか息を彫るといふことを出來さうもないものだが。皆な笑うては困るが本當に接吻したく思ふよ。』

『アレ、王樣お止し遊ばせ。唇の紅がまだ乾きませぬからお口が汚れますよ。さあ、幕を引きま

めに祝福の祈をあげるのであつた。

一座の人は何れも餘りの不思議に驚くのであつたが、これは決して不思議もない、今迄像と思ふたのは誠のハーミオンで、皇后は今日迄も生き存らへて居た、といふのは、皇后が氣絶した時に、ハーミオン樣には遂にお沒れになりましたと報らせたのは、實は後難を慮つてのパウリナの氣轉であつた。皇后は直きに息を吹きかへして、今日まで王の眼を忍んで、此のパウリナの館へ潜み、安らかな月日を送つて居たのである。

皇后ハーミオンの思ひ掛けない生存と、失つた姫君の表はれたのと、此の二はレオンテス王が長年の憂ひを一時に吹き拂つて、シシリーの朝廷は再び春風の中に包まれるのであつた。

夫れにつけても有り難いのは人々の心である。今日の喜びも皆此處に居る人々の賚であつたと王は溢るゝばかりの御歡びに、王子フロイゼに向つては、よくも賤しい姿をした姫の身を愛して呉れたといひ、牧羊者の老人に向つては長い間姫を我が子の如く養育して呉れた恩義を謝し、カミルロとパウリナの二人に向つては始終變らぬ忠義の心を忘れ難く思ふのであつた。

此の時しも思ひ掛けないポリクシネス王の來着を報じて來る。ポリクシネス王は王子とカミルロとの逃亡に就いては、畢竟カミルロが常始終念じて居たシシリーの朝廷へ行つたに違ひないとの推量から、直ぐ後を逐ふて圖らず此の喜びの最中へ着いたのである。

之れを聞いたポリクシネス王もまた人々の喜びに加はつて、先年のことはさつぱりと忘れて、再び昔の溫かい交誼を結び、王子フロイゼルとペルヂタ姫との婚儀をも許すのであつた。

今はもう一から十まで缺くるところなき重疊の始末、夫れといふのも全く皇后ハーミオンの堅忍の美德から出たことで。

（「冬の夜がたり」おはり）

文豪スコット

高屋吸江

（一）

英傑の士は常に吾等の好伴侶なり。千載の下、一たび其の傳記を繙けば心中一種の快を感ずると共に趣味ある教訓を收むることを得。げに偉人の傳記は一面娯樂の友にして一面警醒の師たるべきものなり。爰に陳べんとするかの『湖上の佳人』の作家として特に我が邦人に名を知られ『マーミオン』『アイヴアンホー』等の著者として文名世界に輝けるサア、ヲルター、スコットの如き幼少よりの日夕の周圍、居常の境遇が其雄篇名作と相關すること極めて密接にして彼れの諸傑作を誦するものは云ふまでもなく、何人に取りても此の世界の人々に愛讀せらるゝ大作家の境遇性行を知るは、興味の津津たる者あると共に教訓の胸中に浮ぶ者あるを感

ぜざるを得ざるべし。彼れが荒廢せる古城趾に嘯き、將た滾々として千古盡きざる流に對して詩情湧き來りて沈思瞑想に耽けるの時、腦裡に浮ぶ所の者は幼きより耳底に潜める古武士の赫々たる武勇談又は英雄佳人の神聖なる戀愛譚などにして、目前の光景と是等物語の有樣とは其豐富なる想像によりて、往にし昔の其時を眼の當り見るが如く感じつゝ、これ等を結構案配して描き出せしものは、やがて世を驚かせし名什大作となりしものなれば、爰には彼れが幼時の周圍境遇さては其性行などを寫してこの文豪の面目の一端を窺はんと欲するなり。

（二）

抑スコットの父は英蘇兩國の境なるボルダー郡にての名族の裔にて蘇國の裁判所に書記を勤めて好評ありき。彼れは元來長老教會の信徒にして嚴格に其教義を守り安息日の謹愼なども固く持して違

はぬ程ありて、性情詩歌小說などを悅ばず唯『天路巡歷』の一書のみは家族にも繙くを許せしといふ。さればスコットにして若し其幼時の數年をこの父の家庭に過したりしならんには、後年彼れがありし如く史的小說家の泰斗として、又は古英雄の悌を當世に活現せし獨步の大詩人として、かくも成功を得ずして已みしやも知るべからず。さはれ天才は由來常人に傑出して他の企て及ぶべからざるもの、そが偶然の出來事に遇ひ周圍の境遇に依りて其方向を種々にするあるも、此處に驥足を延ばすを得ずんば必ずや他の方面に雄飛せずしては已まざるなり。而してスコットが斯く詩人として小說家として成功を期するに至りしは固より性情の趣く所、境遇の然らしめし所とは云へ、幼少の折の患疾の爲めに身体の自由を欠きしことの與かれることは否むべからず。

スコットの母はエヂンボル大學の醫學の教授たりしルサーフオルド博士の女なり。博士は醫學に勝れしのみならず兼ねて文學的智能にも長けたりしも其外孫たるスコットの文學的天才は此外祖父の遺傳に負ふ所あるやは固より知るべきにあらず。そは兎もあれ未來の大文豪サア、ヲルター、スコットは千七百七十一年八月十五日蘇國の首府たるエヂンボルに呱々の聲を揚げぬ。生育頗る良好なりしに生後十八ヶ月にして烈しき熱病に冒され幼弱の身の既に危かりけるも天才の兒を夭折せしむるを惜みしにや漸くにして病は輕快に趣きしと雖も此病源となりて右脚に故障生じ終生跛の身となりぬ。かくて彼れは轉地療養の爲め一人の下婢に供はれてサンヂーノウなる祖父の家に移りしが、この下婢には思ひ焦れたる情夫ありて己れが情夫と引離されしは全くスコットあるが爲めとのみ思ひ込みて、罪なき孩兒は危くも剪刀もて其喉を切られて沼に埋づめられんとせしも幸にして事遂げざるに先だつて止みにき。

（三）

この祖父は『學問なきも實しく、質朴善良にして蘇國人の穩健なる血統を承けし人』なりき。そのサンヂーノウの捿家は瀟洒たる藁葺の邸宅にして、一たび其周圍の光景に眼を轉ずれば荒廢せる封建諸侯の舊城砦の殘跡や、朽ちて倒れんとせる古風の伽藍、さては古色蒼然たる樓塔などの其處此處に在るあり。幼少詩人の眼は朝夕これ等の風光に接して深く腦裡に感銘し、生を終るまで當時の感想は幾度か其記憶を呼び起して、後に幾多の傳奇詩歌を草するに當つて這般の光景が其想像に浮びしこと幾十度たるを知らず。かゝる風光に圍繞されつゝ祖父の膝下に日を送りけるスコットは身も斯く健かとなりて近隣の農夫などには事の外慈しみ愛せられ、己れ亦日々野邊に供はるゝを快きとに思ひしが、特に或る老牧牛者は日夕己れの牛羊の監視に出で行く毎に彼れを背に負ふて供ひ行きしかば幼少の彼れに取りては此の上もなき樂みとなしぬ。彼れは又牛羊の群に驅け入りて芝生の上を轉び遊び或は峨々たる岩石を攀ぢ登りなどすることを好み無邪氣に戯れ遊びて其日を送りぬ。かくて數年を送りける中嘗て伯父の許より小馬を贈られしかば、年少の彼れは喜び勇みて日々其背に打ちまたがり古武士の格鬪奮戰の樣などに擬して遊戯し愉快に月日を過して歲月の矢の如きをも覺へざりき。彼れ幼少の時は專ら戶外の運動遊技を好みしかば、一室に閉ぢ籠りて讀書に耽けるが如きことは斷へてなかりき。祖父の家に在りし伯母は彼れに讀み書きの道を敎へ、又史上の物語などを語り聞かすれば彼れは打ち興じて耳を傾けぬ。彼れは又夕の眠に就くの時には此の伯母の口よりボルダー地方に傳はりし歌謠の妙音を耳にしつゝ夢心地に入るを常となせりき。あゝ生れて一年有餘の歲月を嚴格なる父の家庭に送りし兒の今は穩雅靜閑なる祖父の膝下に愛育せられて、終日戶外の遊技に勞れし身に夕の眠に就かんする夢現の境には枕邊美妙の歌謠の響くあり。幼きヲルターは

如何に此の樂しき境涯を感じけん。彼れが後年の名作には當年の境涯の印象が腦底に逍遙するものあるを認めざるを得ざるなり。實に彼れが後年描寫せし慓悍なる山賊の『馬勒、刺馬輪、鎗』等の他を語らざる輩や、『戰場にては畏怖せられ客間にては親愛せらるゝ』武俠たる勇士の紙上に躍如たるものは當時伯母の口より語られし物語を聞きて半武斷的半田園的の過古の社會の狀態が其幼き心中に閃きしものが素因をなせること疑ふべからず。

(四)

この頃のことなりき。スコットの父は彼れの脚疾の爲めにはバスの鑛温に浴せしむるの可なるを勸むる人のあるに任せて當分の間彼れを其處に遊ばしむることゝなしぬ。彼れは伯母に供はれて海路英都倫動に出でゝより所々の名所舊蹟を探りつゝバスの浴場に到り、此處に一年の歳月を一向療養に費せしと雖も其患疾には些の効を見ざりき。

唯此の滯在の間には猶年少の彼れにふさはしき種々の娯樂遊技を事とし特に觀劇に熱中せし外他に記るすべき程のことゝてもなかりき。而も五十年の後世界の大文豪となりしスコットは當時を回想して其光景を目の當り見るが如くに描寫せしことゝあり。實に彼れに取りては何れの時何れの處にても一たび其幼少の時に腦裡に刻まれたる印象は終生其記憶より逸し去ることなく、そを想起する毎に心中無限の快を感ぜざることなかりしなり。彼れはバスより暫時の間エヂンボルに趣きやがてサンヂーノウの祖父の許に還りぬ。彼れ八歳の時海水浴をなさん爲め、史上の事蹟に富めるプレストンパンスの漁村に行きけるに、ダルダッチーと呼べる老兵の知己を得き。彼れは日耳曼戰爭に從軍中の物語などを語り聞かせしにスコットは熱心に耳そばだてゝ聽聞しぬ。如何に深く注意しせてその幼詩仙が此等の物語を聞きしかはこれ亦後年の著作の上に現はれたる所を見ても推するに難からず。

(五)

スコット今やエヂンボルなる父の家に歸りて、僅かの準備教育を受けたる後、千七百七十九年其地の高等小學に入りぬ。彼れが自ら記する所に依れば學校にては有爲の學生にてはなく教場に入りては『流星の如く』彼邊是邊を見回はして横見ばかりなしぬ。而かも學友間に程もなく極めて親愛せられ、彼等はスコットの周りに群がりて其語り出づる數多の物語に耳傾くることを常となしぬ。彼れは幼きよりの脚疾の爲め身の自由を欠けるを以て、他の兒童と共に戸外の遊技などを爲すは幾分の不便を感じつゝならん、されば、自然學事の研究を專らとすべき筈なるに、彼れの獨特の精力と不撓の剛氣とを以て、人々よりは能くせざるべしと思はれたる諸競技に其技量を表はしぬ。

かくてスコットは專らアダム博士の教授を受くるのに至りしが、其頃ボレース及びヴアルジル（共に羅典詩人）の韻文を譯して好評を得き。彼れ學業も漸く進み、進んで大學に入らんとせしも其健康勝れざりしかば、當時ケルソーに住ひし伯母の手に再び委ねらるゝことゝなりき。このケルソーは彼れが『蘇格蘭に於ける最も俚史的と云ひ得べからずとも、最美の村落』と呼びし地にして、此處に留まれる間に彼は造化の巧致自然の妙趣に深く感習し又好んでバアルシイ（英の詩人）の『歌集』を愛吟しぬ、彼れは當時十三歳の少年にして世の常のものは多く飾慾に心を奪はるゝの時なるに彼れは庭中の大なる楓樹下に至りて詩集などを繙きて食事をも打忘るゝこと屢なりき。彼れは小使錢にとて初めて得し數十錢は已れ愛讀の書を購はん爲めに費せしといふ。其非凡なる記憶は一度誦讀せし書中の妙句は其儘之を暗じ、朋友などにその語句の有りのまゝを語り傳へつゝ興味ある物語をなすことなどは常の事なりき。彼れは特にスペン

ナル（英の詩人）の作を好み、其勇士佳人の種々の物語を誦して彌々想像力を富まし、益々彼の尚古癖を助長しぬ。彼が父の許に歸りし頃には屢々學友と共に古城の跡を訪ひ舊蹟の今昔を吊ひなどして散策するを常とし、其等學友間には其理解力の明確なると品性の強剛なるとを以て頗る輿望を博せりき。實に後年世界の文壇に於て敬慕尊重を得し其曙光は既にこの時に於て開かれしなり。この當時の一少年ヲルターは既にかくして名所舊蹟に足を入るゝ毎に其事蹟に關與せる古英雄の俤を捕へ來りて、暗憺たる過古の黒雲の中に葬られし英雄佳人を起たしめて目前に活現せしむるをの魔力を有せしなりき。げに彼れはこれ等想像の世界に生活し行動し常にこの社會の中に已れの存在を有ちしなりけり。

編輯だより

▲云ふまいと思へど今日の暑さかな。いよ〳〵益す〳〵堪えがたき今日この頃の暑さには候はずや。會員諸子のうちにも南船北馬それ〴〵の地方に、種々の目的の下に旅行されし向きも少なからざること、存候。編輯者も編輯の餘暇、それ〴〵各地に消夏致候。そのうちの面白きことは、漸次本誌に紹介さるゝこと、存じ候。

▲第一期「中等教育」既に完結致候間、以後次第に發行日を繰り上げ、追々發行日を十日に改正致すべく、目下その準備最中に御坐候。尚ほ又た來る九月十日發行すべき本誌第五號には、理學士友田第三氏の「電氣の話」物理講話として掲載さるべく候。友田學士は東京帝國大學理科大學の秀才、夙に優等の成績を以つて卒業せられ、目下第一高等學校に教鞭を執らるゝ人に御坐候。されば、その講話のいかに多趣味にして有益なるかは、會員諸子の思ひ半ばに過ぎ給ふべきこと、存じ候。

▲また右同號へは英國理學家の泰斗ケルヴィン卿の肖像、補正成の寫眞版を掲げらるべきほか、大地獄と逆さ富士等の珍らしき寫眞版を掲げらるべきほかに御坐候。尚ほまだ前々申上置候「中等教育講話」會は來る十月中旬開會さるべく、而して理學博士石川千代松、海老名彈正兩氏外數氏の講話あるべき筈に御坐候、匆々。

ディツケンスの苦學時代

文學士 中西芙蓉

想像力の誕生地——泥がちな人生——父と兄弟——わがチヤタムと、ギルス師と——逆境と獨學——大劇場——二度目の學校生活——十四歳から實世間へ——靴磨き——下級書記——下院の速記員——一週間に十五シルリング——二十三歳にて「モーニング、クロニクル」の通信者

▲想像力の誕生地

チヤールス、ディツケンスは、その最初の教育をギールスと云ふ人から受けたのである。この人の小學校はチヤタムといふ處に在つたので、ディツケンスはフアニーと呼ばるゝ其の妹とゝもに此の學校へ入學したのであつた。それは一千八百二十一年のことで、即ちディツケンス九歳の折のことであつた。

然るに此のギールス氏は酷くディツケンスを可愛がり、熱心に教育して遣つたのみならず、夕方の散歩には何時もディツケンスを伴れて行つたとのことである。さればディツケンスは後年に至るまでも、最初の師ギールス氏の一方ならぬ深切を心に銘じて更らに忘れなかつたといふことである。

ディツケンスは此のチヤタムに止ること三年にして、その十一歳の時、ここを立ち去つたのであつたが、彼が此の校を立ち去るに先ち、既にギールス氏の熱心に依つてディツケンスが少年時代の教育の大部分は終はられて有つたとのことであつた。

ディツケンスが此處を立ち去るべく餘儀なくされたのは、家庭の事情上、萬止むを得

なかつたのではあるが、此のチヤタムといふ土地は、デイツケンスの大なる想像力の誕生地であつたことは疑ふことは出來ぬ。しかも彼れ自身も後年に斯く思ひ知つたので有つた。

▲泥がちなる人生

デイツケンスがチヤタムを去るの止むを得なかつた理由は、父が金錢上の少なからぬ累ひを惹き起こしたからのことであつた。

彼がチヤタムを背後にロンドンへと出立したのは丁度、激しき吹き降りの日であつた。この物憂き恐ろしげなる雨の日、彼は馬車に載せられ、ロンドンへと送られたのであつた。後年、彼は此の日の事をば認めた一節に、

『馬車の內には一人も乘合ひの人が無かつた。自分は餘り淋しいのと、餘り恐ろしいのでサンドウキツチを漸次に喰べ盡して終ふた。雨は小休まうともせず、斷へず烈しく降り切つて居り、何處かしこも泥路であつた。それで自分は恁う考へた。人生といふものは、自分が案ねて思つて居たよりも、泥濘つた道の多いものであると』。

▲父と兄弟

此の金錢上の累ひの爲め、父をはじめデイツケンスの家族は、ロンドンの片田舍ベイハム、スカツトに轉居つた。家は素より手狹の、萬事につけて不自由がち。それに土地が至つて邊鄙で人家もまばらで有る故に、デイツケンスは新しき知己を作りたくも、作ることが出來ぬのであつた。否な朋友として親しむべきほどの里の童は、一人も見出し得なかつたので有つた。

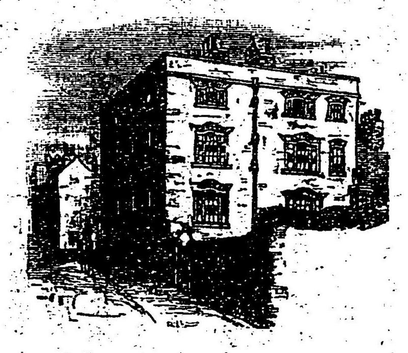
されば、こゝへ引き遷つてから間も無く、デイツケンスは、小兒心にも至つて無聊に苦しんだのである。後年、デイツケンスは當年を回想しては、父のことに就いて、次のように記したことであつた。

『恐らく自分の父ほど深切で寬大な人は、此の

世の中に多くは有るまい。母上をはじめとしてわれ等小兒、逆境に立てる父の友人に對する父の立派な深切な擧動は、實に此の上もなく、敬慕の念に堪へぬのである。取り分け、自分は病身であつたが爲め父は夜の眼も寢らず、看護して呉れたのであつた。あはれいつくしみ深き父。

自分も此の身相應なことをしようと思つて、毎朝、先づ父の靴を、次ぎに自分の靴を磨くことにした。その上、家の手助けになることは出來る限りして見た。弟や妹の身の上も出來るだけ監督した、(兄弟は總べて六人あつたので)。それから、貧しき生計を助ける爲め、人の使ひに出たことがあつた。云々』

それで、いかに當時貧しき生活をして居たかゝ好く解かるのである。



▲我がギルス師!

幼きころからのデイツケンスの友人ジエームスラマートは、その頃、家族の人々と共に、ヤムといふ街に住んで居たが、彼は依然舊の如く演劇好きであつた。彼はデイツケンスが當時家族の人々とゝもに零落して居るのを憐れと思つてか、芝居小屋の繪を書き送つたといふことである。

それからデイツケンスの妹ファニーは、丁度この時國立音樂學校の小學生徒に選拔されたのであつた。

自分の妹がかゝる榮譽を擔つたことであるから、兄たるデイツケンスも亦心のうちに一面は嬉しく思つたに相違なかつたろうが、それとゝもに一面に於いては、ふたゝび其の身を思ひ、今の

境遇では到底就學の望みなきを思ひ、その前途の更らに目的あらぬことを思ひつゝ、その妹が家を辭して學校へと出で立つを見送りながら、嬉れし涙にむせびつゝ佇める家族の人々と立ち並びつゝ思はず不覺の涙に咽んだことであつた。

かく其の身の不幸を思ふにつけても、思ひ出でらるゝは、彼のチャタムの地！一向その身を愛せしギルスの師!!

ディッケンスは更らに〳〵不覺の涙に咽び、羽あらば、翼あらばチャタムの地へ飛んで行きたやとまでも思つたのであつた。

かゝる逆境に立ちつゝ、彼は自分で出來得るかぎりの獨學をした。その好める文章を綴つた。その愛讀書なる「ギル、ブラ」を眞似て妙じき一文をものした。それは已れの見知れる老人の聖者を主人公としたものであつた。

このような事は、逆境のうちに在るディッケンスの、せめてもの心やりではあつたが、これも天命か、ディッケンスの前途は、いよ〳〵望みなきものとなつた。即ばち家族の人々は、いよ〳〵零落の淵に沈んで來たのであつた。そこで、彼は當時、その友人にして親戚なるジエームス、ラマートが靴磨き會社の取締りをして居るのを幸ひに、遂に靴磨きにまでもなつたのである。

然るに不圖したことから、ディッケンスの父はラマートと爭ひが出來た。これが、ディッケンスに取つては不時の幸ひとなつて、兼ねて〳〵心に望んで居つた學校生活を繼續することが出來るようになつたのであつた。時は一千八百二十四年のことで、ディッケンスが僅かに十二歳の時のことである。而して彼が入學した學校といふのは、ジョンスといふ人の建てた學校であつた。

が、しかしながら、再度の彼の學校生活の時期も極めて短かゝつた。即ばち在學二年にして、彼は頗る健康を害したので、遂に此の校を去り、更らに二年、即ばち十四歳の時、また〳〵全く學校

生活をやめて、實世間の活きた戰場へ打つて出ねばならぬようになつたのである。

▲種々の職業

それから以後、ディッケンスは、世間へ出て、いろ〳〵の働きをしたのであつたが、そのうちエドワード、ブラックモアといふ人の下級書記となつて、初めには一週間に十三シルリング六ペンス、後に十五シルリングを貰つた。

この書記をして居るうちに、その同僚に芝居好きの青年があつたので、業務の餘暇には安芝居を一緒に見に行つたといふことである。

ディッケンスの苦學時代

心に大志あるディッケンスであるから、かゝる位地に滿足せぬのは勿論のことであつた。

彼の父は此時、年齡方に四十五歳、かまけに種々の繫累はあるし、このことばかりでも、ディッケンスは仲々安閑として居ることは出來ぬのであつた。されば彼は此の時出來るだけの獨學をして居たのである。

その後十九歳にしてケンス彼は下院の一吏員となり、更らに其の後二十三歳にして「モーニング、クロニクル」といふ新聞の通信者となつたのであつた。

羅馬法王レオ十三世

S M 生

米國新聞記者の法王觀——レオ十三世の容貌——その人品——その特質——その生地と父母——賢明の母——肉弱の不健全——非凡の才智——レオ十二世との誤見——彼の大改善——世評——彼の事業——最も顯著なる人物の一人

「われ等、その室を辭せんとする時、法王は再び余を呼びて、その手を我が頭上に置きつゝ、

『わが子よ、御身年若く、しかも世界に有用の材なり。父と子と聖靈と永へに爾をゝもにあれ、さらばよ。』

との慈愛懇切の辭を殘せり。

室を辭せる後、更らに顧みれば、痩軀細身の白衣の姿は、獨り薄暗きレ彼方に立ちつゝお第り。この瞬間、余は實に近世史上最十三超越せる人物と世目の前、相見たるを知れり。政治家、帝王、哲人、慈善家、あらゆる人物——その何人を以つてするも余は今日まで、斯の如き世界的人物に接せしことは、未だ曾てあらざるなり。」

「後——會堂に赴ける時、今一度彼を見たりき。頭上の聖冕、胸間の寶珠、燦爛眼を奪ふ間、伶人は不朽の樂を奏し、薫香の烟りは聖僧が列伍の上に漂へり。一道の日光こゝに落ちて、羽冠、褊袍を照らし、法王は其の間に立ちて、牧牛者、印度人等の下賤に對し、繰り返へし神の冥福を祈れり。

越えて數日、ヴアチカン宮、古色蒼然たる庭園を觀るを許さる。喜び譬ふべからず。たいよへる大氣は遙かの野邊より薫れる花の美香を載せて來り、泉水と立像とは處々に散在せり。云々」

* * * * * *

以上は、米國新聞記者が、羅馬法王レオ十三世を訪問した時の記事の一二節である。その羅馬法王レオ十三世は遷代され、去る七月二十八日を以つて、伊太利羅馬府聖、ピーター寺院に於いて葬儀は營まれたのであつた。が、それから數日にして新法皇パイアス十世は新法王の位に即かれたとのことである。

羅馬法王！苟くも萬國史を繙いた人々は、必ずや、一二度ならず、この羅馬法王といふ文字に眼が觸れたことであらう。諸君の或るものは、此の羅馬法王の文字を見ると、何うやら隔世の感が起りはせぬであらうか。羅馬法王のことに就いて詳しく述ぶることは、仲々容易なことでは無いから、こゝには只だ此のレオ十三世のことのみに就いて出來るだけ簡單に述べて見たいと思ふ。

* * * * * *

「法王レオ十三世の身長は尋常にして、その連せたる躯軀は、勉學と高齢との爲めに屈まれり。されど、その動作は、凡べて驚くべく敏捷にして元氣あり。その小なる烟々として迅敏なる双眼は相接近して、その口には愛ある微笑を湛ふ。彼は若々しき感情の熱火を有つ。されども、之れに伴

ふべき體力を欠く」

これは、サンテューと云ふ畫伯が、レオ十三世の晩年の容貌、風采を記した一筋である。先づ此の記事によつて、略ぼ彼の外貌を明らかにすることが出來ようと思ふ。ところで、彼は如何なる生活をして居たかといふに、至つて質素な生活をして居たのであつて、彼は斯く常時の費用を節しては巨額の金錢を慈善事業に寄附したり、また、種々學問上の補助をしたことであつた。そのうへ、彼は科學や文學にも少なからぬ趣味を持つて居たのであつて、また少なからぬ政治上の技量を持つて居たといふことである。それは兎に角、レオ十三世が、近世での最も賢明にして顯著な人物の一人であつたことは、素より疑ふべからざることである。

この賢明にして、最も顯著な人物の一人であつたレオ十三世の經歷は、果して何のようにあつたであらうか。

初代の羅馬法王から二百五十七代目の法王が、此のレオ十三世であつて、名をばギオヴァッチノ・ヴィンセンゾー、ペッシーと呼ばれた。生れたのはナポレオン戰爭最中の一千八百十年。生れたところは、伊太利のカルピネトー。彼の家は貴族の家、父はナポレオンに從つて戰ふた軍人であつて、その母は博識高德の賢婦人であつたといふことである。

彼は其の肉体上に於ては、甚だ壯健でなかつたが、甚だしく狩獵を好んだが爲め、諸在の山野を跋渉し、これが爲めに、大に健康を得たといふことである。彼の肉体は斯の如く、甚だ健全とは云ひ難いのであつたが、その精神は頗る健全なものであつて、公明なる性質と、貧人に對しての深い慈悲を持つて居た。これは實に賢明なる母の感化に依るとのことである。

貴族にして軍人であつた彼の父は、いかにもして、彼を軍人とし、ペッシー家に武名を加はへしめようとしたのであつたが、母は彼をして他の高尚の目的を遂げさせやうと思つて、頗る熱心したので、それが爲めに彼は其の身を宗教界に措くに至つたのである。

されば彼は其の初期の教育からして既に宗教の學校で受け、かゝる初期教育の時代から、既に非凡の才智を發揮して、朋友の間に尊敬されたのであつた。諺に曰ふ。十歳で神童云々は、全く彼には適用されなかつた。彼は此の初期の非凡を、その終生接して居たのであつた。

一千八百二十五年、丁度彼が十五歳の時、學生總代として時の法王レオ十二世に謁見したのであつたが、この謁見に依つて大いに法王の感化を受け、此の法王を敬慕する心が深く、後ちに彼れが其の嗣を繼ぐに至つても名までレオを襲ふて、遂に十三世と稱するに至つたのであつた。

その後に二十二歳にして、彼は神學博士となり二十七歳にして、プリーストとなり、法王の行政事務を執り、三十三歳にしてアーチビシヨップとなり時の法王グレゴリー十四世の大使として、佛國義のブラセルに派遣されたのであつた。

彼はグレゴリー十四世からも切りに寵愛され、しきりに重く用ゐられたのであつたが、グレゴリー遷化の後、パイアス九世の時にも益〻重く使用され、遂に一千八百七十八年、パイアス遷化の後法王選擧會は六十一票中四十四票、即ち三分の二以上の多數で彼を法皇に選擧し、こゝに初めてレオ十三世となつたのである。

彼は即位すると間もなく、盛んに宮廷を改善したのであつた。その爲めに治績は著しくば有つたが、先法王の宮廷で勢力を揮つて居つた凡べての者からは悦ばれなかつたのである。これは勿論その處であらう。けれども

『法皇パイアス九世の後繼者に於いて、余は深

高なる思想と、慈悲に富める心情と、著しき實素とレオの名に負かざる勢威とを識認す。しかしてバイアスが世を去りし事に對する悲みは、之れが爲めに除かる』

とは、當時の識者の一人の言葉である。されば、いかに彼が、當時の識者から高き人物として認められて居たかゞ解かる。

彼が在位中に盡した事業は仲々に多く、また、恰度、いろ〳〵さま〴〵の出來事のあつた時代であつた。彼は宗教學校も起こした。カトリック教の教義と近世思索家の思想とを調和させる爲めに大著述をも出版せしめた。また、しきりに教會の歷史をも研究した、文學と科學と神學と結び付けようとして、非常に熱心した。勞働問題の解決をばカトリック教會の一個の仕事だと信じて、この方面に於いて甚だ鋭意熱心した。その他いろ〳〵種々の難局に當つたのであつた。かゝる種々の出來事は、こゝに簡單に書いても解りかねることが多いから、別にこゝに詳しく記さぬ。

けれども、十中の八九、レオ十三世は種々の方面に成功した。取り分け彼の熱心に依つて、英國の朝廷と法王の宮廷との關係は益〻親密になつたのであつた。その結果一千八百八十七年に、英國女皇ヴイクトリアの即位五十年の祝典に際して法王が熱心に祝意を表すれば、同年レオ十三世の五十年目の祝典（僧侶となりてよりの）があれば、英皇熱心に之れを祝すといふような次第になつたのだわつて、これは全く、レオ十三世が熱心の致すところであつた。

さらでも、甚だ健全ならざりし躰軀の、勉強と高齡との爲めに屈まつたレオ十三世は、中古以後の法王として最も賢明にして最も顯著なる人物の一人として、世界から認められたのを筐として、九十三歲の高齡を以つて、こゝに一千九百三年の七月、遂に遷化されたのであつた。

諸葛亮孔明の話

文學士　南川伊川

『出師表』と『三國誌』の孔明——面白き人物の配合——詩の如き南陽——天下三分の策——天の時、人の力——二十七年の努力——一種の生存競爭——忠義の解釋の相違——岳飛と孔明——忠想にして賢明——支那史を繙くものゝ注意

▲「出師の表」で有名な諸葛孔明、『三國誌』の大立物の諸葛丞相、劉玄德が三顧の勞を取てした南陽の臥龍……その諸葛亮孔明のことは、苟くも支那の歷史を讀まれ、若しくは『三國誌』を繙かれた人々は先刻御承知のことであらう。

▲かく申す自分も、彼の『三國誌』の愛讀者であつたこともあつて、その時代には劉備が南陽の草廬に孔明を三顧する邊を最も詩的なところと思つては幾度となく繰り返へして讀み、孔明の智、曹操の軍を赤壁に大破した邊に讀み至れば、思はず案を打つて快哉を叫んだこともある。諸君のうちにも或は自分と感を同ふさるゝ『三國誌』の愛讀者があるかも知れぬ。

▲時とすると、その爲婦人に遜さまで仁心に富める玄德、その寬達比類のない關羽、その短兵急なること火の如き張飛、この三人の如きは、誠に思白い人物の配合で、この三人が義兄弟の約を結んで異體同心を爲して居るところなぞは、下手な小說なぞよりも餘程面白く、また或る見方によるとこの本の作者が、それ〴〵人間の弱點を具體的にする爲めに、殊更作意して、かゝる人物を設けたかの如くにも思はれることである。

▲が、取り分け『三國誌』の大立物たる諸葛亮孔明は、たしかに一つの理想的人物のように思はれるのである。若しくは、一篇詩中の人物のように思はれるのである。

▲山は高からざるも好く秀に、水は深からざるも好く清かなり。地は狹けれども平かに、林は小なれども茂り、松竹翠を交へ、猿鶴遊び樂しみ、その風光の絕佳なる恰かも塵の浮世の外のようなと

ころに、徐ろに長嘯し、その大才と學識とを空しく胸中に藏めて、毫も聞達を好まず、苟くも生命を亂世に全ふして居る孔明の奥ゆかしさ。これが既に一編の詩史を讀むかの心地せらるゝところである。

▲然るに玄德の三顧に遇ひ、「草堂春睡足、窓外日遲々」の句を置き崖みに、意を飜へして遂に孔明が南陽の草廬を立ち出でたところは、更らに益々詩のようである。しかも、これは孔明が、その年僅かに二十有七歳の時のことであつた。

▲天の時は、人を以つて何如ともすることが出來ぬ。されば將軍若し覇を天下に成さんとするわらば、北、天の時を以つて曹操に讓り、南は地の利を以つて孫權に讓り、將軍は人和を占め、先づ荆州を取つて家とし、後に益州を取つて都を建て給はば、鼎足の勢ひ成つて遂に中原を圖ることが出來ようとは、これ、孔明が其の南陽草廬のうちで立てた、天下三分の策であつた。しかして、玄德に伴はれて其の幕中の人となつても、日夜寢食を忘れて、その事ばかり考へて居つたのであつた。

▲孔明は自分が獻じた策を全ふせんとして、實に日もこれ足らなかつたのであつた。されば、その五丈原の秋に先立ち、一葉の命脆くも風と散つたその臨終の際まで、日夜軍務に執拳して、他を顧みるに遑なく、殆んど神を休むるの時がなかつたのであつた。その證據には、孔明が死んだ時は、その年齡が、たつた五十四歳に過ぎなかつたのであつた。

▲おゝ、二十有七年間。二十七年の間といへば、仲々の長日月のようではあるが、この二十七年の間に、孔明がしたいけの仕事を爲終せるのは、仲々容易なことでは無い。無論、尋常一樣の人には決して爲終せらるゝことでは無いのであるけれども、孔明はその忠誠の一念から、これを成遂げたのであつた。

▲天の時は、人を以つて如何ともすべからぬものは、孔明はたしかに知つて居た。玄德の初一念なる漢室を既に倒るゝに挽回することの出來ぬのは恐らく孔明と雖も知つて居たであらう。しかも、その出來得べからぬのを知りつゝも、この玄德に事へ、倒れて後に止びの意氣組で、盛んに其の胸中久しく藏して居た國家經倫の大策を實行したというのは、頗る長者の風ある、玄德の德風を敬ひ、その三顧の勞を深く心に感銘したからである。

▲魏、呉、蜀三國の爭ひ、云はゝ一種の烈しき生存競爭に相違ない。しかして支那に於ける生存競爭の激烈は、既に其の創世紀たる三皇五帝の時から始まつたのである。

▲それで、この時の生存競爭の結果、最も勢を得たものは漢人種であつた。しかして此の漢人種は江河の間に居を占めて、だん〳〵に中央政府を作り、年と〳〵に其の基礎を强固にして行つたのである。

▲それから夏、殷、周と傳はり、春秋戰國となり秦となつた。この各時代、人種の競爭は、小車の廻る如く、少しも絶えたことは無かつたのであつた。

▲支那は斯の如く、人種の競爭が盛んであつた國である。されば其の國で謂ふところの忠義の解釋は、必ずや日本の如き萬世一系の、君が代は千代に八千代の國柄とは違つて居るに相違なく、また此の忠義ということの解釋は時代に依つて夫々大いに違ふには相違ないが、苟くも忠恕であるということに二通りは無い筈である。

▲本誌前號に揭げた「岳飛」も滿身これ精忠の人であつた。云ひ換えれば忠恕の人であつた。しかして彼は時代の犧牲となつた。それで、かく彼が時代の犧牲になつたのも、全く彼が餘り忠恕であつたからなのである。云ひ換へれば、岳飛の心は一に忠恕の念にばかり滿たされ、些の餘地もなかつた。

▲そこは流石に孔明である。孔明の能く忠怒なることは誠に岳飛の如くであつたが、しかし、彼は斯く忠怒なるとゝもに、少しの餘地が、その心に在つた。

▲されば彼、孔明は、徐庶の來つて、彼が孔明を玄徳に薦めたことを告げた時、勃然として色を作して曰く、君は我を以つて祭の犧にしようとするかと。

▲この孔明の云つた『祭の犧』といふのは、蓋し深い意味のあることである。昔し、莊子を用ひようとして招くものがあつた。ところが、莊子その使の者に對して曰ひけるよう、かの犧の牛を見ずや常に錦繡を被て、芻菽を食ましむるも、幸て太廟に供へらるゝ時は、孤犢と爲らんと欲するも出來ないでは無いかと。蓋し之れは位高きに登るも祿重きを得るは可いが、しかし、事に臨んで君の爲めに一命を棄つることを云つたのである。

▲孔明は此の意味で、かゝる言を云つたのである。これが即ち、孔明の心に餘裕のあつたところで、聞達を好まなかつたといふのも、彼の心に餘裕があつたからだと云ふことが出來る。

▲要するに孔明は忠怒の人であるとゝもに、賢明の人であつた。云ひかへれば天下の大勢を見る眼の有つた人である。されば、美事、孔明は成功した。

▲これ等の點は、支那の歷史を繙く人々の心して味はゝねばならぬところであらうと思はれる。依つて、こゝに少しばかり、孔明のことを述べた序に、かく書き添へたのである。

▲尙ほ出師の表は、あまり有名であつて、何人も能く知り貫いて居ること、思はれるからして、こゝに今更蛇足をば加へぬ。

スコットの青年時代

吸江

上

水清くして澄めるツキード河畔の閑居ケルソーにありしスコットは、大學に學ばしめん爲め本意ならずもエヂンボルに呼び戻されき。さて大學に入りて希臘語、羅甸語及び論理學を學びしも非凡卓絶の才能ありとも見へず、特に希臘語の如きは後年其の學ばざりしを悔ひしと雖も、當時は少しもこれを習得するを欲せざりき。此處に在りしうち又もや其の身の健康を損ねしかば、再びケルソーの閑地に赴きしが、當時羅甸語は全く棄てゝ顧みず僅かに學びし希臘語をも打忘れ了りぬ。他の史談等の書に至つては己れの手に入るに任せて悉く之を貪讀し以て自ら樂みしといふ。

かくて千七百八十六年五年父の法律事務所に入り精勤して其業に勵みき。是れ蓋し兩親に滿足を與へんとの眞情よりなせしものなりと雖も、又勤勉業に力めさせば己れの耀讀せんと欲する書を賺ふの資に窮せるが爲めなりしは疑ふべからず、されば傳奇史談の書は手に入るに任せて耽讀し、シエークスピヤ、ミルトンの作などを誦せしも、特に好んで讀みしはスペンサル其の他ボッカッチオ（伊太利の作家）、フルワサアー（佛國の史家）などの書なりき。彼れは固より乾燥無味なる法律事務には些の興味をも有せざりしことなれば、終日事務所の一偶に蟄居して些事に神身を勞するをは堪へ得ざる所なりき。當時休息の時とては勿論食事の暇さへなく、日々百二十余片の寫字に忙殺されし彼れは、身此處にあるも心は遠く靈妙なる自然の風光に遊びて、或は鬱蒼たるメルトウンの森林の中に、或は又廢廢したるエルシルダウンの舊砦の周邊に逍遙の空想に耽けりしならん。實にこれ等の山川風物は一たび彼れの腦底に其印象を刻せられ、其絶大雄麗の筆頭に登されて廣く人口に膾炙する、世界の名地

とはなりぬ。而してスコット自らにありても、それ等の風光は片時も其の記憶より離ることなく終生戀綿の情を以て懐慕追想せし所なりしなり。

この頃未來の文豪スコットは身自ら一の失戀譚を演じき。彼れが変友の間に妙齢の叔女あり、彼れ深く其人を想ふて婚を結ばんことを切望せしも其女の家には多少の資産を有せしを以て、父は一法學生たるスコットに其女を嫁するを肯せざりしかば遂に彼れの希望は達することを得ずして已みぬ此の叔女は富有にして相當の身分を有する一紳士に嫁ぎしも、彼の女がスコットの胸中に與へたりし感銘は極めて切にして其後年の傑作に表はれたる温柔優雅感すべく敬すべき女主人公の俤は疑もなくこの當時の意中の人のそれを寫し出せしものなりしなり。かくて彼れが父の事務所に入りし翌年、血管破裂の症に罹かゝりて病床に靜養しぬ。其間數ケ月は他事に妨げらるゝことなくして已が好める稗史、傳奇に耽けることを得き。彼れは將

子などを以て軍兵に擬し敵味方相對するの狀を示し、奮戰の狀、包圍の樣などを想像し、又は室内に鏡面を懸けて近傍の牧場原野を映して其處に兩軍交戰の光景などを心に描きて病痾の苦も爲めに忘るゝばかりなりき。この頃彼れは友人の家に於て偶ゝ蘇國の田園詩人ロバルト、バルンスと出遇ひぬ。バルンスはスコットより長ずること正に十八歳、この時スコットに語るに、『足下は兎に角人たるべし』との辭を以てしぬ。意深くして人を勵ますに足るべき此の平民詩人の警句は如何に後年の文豪の耳底に響きしか。

下

千七百九十年スコット十九歳の頃己れの好める所ならざりしも辯護士たらんと決心して、千七百九十二年の七月には蘇國裁判所の辯護士として法庭に出づるの資格を得ぬ。人々の羨望する此法髪法服も彼れに取りては空なる外觀を裝ふ者たるに過ぎざりき。是より先き彼れは既に多くの奇書、古

貨叉は昔時の武器等種々の珍品を蒐集して之を所持せしが、其の公職に就きてより未だ三月を經ざるに古の歌謠の殘篇を求めんとてボルダー地方の山村を探ねしが如きは明かに公務に熱心ならざりしを證するに足るべし。

スコットが文壇に入りし初歩は、獨逸の詩人ビューゲルの "Lenore" を繙譯せしにあり。この頃蘇國裁判所の法官等は公務の閑散なるまゝに獨逸語の研究流行し、スコットも其等青年法官の群に入りてその研究を力めし中『レノレ』の謄本を得て一夜夕食の後其繙譯の筆を起しぬ。こは千七百九十六年の秋に至りて同じくビユールゲルの著『ジ、ワイルド、ハンツマン』の繙譯と共に公にせられたり。かくてスコットは間もなくエヂンボルなるエスク河畔のラッスエードに小屋を構へ、此處にシャアロット、カアポンテエアと呼ばれたる佛國生れの處女を其新婦として迎へぬ。法律家にして詩人たる彼は又エヂンボル輕騎隊の軍需官として戎衣に

アボツスフオードなるスコットの居宅

其の身を裝ふことゝなりしかば、文筆に心を勞するの側、軍陣の狀態に就て詳細を究むることを得き。身自ら猛り狂ふ軍馬の列に入りて、或は鳴り渡る喇叭の聲に耳を澄し或は劍槍の閃々たるを見、時に勇ましき突喚の叫びに心躍りし當年のスコットの胸中には尙武の氣の焔々たりしものありしなるべし。千七百九十九年彼れはセルカルク州の郡官に轉任し『エットリック林』と歌はるゝチヰード河畔のアセスチールなる靜地に居を定めぬ。當時彼れは三百磅の年俸と若干の妻の資產とありしかば多少の餘裕も漸く生じて其好める文筆の業に耽るとの閑をも得、此處に彼れは殆んど八年の歲月を送りぬ。其の棲家は狗骨木の垣を以て圍まれたる古風なる囿園の中に在りて、河岸の堤防上に位置し近傍四圍の眺望愛すべきものありき。彼れこの時既に自作の詩篇を發表し又た幾分の自作を含める『ボルダー歌曲』をも公にし文壇塲裡に稍〻其聲名を博しぬ。

アセスチールに於けるスコットは朝は五時に起き出でて寒冷の候には先づ自ら暖爐を焚き、裝を整へて其愛馬を訪ひぬ。頓て六時には獵衣又は運動服を着したる儘机に向つて筆を執り其日の業に懸り、九時十時の頃に朝食の準備整ふ迄此處に其愛犬と共にありき。食後再び筆を執り十二時に至つて始めて其日の筆を收め、其より獵犬を伴ひて馬上の逍遙に數時を過ごし或は魚叉を携へてチヰード河岸に鮭を捕へ抔して遊技に其日を暮らしぬ。

アセスチールにありしとき有名なる"The Lay of the Last Minstrel"を完成して千八百五年の一月彼れは之を世に發表して史詩の作家として文壇に嶄然頭角を顯はしぬ。同八年 Marmion 出で次で同十年 The Lady of the Lake（『湖上の佳人』）出づ共に史詩の名作なり。千八百八年には凡て十八卷よりなれる『ドライデンの傳及著作』を著はして散文に於ける彼れの技量を示しぬ。該著は三年の苦心を經て成りしものなりといふ。

プラトー物語

森　ちつか

プラトー物語の由來――正夢物語――好い世柄――善良の生徒――慕はしき教師――教師の夢――自鳥は生徒――正義の生育――正義を慕ふ少年――ソクラテス先生――正義は心のうち――プロミシアスとエピムシアス――エピムシアスの輕忽――智惠と火――內心の智惠――ジュピターの賜物

▲はしがき

これは決して新しく發行された書籍では無いが、アメリカ合衆國はボストンで發行された書籍に『プラトー物語』（"Stories Frome Plato"）といふのがある。編者はマリー・イーバートといふ女性で、主として彼の國の幼稚園の生徒等に古文の趣味を味はせる爲めに編まれたものであつた。が、そのうちには興味津々として仲々に捨てがたいところがある。それでわが會員諸子の爲めに、その中の最も興味ある二三節を譯出してお目にかけることにしたのである。

PLATO

▲正夢物語

その往時、或るところに、誠に學校へ行くことが大好きな子供がありました。その頃は世柄が大層好く、この世の中の氣候もまことに宜しかつたのですから、それも其の筈で有つたでしようが、分けても此の子は、大層宜しい家庭で生ひ育つたので御座いました。

それで、此の子供が住つて居りました市街の狀況はと申しますると、其處や彼處に、光まばゆい程いろ〳〵名高い人の像が立つて居り、水清く山秀で空氣は至つて清潔で御座いましたから、學校へ行く生徒も敎師も、主と戸外で散歩をしたり、談話をしたりして居りました。かく敎師も生徒も戸外に打ち群れて居りますると、盛りの春も斯くやとばかり、日暖かに風薫り、美しき海や山が四方に眺めらるゝのでありました。

この子供が先生と仰いで居りましたのは、唯つた二人の敎師で、それは頗る賢明の聞達のある、何時も自分の周圍に大勢の生徒を集めて居ることの好きな、英い敎師なのでありました。が、不思議なことには此の敎師、別段に之れぞと云つて生徒に敎ゆることも無いので、唯だ時々、いろ〳〵な疑問を出しては、生徒に凝乎と、それを考へ込ませるばかりなのでありました。けれどもこの敎師は面白くて、好い先生だと云つては、大勢の生徒が、皆な馴いて居るのでありました。

この敎師が、或る時、恁ういふ夢を見ました。その夢といふのは是非とも皆さんがお聞きになつて好いほどの價値のある夢でした。

その夢といふのは、其の敎師の牀の下へ美しい

白鳥が入つたといふ、誠に無邪氣なものでありました。ところで此の白鳥は、未だ至つて小さく羽毛も生べて居ないほどの生れて間の無いのでありましたが、敎師は好く看護つてやり大事に育てたのでありました。

敎師の丹精、その効有つてか、この白鳥には、頓て程なく羽翼が生へたと思ふうちに、一尺、二尺と、漸々に飛べるようになり、その後間もなく如何にも嬉しげに羽ばたきしながら、妙じき聲音に歌ひつゝ舞ひつゝ、虚空遙かに飛んで行つたのでありました。

これだけが、この敎師の夢物語であります。けれども、この敎師は、彼の學校好きな好き生徒は正しく此の白鳥が生れて變つたものでわつて、此の生徒が戸外で、歌ひつゝ走りつゝする有樣は、確かに彼の白鳥を其の儘であると、此のように何時も口癖のように申して居りましたとさ。

▲正義の生育

むかし〳〵或る處に、何らかして正義の人になりたい〳〵と云つて、切りに口癖のように云つて居る少年がありました。

この少年は、あまり正義の戀しさに、夜も碌々安眠むことさへも出來なかつたのでありました。そこで、少年は深夜を物ともせず、その友の某を訪づれました。

すると此の、時ならぬ折の友の訪問をば、何事の起つたのかと、周章はね起き、自分の居室へ案内して、扨て、

『ヒポクラテス（少年の名）よ。何事が起こつたのか』

と尋ねました。すると少年の申しますのに、

『私は正義の人になりたくて〳〵何うも實に堪らないので、その事ばかり考へ込む爲か、何うしても今夜は眠むられない。それで、何んでも此の頃、この市へ好い先生が來て居らるゝをうけたまはるから、君に案内して貰つて、その先生を訪づれよ

うと思つて來たのさ』

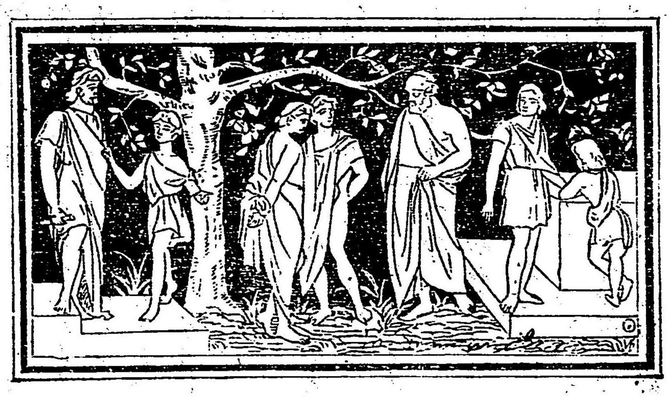
『うむ、宜しい。その先生を訪問するのも宜いが、この深更では何うもならんな。え、君、未だ夜明けには大分間があるぞ。』

と、友は一旦、申しは致しましたものゝ、唯々正義の人になりたさの一念ばかりで、折角夜を犯して來た友の心を無にするでもないと思ひ返へし、

『が、しかし、折角、君も來たんだから、兎も角も出かけよう』

と、早速寐衣を着かへて、ピボクラテスと一緒に出かけ、彼の先生を訪れました。

この先生は、その名前をソクラテス（Socrates）と呼ばるゝ老先生なのでありまして、ピボクラテス



が物語る一部始終を聞かるゝと直ぐにこのように云はれました。

『ピボクラテスよ。お前は、何人でも正義の人になれると思ふのであるか。

私は恁う思ふぞ。何人の心のうちにも屹度正義の心がある。けれども世の人が充分に正義の人になることの出來るまでは、その心が、唯だ心の裡に潜んで居るばかりである。正義の心は決して、人の外面から見えるものではないのであるから』

と此のように云はれ、扨て次きのような話をされたのでありまず。

＊　＊　＊　＊　＊

これは、ずつと古い昔時の話であるが、この世界に男も無く女も無く即ち有りとある人間が住んで居らずに、唯だ神樣ばかりがオリムプの山（Mount Olympus）に住んで居られた時代があつた。けれども、時去り時來り、遂に此の世に男が出來、女が出來て、頓て動物が出來たので、何時しか諸神は此の地球の中へ神隱れされて終つた。』

それで、諸神が此の世の中に、斯く新しい生類を造らせられた時、預じめ二神に命じて、其々の生類に相應しい着物を着せ、それとゝもに、それ〴〵に相應しい魂魄も入れさせられたのであつた。

さて此の事を司つた二神の一は、その名をプロミシアス（Prometheus）と呼ばれ、何事にも注意深く、何時も先きく〳〵のことばかりを考へて居らるゝから、少しも間違つたことをしない神樣であつた。（このプロミシアスといふのは『先見』といふ意味の字なのである。）

SOCRATES.

それから、今一人の神樣はエピムシアス（Epimetheus）と呼ばれ、至つて何事にも不注意な神樣であつて、此の神樣のすることは、いつも〳〵間違ひだらけなので、その爲めに失敗ばかりでは、ついしか其の間違ひに氣の付かぬといふ、誠に困つた神樣なのであつた。

プロミシアス及びエピムシアスの二神は諸神の命を受けて、いよ〳〵その仕事に取りかゝつたが、斯く仕事に取りかゝるに先立ち、エピムシアスはプロミシアスに恁う云つた。

『先づ私が、人間と動物に着物と心とを、それ〴〵分けて遣るから、君は、私が旨く分けて遣つたか何うかを後から見分けて呉れ』

此のように申して、エピムシアスは仕事に取りかゝり、人間や動物に、それ〳〵着物と心とを分け與へたは好かつたが、例の至つて輕忽しい神樣であるからして、犬に毛を遣り、速く走ることの出來る力を遣つたまでは好かつたが、つい肝心の話をすることの出來る力を遣るのを忘れて終ふた。龜に甲を遣つたり、事に鈍くとも、飽まで我慢の出來る力を遣つたりしたまでは好かつたが、肝心の木へ上ることの出來る力を遣らなかつた。』

扨て此のように、いろ〳〵輕忽しいことはありすから、兎にも角にも、種々さま〴〵なものに、それ〴〵のものを遣つた。否、總べてのものを與へ盡くして終つたが、扨て肝心な人間に遣るものが一つも手許に無くなつた。

素より思慮の深かろう筈なきエピムシアス、何と爲んかたもなく、人間の方はそのまゝにして、扨て、プロミシアスに見分を乞ふた。

一々見分し終つたプロミシアスは、實に『アッ』と吃驚した。といふのは他でも無い。人間ならぬ他の動物はそれ〴〵立派な賜物を得たのにも關はらず、一人人間ばかりは、何の賜物もなくて、全く裸体のまゝで、寢床も無ければ、その身を保護すべき武器も無いといふ哀れな有樣。これは、まあ、何としたことぞ！　何とした輕忽しいことではあるぞ!!

かく、呆れに呆れてプロミシアスが憐れむべき人間を打ち見戍つて居るうちに、人間その他の生類が、この世の中へ生れて來べき夜明がたは、遠慮もなく、追々近づいて來るのであつた。

いかに思慮深きプロミシアスと雖も、これを如何とも致方が無い。さりとて、此のまゝにして置いたことならば、人間、畢竟餓へて死ぬには、きまつて居る。

そこで如何とも思慮に餘つた、プロミシアスは、諸神の前に行き、右の趣を逐一物語り、何うしたならば好からうかと、このような相談をかけに出

かけて行つた。

すると、こゝにヴアルカン（Vulcan）と呼ばれた鍊鐵家の、跛の神樣があつたが、この神樣の店で、知惠の神樣のミネルヴア（Minerva）が、切りと槍だの、その他いろ〳〵のものを造へて居るのを見たので、「うむ、成る程」と氣の付いたプロミシアスが、密と此の火と知惠の少しばかりを盜み取つて人間に與へて遣つたといふのは、此の火と知惠とさへあれば、人間は何のようにしても生きて居られると思つたからであつた。

かような次第で、人間は知惠といふものを得、かゝる知惠あるが爲めに、この人間は飢ゆることなく凍えることなく、野獸の害をも拒ぐことが出來て、かくて心易くも世を經ることが出來るようになつたのである。

が、知惠のうちでも、一層高い、即ち相互に慶し合ふといふ知惠は、未だプロミシアスが人間に與へなかつたので。この知惠は、諸神のうちでも最も英い保護神ジユピター（Jupiter）神の手に握られて居るのであつた。

ところで、此ジユピター神は、至つて恐ろしい猛々しい神であつたので、プロミシアスは要害堅固のジユピターの許へ得行かなかつた。』

その上、先きに神の國の火を盜んで、人間に與へたゝめに、プロミシアスは、その家を訪るゝことをジユピターから禁ぜられて居るのであつた。誠にプロミシアスは神の國の火を盜んで、人間に

興へたが爲めに、人間は神樣のようになつた。これをばジユピターは好まなかつた。しかも日を經るに從つて、人間に對するジユピターの怒りが甚だしくなつた。

そこで、他の諸神は止むを得ずして、遙々と再び地球の表面に立ち出で、人間に火の用ひ方を敎ゆるとゝもに、人間をして神祠を作らしめ、神像を作らしめ、ジユピターを慰むる爲めに、香を焚いて神を拜することを敎へたのであつた。

斯くて漸く日を經るにつれ、人間の知惠は次第に發達し、何時しか話しかたを覺え、文字を覺えて、扨て物語なぞをもゝのするようになつたのであつた。それからは人間は自分の住むべき小舍を作る。次第に大きな家を作る。と、先づ云ふようになつて、揚句の果てには廣大も無い家をば作るようになつた。それからは靴も作れば寢床も作る、料理することも、裁縫することも出來るようになつた。

が、その頃は、人間、この地球の上に至つて粗に住つて居た故に、各自に交通することも無く、至つて物淋しく暮して居つた。されば此の當時一つの都會も無かつた。が、人間は彼の火を飽くまで保存して居つた故に、これが助けとなつて、人間はいろ〳〵と知惠を增したのであつた。が、しかし、これは唯だ外形上の知惠に止つて居つて、內面には及ばさなかつたので、未だ人間が次第に榮え行くといふ譯には行かなかつた。

されば人間が一團となつて生活するには何うしたら好いのか、他の動物と異つた生活をするとは何のようなことであるか、それ等のことをば未だ知らなかつたのであつた。

それやがこれやが源因となつて、人間は次第に團結を形作り、且つ子孫永遠の策を講じ、遂に都會を作るようになつた。ところで、かく都會を作り、人間が一團を作つて住むようになつてからも人間は互に害し合つた。そを何故となれば、人間

未だ內心の知惠を得なかつたからで。されば人間は互に氣隨、氣まゝで、他人と自家との見さかいさへも無くて、互に蹴合ふやら、殺し合ふやら、それは〳〵野蠻極まるものであつた。

かゝる人間の淺間しい有樣をば、遙かにオリムプの山の上から見そなはせられたるジユピターは

『あはれ、これが余の爲めに殿堂を作つて呉れた人間どもなるか、余の前に香をさゝげ、唱歌する人間どもの行爲なるか、神をば讃めたゝふる人間どもの爲すべきことか。』

と、いとど物のあはれを催された餘り、早速ジユピターは人間の心のうちの知惠袋を開いて遣りたいと思し立たゝせたことであつた。

JUPITER.

そこでジユピター(Jupiter)はエピムシアスを呼び出し、

『これは「慈愛の心」である。これをば人間に遣はすが好い。これを遣はしさへするならば、人間は、かゝる野蠻なることを致すまじ』

とて、此の「慈愛の心」をエピムシアスに渡された。

然るところエピムシアス問ひけるよう、

『これをは、總べての人間に殘る隈なく渡しまするか――但しは、人間を見拔き、選んだる上、選みし人間にのみ渡しまするか。』

『否とよ。ありと有る人間に、殘る隈なく渡すべし。但し、この慈愛の心をば正しく人間の胸に止むべし。これをば人間の心の一部とし、血とと

もに心のうちに流れしめよ。人間の眼に付くように留め置け。』

と、このように云ひ渡し

『この心さへ人間にあるならば……あはれ、愛と慈悲――これをは我は正義の心と呼ぶであらうぞ』

と、獨言して、更にエピムシアスに向ひ

『人間をして、その口に此の正義を語る如く、そを行にも表はさせよ。これ我の名を以て、嚴かに命ずるものなり』

と、このように云ひ渡したのであつた。

斯く命令を受けたエピムシアスは、この「正義の心」をジユピターの手より受け取るが否、それ〴〵人間の心へ正しく此の心を打ち込んだのであつた。されば、この正義の心は、人間の肉体の一部のようになつて、この心の無い人間は、鳥や獸と同じように云はれるやうになつたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

以上はソクラテスがヒポクラテスに物語つた、『正義の生育』の始終であるが、ソクラテスは、尙ほも語を繼いで

『されば、正義の人は、常に正しき人に愁からぬのである。されば、その子を正しき人になさんと欲する母あらば、先づ乳母も、敎師も、父も正しき人で無ければならぬことを記臆して居らねばならぬ。かくて、相助けて其の子供を正しき人にせねばならぬ。されば、また、好からぬ人間のあらんには、その人間を正義に導く爲め、これを罰せねばならぬのである。

扨て、卿等は、この正義の心は、人間の心の內に在るものと考へらるゝか、但しは心の外に在るものと考へらるゝか。扨てまた、ヒポクラテスよ卿は、果して卿の正義の人たることを確かめ得しや如何に。

と、このように物語られましたとさ。

筆者云ふ。『正義の生育』の話は、讀まば讀

むほど益〻深く味はふべきところがあるのである。されば諸子、筆者の不文を叱し給はず、深く此の文の意のあるところを味はひ給はゞ必ず修身の一助となるであらうと思はれる。

『プラトー物語』のうちには、またいろ〳〵面白い話もあるが、餘り長くてはと、折を見て揭げることにした。それから「ジユピターが正義の心をエピムシアスに授くる」ところは、一頁大の木版にして此の號に挿んであるから此の話を讀み終つて、彼の書を見られたならば、興味も定めて一層深からうと思ふのである。

寄贈書目

▲横井博士穀類の話（農業叢書第二、價廿五錢）東京神田　富山房
▲大鳥居弃三氏人類界之現象（價壹圓廿錢）東京神田　光風館
▲敬天牧童瓜の蔓（詩集價卅錢）東京小石川　美育社
▲早稻田大學附屬圖書館藏書目錄（和漢の部六十五錢、洋書の部未詳）早稻田大學　圖書館

蟲籠

そんやう生

（一）千代ちやん

垂髮にリボン飜めかせて歸り來れるは千代ちやむにお友達のふーちやむ也。八つに七つ。

『やあ姉さむが歸つたー』縋りついてにつこり。千代ちやむより四つ年下の弟、義雄さむといふの。』

『母樣お菓子頂戴な。』

生憎に唯た二つしか殘れるがなし。頭の黑い鼠や漁たるらし。

『是きりないよ。』母樣の御言葉。

『さう？』ちよと頸をかしげて、

『いゝわ、それだけで』紙包におし頂いてまゝ事の室に走れり。

どうするだらうと思へるわれは、そと襖の陰にたてり。

カステーラの一つを弟に與へて、他の一つを二分して、大きい方をばふーちやむに與へたり。

何とはなく我れ涙こぼれつ、つと入りて、

『なぜ義雄に小さいのを與らないの？』

『でも、でも義雄さむは小さい坊ちやんだもの！』

＊　＊　＊　＊

神は決して弱肉强食を人に教しへ給はざりき。

前英國首相 ソオルスベリー侯

法學士 片柳生

今年七十三歳——五十年の政治家生涯——圓滿なる人物——學校生活——世界漫遊——下院の代議士——清廉の節——結婚——駁論好き——外務大臣——四回の總理大臣

▲Lord Salisbury no more!

最後まで生き殘つたヴイクトリア朝の大政治家、英國前首相ソオルスベリー侯も今年七十三歳の齡を以つて遂に歴史の人、過去の人と爲つて終つたのである。このソオルスベリー侯の逝去とゝもに、英國史中にても頗る光榮ありしヴイクトリア朝も、今や殆んど全く歴史の時代、過去時代となつたのである。

▲侯の政治家生涯は、殆んど五十年の久しきに亘

ソオルスベリー侯

つたのであつて、その間下院（衆議院）に在ること十五年、上院（貴族院）にあること三十四年で、この間、若しくは此の他に、英國首相たり若しくは重要の内閣員たることが前後二十年であつた。しかして侯の人物たる誠に圓滿なところがあつた。

▲その人物の圓滿であつた如く、誠に圓滿に政治的生涯、勤勞多き政治的生涯を退き、各國民の熱心なる稱讃を收めて、その田園に隱退したのは實に昨年のことであつた。

▲ソオルスベリー侯は名をロバート・アーサー・トールボット・ガスコインシールと呼ばれ、ソオルスベリー第二侯爵の第二子であつて、わが天保元年、即ち千八百三十年二月三日、英國はハットフオールドに生れたのである。

▲侯が學生生活をした學校は何のようなところか

と云へば、有名なるイートンの中學とオックスフオードの大學であつて、此の大學を卒業して法學博士の學位を得たのは其の二十一歳の折であつた

▲大學を卒業すると間もなく、世界漫遊の途に上り、二三年間を此の世界漫遊に費し、ニウジーランドへまでも足を向けたとのことである。

▲學校生活が終へると間もなき世界漫遊、この世界漫遊のうち、青春の血に滿ち〳〵たるソオルスベリー侯は、如何なる觀察を成し遂げ得たことであらうか。この頃では、わが國の貴族や富豪の人々のうちでも、可愛い子に旅をさせる格で、學校生活が濟むと直ぐに、歐洲漫遊の途に其の子を上らせるものもあるようであるが、これは誠に結構なことである。即ち學校では學理を學び、遊行のうちには、それを實地に研究する。この二樣の研究を經なければ、何うして世間の役に立つことの出來ようぞ、一個の青年の心を鍛へ上るとが出來ようぞ。ソオルスベリー侯も此の意味で、世界漫遊の途に上つたのであつた。

▲扨て此の世界漫遊を終つた後、わが嘉永六年、千八百五十七年、侯の年はじめて二十四歳のとき保守黨から選まれて代議士の候補者となり、遂に選まれて初めて下院の議員となつたのである。此の代議士に選まれた翌年ジョン・ラッセル卿のオックス・フオード大學案に反對して巧みな雄辯の演舌をした。これがソオルスベリー侯の處女演舌であつたが、此の演舌は、大いに議場の注意を惹き其の後兩三年にして有名な議員のうちに數へらるゝようになつたのである。

▲この當時、貴族とは云ふものゝ、侯は非常の貧窮に陷つて居たのであつた。されば此の頃の侯の有樣は、千難萬苦、殆んど胃さいるは莫しといふ有樣であつたが、その心固く清廉の節を守り、能く窮苦を凌ぎ、その名を濟す如き行は敢てしなかつたのであつた。

▲千八百五十七年に侯は妻帶をした。その夫人と

いふのは、サー・エドワード・ホルト・オールダーソンといふ人の娘で、その名をジョルヂヤ、カロリンと呼ばるゝ才徳ともに名高い淑女なのであつた。

▲この當時から、侯は啻に政治界に活動したばかりで無く、新聞雜誌上で其の椽大の筆を振つて居たのである、が其の書き振は如何にも過激なものであつて、その駁論の如きは、語氣鋭く、嚴責假すところが無かつたと云ふことであつた。

▲文久元年、千八百六十年には、大いに其の辯を揮つて、時の大藏大臣グラツトストーン氏に對し得意とするところの辯難抗撃を試みたことであつたが、その論鋒はいかにも鋭く、且つ、その一語々々に針を含み、聞くものをして殆んど耳を蔽はせたといふことである。

▲が、一揚一抑の際、罵詈が漸く熾んになつて侮辱に渉つた爲め、遂に議場から咎められ、止むを得ずして議場に於いてグラットストーン氏に鳴謝の辭を述べたとのことである。

獨逸親王殿下

本誌第四號『世界日記』參照

▲その後、次第に老成して着實の政治家となつたといふことであるが、その緋緞好きの僻は遂に止まなかつたといふことである。

▲前侯爵の後を嗣ぎ、第三世のソルスベリーとなつたのは千八百六十五年、即ち我が慶應元年のことであつて、この時、侯、年正に三十六歳の分別盛りであつた。

▲かく侯爵の後を嗣ぐとともに、時の内閣（ピーコンスフヰールド侯の内閣）に入つて、印度事務

官の職に就いた。これが侯の官途に列した初めである。

▲千八百六十八年、わが明治元年、ピーコンスフヰールド侯の内閣破れ、グラットストーン氏代つて政治を見るようになつて、侯も亦た其の職を辭したが、千八百七十四年（明治七年）にピーコンスフヰールド侯が内閣を組織するようになつて、再び前の職に就いたのであつた。

▲侯が榮轉して外務大臣になつたのは千八百七十八年であつたが、侯が斯く外務大臣に榮轉するまでは、その名が甚だ著はれなかつた。がこの榮轉に依つて、侯の名聲頓に揚つて保守黨中第一流の人物と目さるゝようになつたのである。

▲侯が總理大臣と爲つたのは千八百八十五年、即ち我が明治十八年のことであつて、此の時英國自由黨に代つて、侯は保守黨を率ひて、ヴイクトリア女皇の命ずるまゝ臺閣に上り内閣を組織し、且つ外務大臣をも兼ねたのであつた。

▲これを初めに、侯は其の生涯を通じて總理大臣となつたことが四回あつた。が、その他に、侯は推選されてオックスフオード大學院とクライストチヤーチ大學の總長となつた。

▲五十餘年のソルスベリー侯の政治生涯。詳しく記せば仲々面白いことも多いのである。がこの度は、この邊にして擱筆する。

▲尙は最後に、早稲田大學出版にかゝる『最近英國政治家演説集』（Recent Speeches of English Statesmen）といふ小英語讀本がある。これにはソルスベリー侯の演説が載せられてある。英語を解する諸子は一讀さるゝが好からう。

ソルスベリー侯

ジャクソン將軍

文學士　大平漁民

ジャクソンの生ひ立ち——幼にして父を亡す——叔母と叔父——勉強と熱心——不健康——學校好き——メキシコ戰爭——奴隷教育——北米人の標本——ストーンウオール』ジャクソンが——ストーンウオールの綽名

本誌の卷頭に掲げたのはストーンウオール(Stonewall)と綽名されたジャクソン將軍馬上の銅像である。

事に敏に、意鋭く、心常に活動して居つたトーマス・ジェー・ジャクソン(Thomas J. Jackson)は千八百二十四年の正月二十四日に生れて千八百六十三年の五月十日に死んだのであるが、この四十餘年の生涯のうち、彼は古今に秀でた名將として、啻に其の本國北米合衆國に於いてのみならず、偏ねく世界に知られたのであつた。

Thomas J. Jackson—"Stonewall"

然してアメリカの內亂時代、即ち南北戰爭時代の歷史をば最も注意して讀んだ人は、必ずや此の戰爭に於いて惜しむべき名將、嘗てあられた北米の名將中の名將たる『ストーンウオール』ジャクソンが此の戰に戰沒したことをば最も愛惜することであらうと思はれる、この內亂は

彼の有名なる大統領アブラハム・リンコルン(Abraham Lincoln)の執政時代に起つたことであつて、彼ジャクソンシ將軍の名はリンコルンの名と共に偏ねく世に知らるゝようになつたのであつた。この有名なるジャクソン將軍は、果して如何に生ひ立つたことであらうか。

彼の家は決して貧しき家では無かつた。けれども次弟に貧しき境遇になつたのである。それを何故かといふに、彼の父は、少しばかりの財產を持つて居た可成才腕のある辯護士を職業としてものであつたが、「友人の爲めに其の多くもあらぬ財產を盡く失ふて終つたのであつた。かくして彼は零落の淵に沈みつゝ、ジャクソンの年はじめて三歲の時、病死して終つたのである。

茲でジャクソン夫人、即ちトーマス・ジャクソンの母は、その身一つを種々の勞力の籠性にして、或ひは敎師に、裁縫師に其の身を下し、かくして僅かに其の日を送り、その子を敎養して行つたのであつた。

その後ジャクソン夫人は、再び夫を迎へた。けれども、その貧困の狀は、依然として續いて行くのであつた。そこで萬止を得ず、家族のものは一時、散々ばらゝの有樣となつて、トーマスはその叔母の許に世話になることになつた、けれどもトーマスは、甚だ此の叔母を好まなかつたので遂に或る夜、彼は單身この叔母の家を脫け出で、僅か八歲の年若な身で十八マイルの長程を徒歩で旅行し、既に先頃より彼の兄が世話になつて居る叔父なる農家を訪れたのである。

ところで、此の叔父といふ人は、至つて勉強で氣根のあり且つ熱心な、その上至つて慈悲の心に富める人であつたのみならず、兼ねゝ〳〵此の甥のトーマスを酷く可愛がつて居つたのであるから、啻にトーマスを兄と共に其の家へ受け入れたのみならず、その財政豐かならぬうちにも學校へ遣るそれから、乘馬の法まで敎へて置いたのである。

學校に於けるトーマスの成績は如何といふに、決して頴才の方では無かつたが、至つて勉強の方であつて、兄とは違ひ、至つて學校が好きであつた。

そこで、トーマスの健康の工合は如何であるかといふに、決して丈夫ではなかつた。しかも、その父の肺病を受けついで居るので、度々病氣になることがあつた。けれども、彼は一意熱心に勉強した。實に彼は何事に對しても、固執いほど熱心

に、一轍な性質を保つて居たのであつた。

彼は叔父の家の都合上、一時學校を廢めて、農業の手傳いをすることになつた。が、何事にも熱心なるトーマスは、この叔父の農事をも熱心に手傳つた、が、それとゝもに、彼は飽まで勉學の心を斷たず、餘暇を見ては寸陰も惜み、切りに學事にいそしむのであつた。學問のうちでも、取り分け彼は好きであつたのは數學の一科であつた。

彼は十八歳にして、漸くのことウエスト、ポイント學校に入ることが出來た。けれども、兵學校在學中に、メキシコ戰爭が起つたので、彼は學校から直ぐに戰爭へ飛び出したのであつた。

此の戰爭に於いても、彼は熱心に働いた。そのうちに、此のメキシコ戰爭も濟んだので、千八百五十一年、彼は其の職を退き、レキジントンの兵學校で博物の教官となつた。

この學校で凡そ九年間、教鞭を執りつゝ、自らも出來る限り勉强した。此時代に彼は宗教の方面に其の心を傾くるようになつた。彼の一意熱心は此の方面にも働いて、彼は奴隷やその他の人々の爲めに日曜學校を設け、切りに奴隷教育のことに就いて紳士、貴婦人を遊說した。

が、この過度の勞働は、遂に彼をして稍や健康を損ぜしめた、けれども、それにも關はらず、彼は尙ほも熱心に働いて居つた。彼が、いかに此の時代に勉强であつたかは、此の一事でも分かる。即ち彼は日の暮れ近くなつて、殆んど文字の讀めぬようになるまで讀書し、扨ていよ〳〵文字の讀めぬまでに暗くなると、今度は白書讀んだところをば、心の內で繰り返へし〳〵ては自分の知識として居つたのである。

この兵學校を終つて後、彼は一個の聯隊を組織して、彼は其の隊長となつたが、此の時、彼はリーといふ將官に拔擢されて、それから漸々諸方の戰場を往來するようになつた。彼がストーンウオールと綽名さるゝようになつたのも、此の戰場に

於いてのことで、彼が如何にも堅固に其の隊伍を守つて居るので

"There is Jackson, standing like a stone wall!"

と、このように云はれた。それが原因で、彼は斯くストーンウオール(石壁)と云はるゝようになつたのであつて、彼に取つては、いかにも名譽ある綽名なのである。

彼の名高き南北戰爭に於ける、彼の勳功譚は、こゝに今書きつゞる餘白の無いのが殘念ではあるが、以上述べ來つたところで、略ぼジャクソンの人と爲りは、その万一を顯し得られたことゝ信ずるのである。

これを要するに、ジャクソンは學生時代に於いては最も從順な學生であり、鋭くは無かつたが最も熱心な勉强家であつた。それから教師としてはいかにも優しい教師であつて、且つ熱心な基督教信者であつた。而かも戰場に於いては、最も軍略に富める勇氣ある將軍であつたのである。

されば彼は、確かに一個「成功の兒」の摸範である。熱心！專念！彼をして成功せしめたものはいかなる境遇に於いても決して屈しなかつた彼の熱心と專念とである。

此の成功兒、ストーンウオール・ジャクソン將軍の像は、ワシントン府ラフアイツト公園のうちに、この世の盡くる期まで不朽の光、北米合衆國の光りとして、人々から打ち仰がれて居るのである。この記事を讀まるゝ人々、本誌卷首の寫眞版と此の記事とを對照して讀まるゝならば、興味もまた一層深かゝらう。

哲學者の日記

笠間醉雨

自分が床を蹴つて起つと、直ぐ今日は元日であるといふことを思ひ浮んだ。もはや去歳は世代の鎖から離れて、過去の灣に沈んで了つたのである。今日は安息日だ、併し此の雨天に何が出來るだらう?。それを思ふと自分は不滿で堪らぬので我がアチックを亂歩した、そして、やがて火でも起さうと思つた。

忌々しいことにもマッチが惡くて、煙突は燻ぶる、火は作らぬ!。自分は自烈て風櫃を投り出し、そして古椅子に身を投げた。

ほんとに、何故に自分は新年の來るのを見て歡喜すべき?。彼の朝來市中に出で、喜悅溢るばかりの面もちして徘徊する所の彼等衆人は——果して自ら何故かう嬉しいのであるといふことを解してゐるだらうか。抑も彼等はこの元日の何物であるといふ事だけでも知つてゐるか、そして又新年の贈物の風習の由來をも、よく解つてゐる?。

此に至つて自分は、我が智識の衆人より卓越れてゐる?。嵐であるか、又は日光であるか。丁度今雨が降つて居る、そして自分の心も天の如く陰鬱して了つたのである。今日は安息日だ、併し此の雨天に何が出來るだらう?。それを思ふと自分は不滿で堪らぬので我がアチックを亂歩した、そして、やがて火でも起さうと思つた。

忌々しいことにもマッチが惡くて、煙突は燻ぶる、火は作らぬ!。自分は自烈て風櫃を投り出し、そして古椅子に身を投げた。

ほんとに、何故に自分は新年の來るのを見て歡喜すべき?。彼の朝來市中に出で、喜悅溢るばかりの面もちして徘徊する所の彼等衆人は——果して自ら何故かう嬉しいのであるといふことを解してゐるだらうか。抑も彼等はこの元日の何物であるといふ事だけでも知つてゐるか、そして又新年の贈物の風習の由來をも、よく解つてゐる?。

此に至つて自分は、我が智識の衆人より卓越れて

居ることを、自ら我が心に證明せうと思つて、暫し猶豫したのであつた。が、自分は自ら己れの衆人に勝れてゐることを衒はんとする虛榮の念に驅られて暫く我が鬱悶の情を退けて、試に我が智識の及ぶだけの考證を悉く調つてみやう。

昔し羅馬人は一年を十月に分けてゐた。がヌマ、ポムピリュスといふ人始めてジャヌアリー(一月)とフェブラリー(二月)とを加へた。ジャヌアリーの名はジャヌスといふ平和を守る神から取つたので、蓋しこれ一月の月は彼等が之をジャヌスに捧げるといふ理由なのである。で、新年の來たときには、彼等は勉めて目出度き吉兆を付けやうと思つて、即ち隣人同志の間に、互に相訪れて其の多福を祈つて、そして又た互に新年の贈物を取り交はすやうになつたのである。そして又羅馬人が贈りあつた贈物はみな各寓意があつた。で、多くは乾したる無花果、波斯棗蜂房などを用ゐたが、これ即ち是歳の前途の甘美なることを覩ふたものであつた。そして又スチプスとて小さき貨幣を添へるのは、其の富を致すことを期するのであつた。

先づ茲で考證も終つて、自分は再び元の不平不快の狀にかへつた。で、自分が正さに自ら我が心に向つて叙したこの短き演説は、我が心には滿足したけれど、他人に對しては是が爲め益〻不滿足の念を增したのである。で、自分は是から朝飯に取りかゝらうとしたが、門番の妻は如何してか、今朝に限つて牛乳を忘れて持つて來ず、漬物の壺も亦た空虛であつた!若し之が他人であれば屹度怒つたであらうが、自分は平然として毫も意に介しなかつた。で、其處には唯だ堅い麭包皮の一片が殘つてゐたのを、力を入れてやう〳〵之を解してそして獨り無頓着に齧つてゐた。が、其有樣は宛然塵世の虛榮心と、そして新しき麭包を欲する慾等よりは、遙か以上に高く超脫してゐる人のやうであつた。

然れども、自分は如何してか麪包を齧むことの困難に伴れて、我が心の益々鬱結するのを感ずるのであつた。自分は曾て或る書物で、一人の英人が其の家人の茶に砂糖を添へないで持つて來たとて、非常に憤つて、自分と縊死したといふことを讀んだ。蓋し人の生涯の間には、最も些細の不如意でも、自分には一大災禍と思はれる時のあるものである。吾等の心は恰も望遠鏡のやうで、その窺看する端に從つて、目的物を或は過小に或は過大に見せしめるのである。

概していへば、我が窓外に展開する景色は、常に自分を喜ばす所のものであつた。幾千の屋根は山脈の如く連り、屋脊は縱横に交つて、復た壘々として相重さなつてゐる。そして其の間處々に高き煙突が巍然として額を攢めてゐる。是れは昨日の事であつた、是等の景色は自分の眼には恰も一面のアルプス山光のやうに映じて、そして自分はかの溪谷の間に幾多の氷河を見たいので、先づ雪暴れでもあればよいと思つたのであつた。併し今日は唯だ沒趣味の瓦と煙突とにしか見えないのだ。平生は自分をして田舍の景色を想ひ浮ばしめる鳩も、今日は唯だ屋根を後庭と誤つてゐる痴禽としか見えないのだ。淡々として雲際にたなびく炊煙は曾てヴェスヴィアス(伊太利の火山)の吐息を想はしめたのにも異つて、今日は唯だ庖厨の準備と雜巾水の不潔を想はしめる計りだ。またモントマーテーリーの古い塔を越えて遙に見える所の電信線は、宛ら一個の醜き斷頭臺が其手を巴里全市の上に延ばしてゐるやうに見えるのである。

凡て目に觸るゝものは皆な自分に不快の念を起さしめるものであつた。で、やがて自分の眼は不圖自分が室と眞向きになつてゐる一個の紳士の家に移つたのであつた。

元日の勢力は此處にも其迹著しく見られた。僕婢等は皆な其の既に受け、或は將さに受けんとする新年の贈物の價格に比例して各々その熱

心の色を現はした。自分は又た其の主人が庭を通つたのを見たが、彼も今日ばかりは止むなく慈悲の人となつた、といふように如何にも陰鬱した面もちをしてゐた。既にして訪問人は增して來る。之に次で各商店の配達人の花、紙函、又は玩具を持つて來る者引きもきれぬのである。忽ち大門の戸扉が開かれた、そこには一輛の新らしき馬車に良馬を裝けたのが、戸口の階段の前に止つてゐた是等の車馬は疑もなく、主人から其の妻に遣つた新年の贈物である。だから主婦は自らこの新裝を見やうと思つて出て來たのであつた。そして主婦は直ぐまた其の少女を連れて、二人とも全身を組糸や禽羽や天鵞絨で裹んで、再び來て此の車に乘込み、更に許多の包み物を積ませたが、蓋し是から新年の贈物を頒配するため出掛けやうとするのである。車の戸は閉ぢられ、窓は引き上げられ、車は驀然と馳せて去つた。

かやうにして世人は皆な今日互に祝詞と贈物とを交換してゐる。が、自分ばかりは與ふる所もなくまた受くる所もない。噫憐むべき孤獨！。そして又せめて此の人には一片の祝詞を捧げてもよからうと思ふ所の人さへも、曾て自分が心には映じないのであつた。

だが、願くは自分をして今、元旦の祝詞を把らしめて、そして我が脚下で大海の如く喧呼する所の群衆の中に往かしめ、そして其の中にかくれてゐる我が未知の友を一々訪問せしめよ。

最初に卿等此の市中に於ける逸民だちに。是等の人は或は死の爲め或は貧の爲めに群衆の中にあつてゆくりなく脫俗閑居の境に陷つたものである！。次に卿等薄倖なる勞働者だちに。憂悶の中に拮据困難し、そして其の日常の麪包を默つて又た伴無く食べてゐる、そして終生愛情と友情との樂みに醉ふことの出來ぬ薄倖な勞働者だち！。卿等空想家だちに。終生いづれかの極星を仰ぎ看てゐて、實際の收入を過し等閑に踏

過して觀ない所の空想家だち！

卿等其の家族を保育すべく夜業する正直な父だち！。次に卿等搖籃の邊て涙を濺いで、そして働いてゐる可憐な寡婦！次に卿等少年の人だちに。斷乎として立身處世の道を開きて、そして自ら擇んだ所と妻を率ゐて共に進むことを得るだけの廣き道を開かうと思つてゐる少年の人。次に卿等凡て患苦と戰つて勞働する、そして又献身的義勇を有つてゐる大丈夫！。

最後に、其の爵位名號に拘らず、卿等すべて善を愛し不幸を憐み、そして專ら博愛を旨とし兩手を擴げて人類を迎へる彼の寓意ある所のバイザンチュムのヴァジンの銅像の如くに渡世する人だち！。

――そこで自分は不意に喧聲と、そして嗷音の益々烈しくなるので、我が詞は遮られて了つた。で、自分は思はずあたりを視た、自分の窓下には許多の雀が群つてゐて、そして曩きに心なくも屋上に撒いておいた麪包の碎片を拾つてゐるのであつた。之を見て直ぐ自分の鬱結せる心上に一道の光明が閃いた。嚮きに自分が何に一つ與ふることがないと云つたのは全く自分の過であつた。幸にもこれで、巴里のこの邊に接む雀は新年の贈物を得たのである！。

編輯だより

▲思ひ寢の、さは夜な〳〵の枕にかよふ蟲の音も、何となく哀れを添ふる此の頃と相成申候。都も愈々秋風ふきわたりて、朝夕は袷憎からずの肌もよひ、やがては富士の裾野一帶、秋露いぶく壯觀にも接し申すべく、正に是れ青衿子が讀書の好時節とも申すべき乎。記者は網島梁川氏の『秋はおのづから春の超越也解脫也』といへるに多大の興趣を覺ゆるものに候。

▲さらでも夏は何となく懶いもの、まして今年の暑氣は格別との事、九月に入りてさへ殘暑は單衣の汗をしぼるべき程の苦腦、編輯局裡の記者の、幾分か諸子に背く處ありしもの故なきに非る也今や天高ふして金風人に快きの時、奮勵一番諸子の同情に報ひ申すべく候。

されし居るを見て思はず苦笑いたし候。夢に候ふ哉。

鐵道工夫の殺しくゝり込めゝ爲め、人氣おそろしく殺伐になりしとやら、一利一得の世の中に候ふよ。——十一日夜新庄にて——

○

八時半を期りて本合海より古口にて、三里の山道清川新道をゆられながら、白帆遠くより來りてはまた消えゆく最上の流にそひて清川迄。人跡の著は皆無なくて不氣味に過ぎ申候。

お誰をといふ笹にて編笠街道を一直線、左に羽黒の連山を仰ぎ、右に鳥海の秀峯を仰ぎ、始んと一年ぶりの故山の現影にはゝゝ笑む。鶴岡に入りしは十時過ぐる頃なりき。驛者の感は言はずもがな。唯だ去年訪れまゝらやし時はまだ此處には變らぬ主はの父上の、今は不自由なる御舌に言が名を呼び、よく來たゝと涙ながらにくりかへし玉ふ御姿、それのみにて胸が一杯に成り申候。

風そよぐ方より獨り出でゝ鳳梅寺邊を訪ひ、久時ぶりの香花手向けて懐古の涙を催し申候。始んと生涯を旅に包みし義母のおも影を今更のやうに思ひ浮べて、感慨無量去る能はざるの感に打ち有り候。『鳳梅寺墓銘』の一篇、是非其の内に筆染め申すべく候。

——七月十二日午後五時鶴岡にて——

○

鹽ざゝらちらちらと里の名殘りを今朝僅かに吉野の身頃に惜しみ、三日の船路のならずも今朝三河丸に乘る事に候。酒なき港は油を注さゝる機關の如く、船に於ても旅行者は一種の不平家に候ふ。

波

村生

○

美くしき空に候。高風に落ちては葉とながるべき朝露の、もはゝと不氣味のおもてなわたりては一面のさゞなみ。旅の若葉に置く露のきらめき、まことに絵のやうな旅に候ふ。

九時半分着淀行の直行に乘る。驛夫の聲喧びしく鉦打ち振れるに、猶ほわれ十人の滿車からのやうに落々ぎとしてヤラヤゆらすがカラ紳士もあれば、着賃ひたる荷物の改札口にはゝかりてすぐ歸國勿々なれるに油汗流かして俥を急ぐお田舍のお客さまもあり。多趣味なる此光景こそ、得がたき詩圖と言はおほすや。

さらば！　七月十日午前九時十五分上野にて

○

ゆゝの名殘りを白河の關路におしみ、今朝福島より奥羽南線に乘り換へ、○阪直峠十九の壁道を過ぎて山形驛に着車『すゝんぶんに○の○海』すゝにヤンドイッツ○』のふれ聲に眠を拂ひてだた今新庄に着き申候。戸數五万石の城下一直線の繁昌なる市街の家根

——一思ふ事なおもむや。

君、死の誘惑を抱き、若き魂の歌のむくろを擁するの時、偉人の臨終は正におくの如く静かなるべし。おゝテニスンの末期なる事はまさにおくの如く静かなりしなるべし。

偉大なる静寂よ。君、あの緑き新芽の山影に見よ。あの煙火はまだしても消えゆくべし。あの緑き港のほとりに、今ひと際、なおおくまだしても光は描くを見すや。——港は我等を護るべし、国は我等を能びん。想は洗練くべしおれん。精霊の世は悠久くもおちすとするも、而も——而も我等の愛ある国は常に我の脳面に語りつゞあるにおらずや。——友よ。別離に一杯也、されど悲むべき相聞れやも。主におる友の為めに相想ふ互の愛は、おゝ我の愛なる希望徒の前にゆらぐ灯のごとく日々相瞳びつゝあるに非ずや。嗚呼は山河遠隔しと雖すか。

君、われは人に類するわが愛の如此永久に堪ならむ者を求む。

別りしは十一時過ぐる頃に候ひき。帰舟のゆくえと聞かば、国港の夕は、一つのゆらぐ炎に酔なさを見ん候。

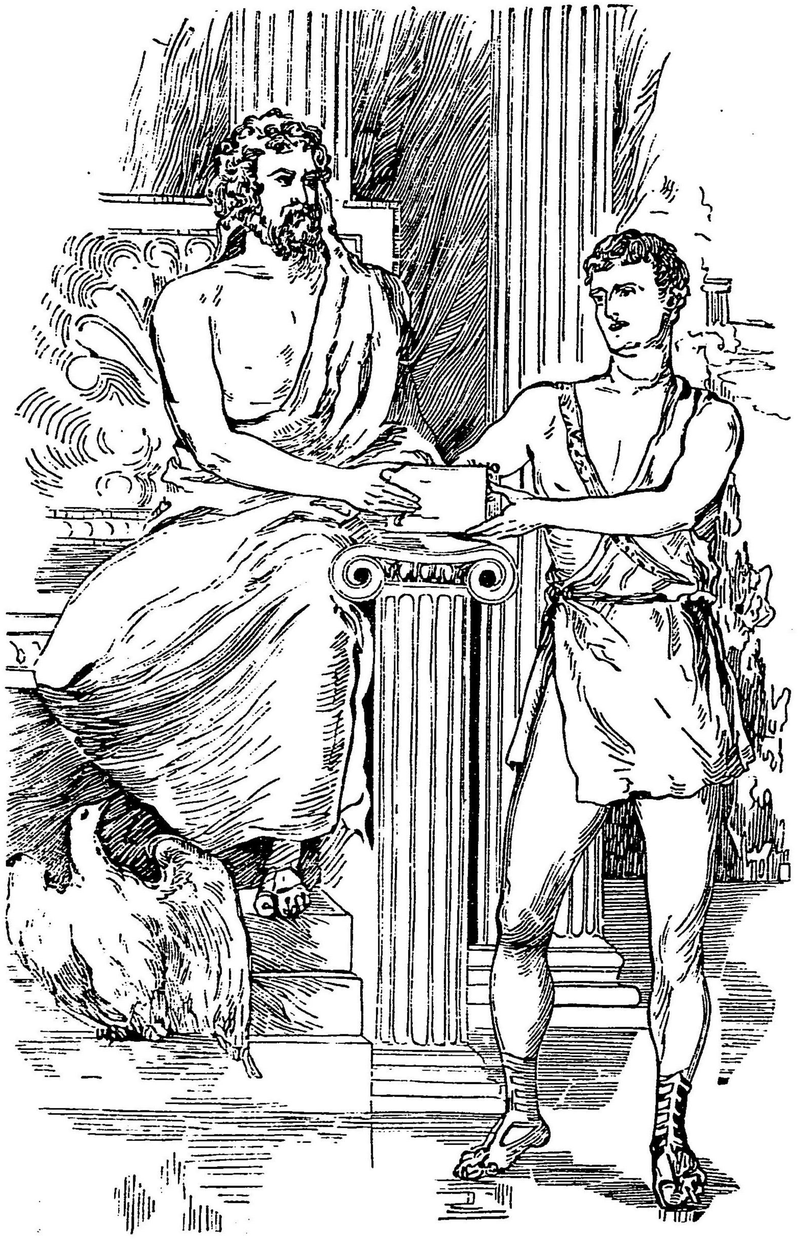
——八月十四日午後十二時国府津にて——

追伸に委り候ぶてより享や十数日にも相成申候。ゆくもの、種々なるが中に、是れも部なる友の私より一日早く聞れそもおり。ここにも人はの輪郭小さき画の何となく暗く思ひ。ですが教の友のみは、言ながらに温かく、私の手を握りくれまし候。吾宅市渋りては訪れおおらせし際のお母様、相変らずとして話じそめたる一道の因光するくも港をわたり、ながらに是れ金能の名残のまた走るとはかり。見よ暮れ初めし港の面は緑すべた国を通して紫色の巻に風ぶいと、かすかに明るきお。曲りなば、白き船はさに入らんとする港にて何やらむさゝめきわたれたら皆の上に栄多。明日は十時、明後日には事や着よ。お来の午前の間に、又逢初様の通る道に国まれ申すべく候。

一緒度見ても飽きざお故国の山川、時くがらの景、私生情なるが古情とくく候。北の方高峯の頂にはまこうなる夏の笠雪のいさゝかも見え申候。

——八月五日午后酒田港にて——

○



ジュピター神正義の心を授く

御注文の節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

新刊廣告

早稻田叢書 史學研究法

文學博士　坪井九馬三著　（挿圖數葉入）

坪井博士史學を專攻せらるゝこと多年一日の如く、現下我國に於ける斯學の重鎭として令名嘖々たるは普く人の知る處なり、本書は博士が豫て吾校史學研究者の爲に講せられたるを更に愼密なる訂正を加へられたるものにして所說斬新且正確、文章流麗且精緻固より坊間同類書中に匹儔を見ざるのみならず當來亦容易に世に出でざるべき名著たり、其內容の如き茲に贅するを須ゐず志を史學の研鑽に傾くる者爭ふて一本を座右に供ふべきなり

全壹册總洋布製
紙數五百五拾餘頁
正價金壹圓六拾錢
郵稅金拾四錢

發行所　東京牛込　早稻田大學出版部

發賣所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

再版廣告

文學博士桑木嚴翼　關山富共譯

早稲田小篇 論理學綱要

全壹冊
紙數二百餘頁
正價金四拾錢
郵稅金六錢

本原書は歐米の哲學界にあり「形式論理の發達の極度に達するものなり」との好評を博せるものにして其說を構ふること正確堅固、組織亦整然として一絲の亂るゝ所なし殊に其說明の周到明覈なる他に其比を見ず是れ譯者の本書を選ぶる所以なり論理を學はんと欲する者の爲に必讀の好著とす

發行所　東京牛込　早稲田大學出版部
發賣所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

御注文の節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

新刊廣告

ドクトル、オブフィロソフィー　渡邊龍聖　田中達共譯

早稲田小篇 倫理學綱要

全壹冊
紙數二百餘頁
正價金四拾錢
郵稅金六錢

本書の特色は種々の倫理學說を捕へて最も公平に最も平易に叙述說明したるもの原著者セス氏は現にエヂンバラ大學教授として倫理學の講座を擔任し歐米の學界に斯學の重鎭を以て目せらるゝの人、本校夙に本書を世に紹介するの益あるを思ひこれが抄譯を渡邊田中二君に囑し譯成て茲に博く江湖に頒つ、大方篤學の士就中初學者は必ず一本を座右に供して參考に資せらるべし

發行所　東京牛込　早稲田大學出版部
發賣所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

早稻田叢書

新美辭學

島村瀧太郎著述

全壹冊
正價金壹圓卅錢
郵稅金拾六錢

●再發●
●版●
●賣●

本書は全然著者の新見に成れる者文章論より美學に歸結し、以て大方の批判を得んとす、且初學者の爲には、文學の入門たるべき準備と研究の過程とを有せり、文字に志あると否とを問はず國民の座右缺くべからざるの良書なり

序

沈思精研の餘に成れる抱月君が新美辭學一篇は我が國に於ては空前の好修辭論たり、彼方の類書に比するも周到なる修辭法に兼ぬるに創新なる美辭哲學を以てしたる、證例の東西雅俗にわたりて富贍なるその例と多かるべし

逍遙

●背●皮●上●製●
●五●百●餘●頁●

發行所 東京牛込區 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

御注文の節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

新刊報告

法律叢書 最近刑法論

ブリュクセル大學刑法學教授 アドルフ、プリンス原著
京都帝國大學刑法教授 法學士 勝本勘三郎
東京控訴院判事 法學士 淺見倫太郎 共譯

全壹冊總洋布製
紙數約六百頁
正價金壹圓八拾錢
郵稅金拾六錢

法律は衣服の人體に於けるが如く人類生活の狀態に適合せざるべからず理論の高宗は事實と融和するに因て始めて光輝あり本書の原著者は歐米の刑法學者中屈指の大家として聲名宇內に轟けるの人、本書は則ち其最近の著述に係り、近代諸國の刑法典と最近科學の産出物として刑罰權の基礎を一新したる刑法の原理との融合を試みたるものにして所論適確理義明晰、現下我國に於ける刑法改正問題に關し好指南車たるべきや疑を容れず而して之が飜譯は則ち本邦斯學の重鎭たる勝本氏及夙に法曹界に令名ある淺見氏の手に成れりと云へば其實質の如何は多く語るを要せざるべし、學者幸に本書の先覩を以て人後に落つる勿れ

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

佛國文豪ヂューマ作

長田秋濤譯

（訂正三版）

小說 椿姫

全一冊洋裝頗美本三色版寫眞版數葉入

正價金八拾五錢郵稅十二錢

特製金壹圓郵稅金十四錢

近世文學界の大傑作！

現時法曹界の一問題！

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

近刊豫告!!

佛國文豪 ヴクトル、ユゴー作
紅葉山人 尾崎德太郎譯

小說 鐘樓守

全部三卷頗る美本 紙數約一千頁
三色版及コロタイプ刷插圖數葉入
紅葉秋濤兩氏最近肖像添

これ十九世紀五大傑作中の一位にある一大雄篇にして曾て歐米の文壇を震動せしめたる文豪ユゴーが心血を濺いで筆にせる史的且つ情的小說ノートル、ダーム、ド、パリーなり蓋し原著者一代の大作と認めらるゝもの今や

紅葉氏病を推して畢生の譯筆を此大作に染む

其眞價啻々するを要せず世界的大文豪が著作の如何を窺はむとする者譯者が纖美流麗の文を知らんとする者共に發行の日を待て一本を座右に供へらるべし

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

御注文の節は本誌廣告に據る旨御附記を乞ふ

新刊廣告

新編 支那語會話讀本

早稻田大學支那語講師 青柳篤恒著

總クロース製　正價金五拾錢　郵稅金四錢

全壹冊

本書は最近支那文明の根本的革命維新に變遷進化しつゝある支那語の新熟語新組織を社會に紹介せんとする著者の苦心に成れるものにして從來支那語學書の拮屈聱牙なるに似ず極て斬新に多趣味に編述せられたり苟も支那語の實地活用に志あるの士敎科書として參考書として率先座右に供へらるべし

發行所　東京牛込　早稻田大學出版部
發賣所　東京市本郷區本郷三丁目　文求堂書店

ディッケンスの活動時代

文學士 中西芙蓉

風荒き浮世の千波萬波に、もみにもまれつゝ、絶えて其の志を遂ぐべき曙光を見出し得なかつたディッケンスも、今や漸く絶望の淵より救ひ出さるべき運命に到着した。

『モーニング、クロニクル』(Morning Chronicle)の通信者として、その職務に勤勉すること二年有餘。ディッケンスは大いに其の技倆を認められ、八九十名もある通信者のうち、彼は其の最上席位を占むるをになつた。それと云ふのは、啻に彼の報道が確實であるばかりで無く、その報道が人業とも思はれぬほど敏捷であつたが爲

フアリーニヴアルル旅舘(ディッケンスの住居)

▲最初の寄稿

ディッケンスの活動時代

最初の寄稿——大活動——一週間に五ギニーの報酬——最初の出版——『人間生活の寫眞』——ディッケンスの結婚——『ピクウキック、ペーパー』——『オリーヴアー、ツキスト』——『ニックルビー』一代記——亞米利加巡遊の決心

めで。

斯く通信者として機敏な活動をして居る側、彼は『オールド、マンスリー・マガジーン』といふ雜誌に、初めて投書した一文が揭げられた。これは一千八百三十三年の十二月のことで、この時ディッケンスの喜びは非常であつて、「その眼は歡喜と誇りの爲めに打ち霞み、殆んど見えぬほどであつた」と、自ら其の當時のことを記して居た。

この第一の寄稿に引きつゞき、他の九篇の文章を同じ雜誌に投書し、その最後の文は、一千八百三十五年の二月の號に揭げられた。これ等の投書のうちには、『ボヅ』(Boz)と署名したのもあつた。これは彼の最弱年の弟オーガスタスの綽名なのである。それで、このボヅといふのは、『モーゼ』が變じて『ボーゼ』となり、これが再變して『ボヅ』となつたとのことである。

但し此の當時、この雜誌の景氣が思はしからぬのでディッケンスは、その報酬を受け取ることが出來ぬのであつた。が、間もなく彼は其の幸運に到着した。これは『モーニング、クロニクル』が更らに夕版を發行することになつたので、これを擔當して居つたジョージ、ホガースに、ディッケンスは、この當時の住所なるファーニアヴル旅店の一室から手紙を寄せ、この夕版の第一號から寄書することになつた。而して此の夕版は『イーヴニング、クロニクル』と名づけられ、この寄稿に依り、ディッケンスは其の初め一週間に五ギニーの報酬を、後には七ギニーの報酬を得るようになつた。(一ギニーは我が五圓餘)

▲最初の出版

一千八百三十六年の初め、ディッケンスはマクローンと呼ばるゝ年若き出版業者の手を經て、初めて其の文章を纏めて二卷となし、その一卷を發行し、續いて其の年の終りに他の一卷を發行したのであつた。而して此の二卷の書物の報酬としてマクローンはディッケンスに百ポンドを支拂つたのである。(一ポンドは約そ我が四圓半)。この書物は

Sketches by Boz.

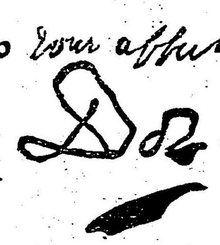
と名づけられ、『人々の日々の生活の活寫』と小書されてあつた。それで、此の書物は大いに世間の注意を惹くようになつた。著者の才氣は世間から認められるゝようになつた。

『モーニング、クロニクル』の通信者たる關係は一千八百三十六年に斷たれて終ふたが、この年の三月、彼はまた〳〵世間に注意さるべき著作に手を著くるとともに、彼が結婚すべしとの報道が新聞紙に揭げられた。

▲彼の結婚

それを何かと云ふに……

一千八百三十六年三月二十六日の『タイムス』新聞は Posthumous Papers of the Pickwick Club, edited by Boz. といふ書物の第一卷が月の三十一日を以つて出版さるべきことを報道し同じ新聞は、その數日後に、四月の二日を卜して、チャールス、ディッケンス君の、ジョージ、ホガース君の長女カザリーンと結婚せりと云ふことを報道したことで有つた。



それで、此の結婚に次いでの新婚旅行の幾日は程近きチョークと云ふ一村落で費やされ、頓がて此の新婚旅行を終て後、ディッケンスは、その跡、『ピクウイック』の稿を續ける爲めにロンドンへ歸つたのである。かくしての『ピクウイック』の第二、第三、第四、第五卷は發行され、一千八百三十六年の八月に至つて第六卷は發行された。

しかして、越えて一年、一千八百三十七年の正月、彼は其の長男を擧げ、しかして、その

ディッケンスの活動時代

居をファーニヴアルスイ、ンから、ドーチー、スツリートといふ町の小家に移したのであつた。

『ピクウイック』の世評は非常に高かゝつたが、或る事情の爲め、止むを得ず、一時その發行を中絶することゝなつた。が、此の間に『オリーヴアー、ツウイスト』(Oliver Twist) の前半を認めたのであつた。

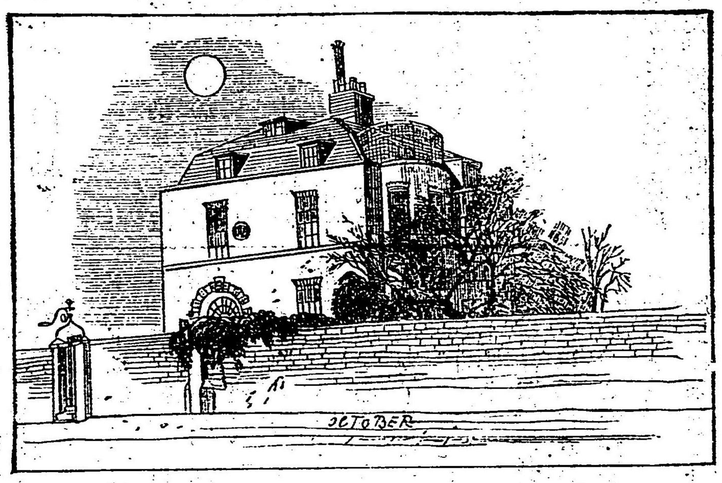
この當時デイッケンスは最も得意の時代になつたのである。彼は其の新進の勇氣を以つて最も筆墨に親しんだ。十九世紀の劈頭に花と榮えた大文學者は既に去り、小說界には眞に秀でた作家は活動して居らぬ。デスレリー (Disrali) エインスウオース (Ainsworth) バルワー (Bulwer) 等、僅かに數人が、當時世間から記憶されて居る作家であつた。こゝに一言注意して置くが、この當時は恰かも英國の革新時代であつた。社會、政治、いづれの方面にも、革新の氣運が滿ち〳〵て居り、社會中流の士人勢力を占めて來た。しかしてデイッケンスは、その生れも、同情も、共に此の中流社會に向つて居たのである。

そこで、何故デイッケンスの作が、かく人々に歡迎されたかと云ふに、話の筋が面白いといふ他に描寫がいかにも巧みで有つた。のみならず、その筆がいかにも同情に滿ちて居つた。大体、この邊がデイッケンスの人氣を得た所以なのである。

一千八百三十七年の夏、彼はその妻と、一人の畫工とを伴ひ十日ばかりベルジユムと和蘭へ小旅行をし、歸ると間もなく『ピクウイック』の稿を終はり、且つ『オリーヴアー』の續稿に筆を染めはじめた。即ち『ピクウイック』の完結されたのは、同年十二月のことであつた。これが完結すると間もなく、彼は『ニコラス、ニックルビー一代記』に筆を染めはじめた。これは翌三十八年の二月のことで三十九年の十月に至つて此の稿を終へたのであつた。同時に、この間に彼は『オリーヴアー』をも完結させたのであつた。

この間、彼は處々にその居を轉したのであつたが、一千八百三十九年の十月に至つて、デヴオンシアイアー、テレースといふところへ引移つた。この住居は誠に立派なもので、廣やかなる花園には、百花その色を競ふて花咲いて居る、いかにも文士に相應しいものであつた。この月、彼は第二女のケートといふのを設け、その翌々年、即ち四十一年の二月、彼は第四子（次男）のオルター、ランダーを擧げた。この間に於いてデイッケンスの思想は種々に變遷したが、この變遷期に顯はれた彼の著作は『マスターハムフレースクロック』といふのであつて、

デイッケンスの活動時代



デヴオンシアイアー・テレースなるデイッケンスの住居

これも大いに世の好遇を受けた。

翌年即ち一千八百四十二年には、宛かも十二ケ月の閑地を得たので、彼はアメリカを巡遊しようと決心した。尤も此の考へは決して今日この頃兆したのでは無かつたのだが、『クロック』の發行されてから後間もなく米國の文豪ワシントンアーヴイングから來た熱心な手紙で、遂に愈〳〵の決心をしたのであつた。

海賊船

正宗白鳥

(上)

今紅色の斑點が海に接した東方の空を染めて水波を色取つたかと思へば、直ぐ其の紋が橙色となつて、其の下の波もそれにつれて色を更へる。それから生々した黄金色の線が飛んで航海中の英國の商船アゴラ丸の白帆甲板及び船側に宿った。水平線に接してゐるので、長い前觸れもなくて、大きな火のやうな黄金色の太陽が、嚴かにあらはれて水や空なる碧空に燃ゆるが如き流動体の寶玉を嵌めた。

其の時突然前の帆檣に上つてゐた張番が甲板に下りて、

「怪しい船が見ゆる、眞向うに」

といふ。この怪しい船の發見は船房に衣服を着更へてゐた船長ドッドに知らされた。彼れは直ちに甲板に來て、張番を呼んで、其の船が何れの方向へ進むかと尋ねると、

「分りません、動くのが見にくいから」

ドッドは船具方に朝食の相圖の笛を命じて置いて自分は甲板用の目鏡を取って、輕やかに前帆柱の留木に上った。其處で、晴れやかな朝の靄を通じて、長い狹い、三角に尖った二檣船が、殆んどアグラ丸の道筋に當って、九哩かなたに横つてゐる。間もなく八時になったが、かの怪しの船は尚ほ動かないでゐるから、アグラ丸と相距る僅かに二哩となった。衆目一齊に其の方へ向って、五六の望遠鏡も眼に當てられた。船長外の人々は意見まち〳〵である。

「あれは水を汲む爲に留つてゐるのだ」。「あれは甘蔗を以て北方から來たマレー人の船であらう」「いや、この海峽を見まもってゐる海賊に違ひない」などと。

船長は衆議を外に、眞面目な顔をして默って船

側に腕を寄せて不審な船を見守ってゐた。

グレートといふ船員は「あれはマレー人の海賊だ」シャープといふ人は突然飛上って腹立しい調子で、「馬鹿な事を。あれが海賊なら、何であんな小い舟に乘つて來やうぞ」といふ。

「旗魚を追つかける鯨と思ふがいゝ」と、フループといふのが微かに嗟で笑ひながら嘴を挿んだ。

船長は望遠鏡を目に當てたまゝ、舳の方にゐる者に半分身を向けて、

「右舷……東南へ進め」

かくてアグラ丸の船路は更ったが、かの神秘不可思議な二檣船は少しも動かない。ちっと陸のこなたに横って甲板上には只だ二三の乘組員のあるのみである。アグラ丸は突き進んで海峽に入って、二檣船を西北の方二哩半のかなたと隔った。

すると、かの船には俄かに人が甲板へ集って、假りに設けてゐた左舷を魔術をかけたやうに、はたと落して、鐵砲は隙間から齒の如くあらはれ、其の大きな前帆は揚げられて、これから仕事に取りかからうとするやうだ。

軟風はさながら天からの接吻のやうで、空は弓形の青玉の如く、海は黄金色の曆を湛えてゐる。この優しい自然の中に、海盜が假面を脫いで黑い齒をむき出して、仕事を始めた樣は恐ろしいものだ猛烈な虎が、思ひも染めぬ旅人に飛びかゝるのもかうであらう。

アグラ丸の船員にも剛膽な人もあったが、新式の危險には驚かざるを得ない。海賊に出會ったはこれが始めだもの。故に彼等の周章方は一通りではなくて、聲高くはないが、底深い悲しげな叫聲を發し、ドッドは苦い顔をして「靜かに〳〵」と制したが、この時ペルフォード夫人は心地好い朝の空氣を吸はんとて甲板に來て、周圍の景氣を賞で讃えた。

ドッドは新來船に少しの掛念をも抱かぬ調子で、

「シャープ。三角帆を揚げよ——左舷だ」。

「左舷」と船側の水夫頭が叫んだ。

「南へ〳〵」といひながら、ドッドは甲板の鐵砲のある方を透して見た。

他の船員は沈んで頼りなさそうに立つて、眼は今にも降り來らん惡運命を惚れ〳〵と見つめてゐるやうだ。それでベルフォード夫人が、この美はしい日に心も晴れ〳〵として、起居擧動の陽氣なのが、切に彼等の神經に觸れて、皆々思はず飛上つた。夫人はいふ。

「皆さん、何とまあいゝ朝でせう。本當に船旅といふものは面白いものですね。この海の美くしいことそれに風は暖かいし。……あれ、あすこに小さい舟が走つてゐる。これ、フレッデー〳〵、坊は船頭さんの足に取つついてゐないで、此處へ來て御覽よ。あの美くしい舟を御覽よ。も少し近ければいゝにね。やあ、あの恐ろしい音は何でせう」

この夫人の何げなく話す恐ろしい言葉は、ある小魔の惡戲のやうに、氣遣はしげの人心を苦しめたが、遂に下の方の恐ろしい打擊と、度外れの響きのするので中絶した。これは船長が水溜の栓を拔いて水が激しく迸り出たからである。

船員の一人たる少尉は部下に命じて、鐵砲を掃除せいといったが、夫人はこの注意を聞かなかつたのか、又は其の意を解しなかったのか、尚はべちや〳〵と話しを續けて、乘組員を驚かした。

この日は美はしさの限りを盡くして、上には蒼い澄んだ天、下にはかゞやき、燦めき、笑ふが如き青い海、それに、その奇麗な罪なき靜かな天を仰ぎ、その微笑める水波を動かす軟風に撫でられて血に湧いた海賊が虎の如く剛膽の英國人を襲ふのである。

夫人は人々の震ひ戰く耳に、節面白き小唄を歌ふてある。

船長はいそ〳〵と甲板へ來て、高い帆を見上げ、船員が善く働いてゐるのを見、四人の少尉には己れの命令を傳達する役目を言ひ付け、ベルフォー

ド夫人をば柔しく說いて船室に入らせ、食事掛に命じて、牛肉とビスケットとグロッグ（水に酒を加へた飮料）とを船員に配らせて重立ったものを膝下に呼び寄せた。

「諸君。この網具や帆ではあの舟を逃げることはとても望めない。だが只た廣い沖中へ出て、其處で帆桁を整えて待つてゐたらば、機會を見て逃げ出されないこともあるまい。今の處では、あの舟が側へ來るまで進行させて、其の上でこの帆布をずた〳〵に裂かれぬやうに帆を少しおろして、最後まで、戰つて見るつもりだ。震へながら甲板の上を步むよりは、溫かい血に塗れて死んだ方がましだからう。」

人々は薄氣味惡るく贊成した。船長の苦しい決心は彼等を動かす。

海賊は更に一哩以上進んだ。乘組員は牛肉とグロッグとを用ひて、互に喋々喃々してゐたが、やがて一同呼出されて甲板に列ばされた。船長はすばしこく來て一揖し大砲の側へ飛んで眞直に立つた。

喇叭が鳴る。「靜まれ」

「あの風上の方から、此方へ近寄って來る船はポルトガルの海賊だ。その性質は好く分ってゐる。あれはどの船へでも飛び込んで船員を殺すのだ。我々は海峽を出る爲に急いだが、今はこの惡人共と戰って、英國船の侮り難いことを知らせる爲に帆をゆるめるのだ。あれは此處で約束する。若しあの海賊船を打破るか、拔け出たならば、褒美として二十磅を與れる。若しあれを沈めたならば、三十磅。又あれを後へつれて港へ入り込んだらば四十磅をやらう。八つの銃は下に備へてあり、三つは左に五つは右にある。若し海賊が仕事するつもりならば、風下から近づくであらうし。さもなければ、惡意はないのだ。筒へは皆彈丸を込めて、短刀も備へてある。」

かくいふと、一同激昂の聲を發した。

船長は尚ほも語を繼いで、

「この足の下には堅固な板を踏まへ、上には正義の神がゐまし、胸には英人魂がやどり、頭上には英國旗が飛んでゐる。いざ舟板の一枚なりともあらん限りは、將に戰ふべしだ。諸君は何と思ふか」と甲板を叩いて說いた。

答ふるものは一同の激しい喝采である。船もゆるぐ計りで、そつと近よりつゝある海賊の耳にも鳴り響いた。海賊等はその帆の低くなつたのを見、又常往恐れを抱ける英國旗を見て、仕合せ惡しと思ひ、大帆を下して、風上に、にぢり寄った。錨纜のあたりに達して前帆を縮めた。次の瞬間に風下の船べりから焰の舌が出て、次いで煙がむら〳〵と舞ひ上り、彈丸がアグラ丸の前帆前を鷗のやうな音をして飛ぶ。賊船は又た舵を轉じて他方の銃を放つたが、彈丸は船を越して彼方の水中に落ちた。

この序開きはこの新來者を恐ろしい者と思はしめた。英國船中には大砲を以て、これに答へんとしたが、ドッドは嚴かにそを禁じて、「こんなに接近して居ては不利益だ」といつた。

（下）

海賊はます〳〵近づいて、續けさまに二つの銃を發射して、アグラ丸の中身を貫き、又た前帆に十八磅の彈丸を放つた。甲板の人々は多くは眞青の顏をする。射られて適中して再び歸らぬ旅につくかと思へば、善い心持のしないも無理はない。次の二連發は、一つは舳の船室の窓を突き拔け、一つは障子を碎いて、一人の水夫に微傷を負はせた。

最早躊躇されず、ドッドは喇叭の音と共に、「打て」と叫んだ。

大砲は恐ろしい音をして發射されたが、少しも目に見えた効果がない。海賊は大砲を避けるやうに〳〵と蛇の如くのたり、二つの重い銃を交る〳〵放つて近づいて來た。アグラ丸は重ね〳〵彈丸を受ける。二つの大砲は騷がしくこれに答へて、か

の賊船の甲板及び船べりを貫いて、三十二磅の彈丸を送ったが、役に立つたのは只だこれのみであつた。

次の彈丸で海賊は英船の舳の帆柱を碎いて前甲板にて水夫を殺した。ドッドは舵を轉じて葡萄彈丸を込めた三大砲を發して數人の海賊を殺し、又は傷け、賊船の前にも幾多の穴をあけた。

だが、この爲に敵はます〳〵用心して、側へ寄りながら敏捷に漕ぎまはつて、今左にあるかと思へば、直ぐ又右に轉じて、ドッドは的を定めるに苦しんだ。

そのうちに、敵丸の爲め網はされ〳〵になる。傷を受けた船員は、うめき叫ぶ。それを慰める餘地はない。かくて煩悶の汗はたら〳〵と額から落ちる。更に沖合へ乘り出したらば、或は救助船を見つけるかも知れぬが、容易に動かれさうにもない遂に船は生命を失うて、風のまに〳〵に水のまに〳〵任すより外、仕方がなくなつた。天運は始め

海賊船

から海賊に味方をしたが、彼れは帆柱を射倒し、船長の側に立つてゐる少尉を殺し、英人に大聲揚げて悲しませた。海賊は凱旋あげて騷ぎ、アグラ丸は殆んど微塵動きもせず固着して、激しい戰爭は起る。

「あの帆柱を打て」とドッドが大聲に命じて小銃を其の方へ放つた。英人は既に死物狂ひである。腰まで裸となつて、豹の斑點のやうに血に染って闘の聲をあげて彈丸を放つ。

賊船は大膽不敵なのにも關はらず、最初の勝利の甲斐なかつたのにがつかりして、大帆を揚げて速に逡巡りした。英船員はこれは屹度逃仕度をするのであらうと蔑むやうに笑つて、一つ鬨の聲を揚げたが、船長ドッドは善く敵の心を察して、これは前よりも一層激しく攻撃することの出來るやうに距るのであらうと思つた。

折しも島の彼方から馳せ來る一艘の船がある。それは二檣船であった。或は賊船を助けんとて來る

のであらうか。

黒い旗が其の船頭に翻るのである。ドッドが、この滅亡の神の來るのを見つめて、心も消ゆる計である折、側の一船員が再び發砲した。ドッドは眞青になって、嚴かな調子でさゝく、「彈丸は殆んど盡たものを」と。

ドッドは或者の手を握りしめ、この船に最後の焔を投げつけんと寄せ來る海賊の仲間を指して、剛毅の人間の失望した時の常のやうに靜かにいふ、「短刀を執れ」。其の聲未だ終らぬ間に銃手長は矢庭に最端の銃を取って、敵船へ放ち、まんまと一人の海賊の頭に當て、其頭は風に吹かれて海中に落ちた。のみならず彈丸の余力は尙は賊船の前帆を打倒して、全船がよろ〳〵となった。勝ち誇った船員は又た歡びの聲を放つ。

ドッドは「靜かに〳〵」といって、又早く「帆を揚げよ」と命じた。

かくて千創万傷を蒙った船を引いて逃れんとした

が、八十ヤードの近くに、これも不具となった賊船を見て、今一發を以て破碎して呉れんずと思ったが、彈丸の殆んど盡き、且つや他の賊船の次第に近づくを見て、見す〳〵この快事を思ひ止った。この英國船の有樣は今も憐れむべきものであって若し風を後にして走ったならば、新賊船に遇ふであらうし、又た風に向って走せたらば、速力遲くして、かの碎かれかけた賊船が再び破損を繕ひ勇氣を起して、新賊船と合して來るかも知れぬ。しかも彈丸は乏しく、船員は乏しい。

ドッドは眼を八方の水平線に配つて、救助船を求めた、海は蒼々として一物の眼を遮ぎるものもない。燦耀たる太陽ば今や雲隱れして、雨はぽつ〳〵降り出す。ついには風もひゆう〳〵と歌ひ始めて少しは波も立つ。ドッドは失心した人のやうに、「此の方へ漕げ」と命じた。

風は西北西から吹き、一つの海賊船は風と水との間に止つて、網具や帆檣を修繕つてゐる。又一の

の船は餌食に餓えて東北から來る。後者は英國船を去ること數町となるまで追つゐて、早速舵を轉じて、位置を變へて、數發の彈丸を放つた。

ドッドは敵の待ち設けたやうに其れに應ずる代りに、火煙に取りまかれたのを機會に、舵を轉じて進んだから、悪くすると小さい賊船はこれにぶっつかって海の底に沈むかも知れぬ。

賊船は大膽に、すばしこく、舵を風下に轉じて發射する餘地を作つた。だが其の廻轉する間を待たず、英船は五つの銃を放ち、次いで大砲を放つたからこの新賊船も大帆を折られ、死人手負ひは彌重なって喚き叫ぶ聲は凄じい。

英船はやう〳〵風を突き破つて進み、よろめく船を後に殘したが、これも長くはない。海賊は死物狂ひに發砲して、アグラ丸の大砲を倒し、船員を殺し、前帆に穴を開けた。かくて手負ひを下の船室に送り、死人を海中へ投げて、つッかけ〳〵英船を撃つ。アグラ丸は寂として聲なし。最早放つべき彈丸もないのである。其の上、既に生物とては、甲板上には只二人の船員と一船員とあるのみだ。

この大きな我慢強い船は二つの大敵に圍まれ——一つは其の行手の道に當つて破壞者として、一つは其の船途の後から復仇の叫聲を從ひ、其れに飛びかゝらんとす……遂に兩方の海賊の聲が止んで、海は一時沈靜となつた。

海賊等はこの英國船の船長は只ものではない我慢強い畏るべき人であると氣付いたが、今更躊躇すべくもあらねば、叫び罵つて大砲小銃を放ち、百雷の一時に落ちるやうであった。しかしアグラ丸は靜まり返つて、ちっとも音をしないが、寧ろ音のない方が薄氣味が惡く恐ろしいのである。

「右舷！」とドットが手を動かしながら靜かな落付いた聲でいつた。

「右舷！」と舵取がこれに應ずる。

海賊は少し前へよろめいて、英船の前甲板のもの

がドッドに手真似で相圖をする。

ドッドは靜かに「左舷」といふ。

この危機を見て、後の海賊は意地惡るく射撃して舵を取つてゐる一人を粉微塵に打ち碎いた。

ドッドは目顏で其れと知らせると、甲板上の他の一人がこれも默つて、死んだ仲間の位置を占めて舵を取つた。

黃色のマレー人、鳶色のポルドガル人の兩海賊船は散々に打碎かれて、今は死際の豹の如くなつて有らん限りの銃を放つて、火藥の煙、血汐の煙が英船を立籠めて、遂に彈丸の破片が船長に當つた。

「頭と胸とを打て」と賊船は叫んで船長を的にしたから、船員は船長を避けしめんと、つと進んだが、未だ其の手に觸れぬ前に、彈丸は飛んで畏敬すべき船長は倒れて、血汐はさつと船員の衣に迸つた彼等は船長を介抱して漸く息吹き返させたが、彼はシャープといふ者の顏を一目見て「左の帆を」

シャープは「船長、船よりも貴下の方が心配だ」といつたが、ドッドは手を擧げて空を打つて、細い聲ではあるが熱心を籠めて「左の帆を揚げよ。」かくてシャープは船員に命令して、全力を盡くして其の帆を揚げさせた。

未だ傷手を負はぬ者共が帆索の方へ集まる間に、外科醫は急いで來て傷を診たが、ドッドは血に染つた頭を濕つたハンケチにて縛つたまゝ、眼はかの賊船を見詰めてゐる。それで弱つた聲を力の限り大きくしていふ「彼等は濕つた毛布を甲板の上に引上げた。外の者は顧みるに足らんのだが、あの溺れた者が船長ならばもう占めたものだ。さもなければ早く順風の吹いてくれねば困る」。と。

二檣船が英船の發砲の爲に水に落ちた者を一人々々救ひ上げてゐる間に、英船は前帆、大帆、三角帆を大急ぎで張上げて、走らせた。

アグラ丸が天の賜物たる、折善く吹來る順風に一哩以上進んだ頃、二檣船は漸く船を整へて跡を追

ふたが、手ひどく破られてゐたから、中々追付く所ではない。やがて風立ち波湧き、賊船は一所に顧無くもがく。

ドッドはこの世の人でない聲をして、「風よ吹け、海よ荒れよ」といふ。

かくて一時間經過したが船の位置は變らない。船長ドッドはちつと望遠鏡で見つめてゐたが、暫らくして其れを傍らに置き、非常に激昂した風て、よろめき〳〵立上り、一瞬時は壯かりし頃のやうな男らしい聲をした。今にも沈みさうな憎むべき海賊等を見て、拳を握り緊め、凄い笑を洩らして叫ぶ。

「さらばみよ。ホルドガルの海賊ども、戰つて勝つて、速力で勝つた。大ブリテンの男の子の腕前を善く覺へて居ろ」と。

（この物語は英國十九世紀の小說家チャールス、リードの作で實話である。）

海賊船

珍書展覽會

日は十月廿二日、時は正午から四時までの間、日本文庫協會の主催にかゝる第一回珍書展覽會は、東京帝國大學附屬圖書館で開會された。折しも天氣は快晴、しかも場處がらのことではあり、その上、讀書熱心家も少なからぬことて、定刻の初めから終りに至るまで非常の入場者があつたとのことである。ところで此の展覽會の性質といふのは、讀んで字の如く、世間に稀れな珍らしい書物を陳列して同好の人々に見せるのが主意であるから、和漢洋いろ〳〵の珍書が、いろ〳〵の人々から出品されてあつた。先づ特別出品としては大隈伯から五六點。洋書の珍らしいのを出品されたのは本會講師坪井理學博士、岡田法學博士、田中阿歌麿氏等、和書には本會講師關根正直氏、角田眞平氏、赤堀又次郎氏、千秋男爵、菊池晩香氏等、その他早稻田大學圖書館、東京帝國大學圖書館、帝國圖書館、成田圖書館、岩崎圖書館等から、いろ〳〵の出品があつた。

『烈女阿藤』を讀む

村羊生

一

▲はしがき▼

平安の朝に紫式部あり、明治の聖代才媛頻出、稱して蛯茶式部といふ。

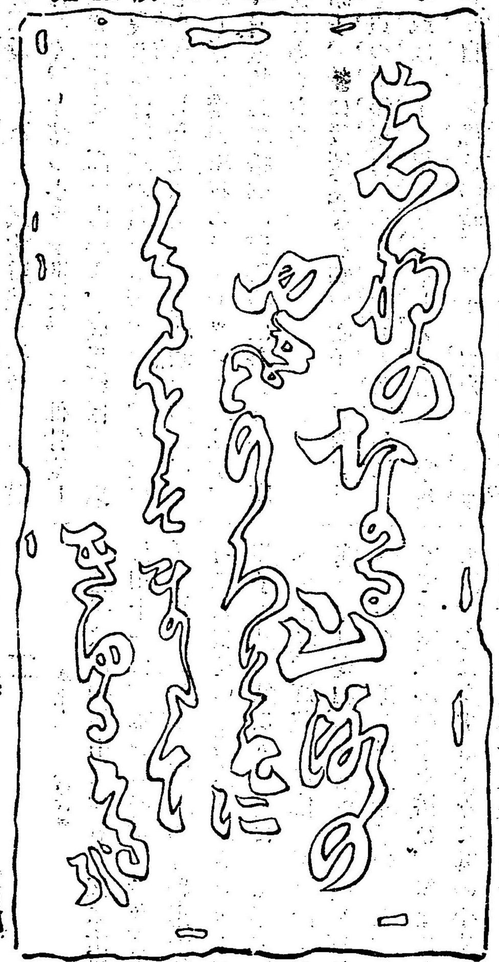
色もゆかりの藤色むらさき、眼覺める許りに嬋妍かなる矢飛白の振袖丈にもあまるべふ。光りを包む蛯茶カシミヤの袴裾長く、凝飾たるはお納戸鐵色、古代紫、紐の結びにも心をこめて、編上靴の縧の飾り、配合はかぎる黒靴足袋、しやなり乎たり、くなり乎だり。畫家あり、思ひはたての欄干に、ちぎれゆく雲の行衛それとなく見送る彼の女を描けば、畫題『ゆく春』は永く是れ白馬會、美術院の絶品白眉たり、詩人あり、紫、菫、白萩、白桃、あらゆる渇仰の文字をならべ、孃が一瞥の眷顧には郎が百年の生命を惜まずとまで尊崇す。

是に於いてか寫實派理想派の小說家の主題は期せずして是れ蛯茶式部なり。且つて讀賣新聞紙上、『魔風戀風』の一篇は確かに一時洛陽の紙價をさへ高かめたりと言ふに非ずや。

若し夫れ是等才媛の搖籃としては、小石川高田の日本女子大學を筆頭として都門猶ほ百數を下らず。就いて學ぶ者幾千人。社會的の事業としては東洋婦人△△會に、○○慈善音樂會に、喃々たる矯音は至る處大喝采を博し、日曜日の教會堂には必らず彼等の美くしき一團体が隱然覇權を握りて一方に睥睨するを見るべし。『女達』は『御婦人方』となり、音樂演奏會のプログラムには、演說△△△△氏と並びて、獨唱○○○○子孃と崇めらる。女學頌德、婦權伸張の雜誌小冊子は常に書肆の店頭山をなして、偏へに是等才媛の一顧を希ひつゝあるに非ずや。……あゝ古往今來我國歷史ありてより二千五百有餘年、神武東征都を橿原に奠めてより、吾が帝國の女學かくの如く隆盛に、

婦人の權力かくの如く擴張せられしの時、果して何れの時代にありしか。

然りそれ此くの如く隆盛也。而も深く顧みて其の眞相に徹すれば未だ俄かに首肯し難きものなくんばあらず。所謂一利のある所一失の生ずるを免れず、形骸の進歩は必ずしも其の精神生命の發達に伴はざる事多きを奈何せむ。借問す卿等女學隆盛の嘔歌者よ、卿等が呼んでしかく刮目すべき女學の勃興なるもの、遂にわが日東櫻花君子國の婦德に向かつて何等の加ふる所ありや。非らず、其の標榜する所の淑女として良妻として賢母として何の貢献する所ありや、余は疑なき能はざるなり。



藤子の辭世（自筆）

俗謠あり、「高い山から谷底見れば、瓜や茄子の花盛り……」言ひ盡くして餘りあるを覺ゆ。あゝ瓜の蔓には茄子が生らず、三年たつても犬の兒は犬の兒也。稱して新舊思想の過渡時代に於ける現象といふか。諒す、而も――あゝ而も